
きみのてのひら

やくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみのてのひら

【Nコード】

N3075A

【作者名】

やくも

【あらすじ】

とある研究施設の研究員、阿久津はある偶然からその事実を知ってしまう。事実を知った阿久津は、一人の少女を連れて研究所を脱走する。そしてそれが、全ての始まりだった。あるとき、彼は少女に望まぬ生を与えていた。あるとき、少女は彼から望まぬ生を受けていた。たったそれだけのことが、二人の運命を変える。あらかじめ、終わりを決められた少女。少女の終わりを決めた青年。これは、二人の物語。歴史に残ることのない……例えるなら、てのひらの中にすっぽりと隠れてしまいうくらいの。小さな小さな、物語である…

⋮
○

第一話：終わりが始まった夜（1）

第一話

1

途中何度も後を振り返って、俺はようやく車のスピードを落とすた。

制限速度をあつさりとは無視して、真夜中の見通しの悪い街道を走ることすでに一時間。

舗装されたアスファルトの道は、いつの間にか砂利にまみれた林道へと変わっていた。

車は今なお緩やかな傾斜を上り続けているが、ガソリンがもう底を付きそうだということをランプが告げる。

もう少し、もう少しのはずなのだ。

記憶に間違いがなければ、この近辺に目的地であるその場所があるはず。

とはいっても、それも所詮人づてに聞いた記憶。

俺自身はその場所に一度も訪れたことはないの、はっきりいって可能性は低くなる一方だ。

だがそれでも、ここまできたらそこにしか身を寄せて置ける場所はない。

決して安全とはいえないだろうが、今からエンスト覚悟で一般道へと引き返すリスクに比べれば十分マシと言える。

いや、これから行方であろう籠城のような行為に比べれば、車など投げ捨てて自分の足で走ったほうがいいのかも知らない。

しかしそれも、俺が一人で行動するのならの話だ。

「……」

運転席のシート越しに、俺は後部座席に目を向ける。

人里はなれた林道の中で、しかも真夜中。

視界は悪く、わずか数十センチの距離でも目をしかめなくては何も見えてこない。

そこに横たわるのは、何も知らない一人の少女の姿。

眠っているのか、それとも気を失っているのか、それすらも分からない。

すでに死んでしまっている……という可能性は、多分ないと思う。少なくとも、俺が彼女を抱きかかえたときには、まだ彼女の体温と心臓の鼓動を感じ取れた。

それから大体一時間が経過した。

我ながらかなり荒っぽい運転を繰り返してきたとは思いが、恐らく問題はないだろう。

俺は静かにドアを開けて、すっかり夜がふけた地面に立った。

周囲は一帯が雑木林で囲まれ、吸い込まれそうな夜空はどこまでも蒼く黒い。

山の上だというのに星一つ瞬かないその夜空は、自分の先行きを暗示しているようでひどく不気味だ。

実際俺は、追い詰められていた。

今現在こうしているに至る経緯を思い返せば、それは当然のことだろう。

一般的な見解から言えば、俺のした行為は誘拐となんら変わりのないことなのだから。

もちろん、主犯は俺。

そして被害者は、後部座席で横になっている彼女だ。

彼女は何も知らないまま、俺にここまで連れてこられた。

俺は何も知らない彼女を、ここまで連れてきた。

自分のした行動が間違っているかどうかと問われれば、俺は間違っていないと主張しただろう。

しかしそれも、あくまで一時間前の話だ。

今の俺は、あまりの行き当たりばったりな無計画さに呆れるばかり。

とても普段の自分からは考えられない行動の数々だった。

そもそも普段通りの俺なら、こんなバカな行動に駆り出されたりはしない。

自責と後悔が後押しする中で、不安と憔悴が汗の珠になって皮膚を伝い落ちる。

その跡を夜の風が吹き晒して、涼しさと一緒に寒気を運んでくる。

今でも心臓が高鳴って、情けないことに手の震えが止まらない。

運転してる間も、ずっとそうだった。

万一事故でも起こそうものなら、全ては水の泡になる。

俺がしたバカな行動の一連も、そのバカな行動に無理矢理付き合わされている彼女の運命も。

「クソッ……!!」

震える両手を組み合わせ、俺は車の屋根に顔を伏せる。

考えれば考えるほど、事態は悪い方向に流れていつてしまう。

必死の思いでやってきたこの場所だったが、はつきり言ってみつかるのは時間の問題だろう。

しかしそれでも、人の目に触れなければいくらかはマシだろうと思っただけでここまでやってきた。

だが、それもすでに手詰まりに近い。

あるべきものがそこになければ、もう何もできないのだ。

抵抗することも、それどころか逃げることもさえない。

もう後戻りはできないのだ。

たったの一時間程度で、俺の運命は信じられない方向へと進んでいたのだ。

俺は車に戻り、もう一度エンジンをかける。

何度か繰り返すうちに、かろうじて車体は息を吹き返す。

その車体を、俺は林の中へと進ませる。

地面は不安定極まりなかったが、それでもどうにか押し進む。

林道から数十メートルほど進んだところで、俺は車を停車させてキーを抜いた。

もう車は使えない。

運転席から出てドアを閉じ、俺は後部座席のドアを開けた。

相変わらず彼女は目を閉じたままだった。

そつと彼女の手を取って、脈を確かめる。

確かな鼓動が伝わってきて、俺は音もなく小さなため息を一つ吐いた。

それから静かに彼女の体を引き寄せ、車から下ろして背に負ぶる。

ここから先は歩くしかない。

真夜中で、さすがに気温も低くなっている。

一刻も早く身を寄せて置ける場所を見つける必要がある。

俺は正直、体力にはあまり自信がない。

つまり、俺が力尽きればそこまでというわけだ。

希望と絶望では、絶望がほとんどの割合を示していた。

それでも、行くしかないんだ。

決めたんだ、彼女を抱きかかえながら走った、そのときから。

絶対に守ってやると、決めたんだ。

俺は闇を睨むようにして、底なしの奈落へと続く道を一步踏み出した。

小石と砂を踏み潰す音が夜の中に響いて、林の奥深くへとこだましていった。

後戻りなんて、もうできっこない。

抗うしかないんだ。

緩やかな傾斜を歩き始める。

一寸先は闇。

希望の光は、どこにある？

そんなものは、最初からどこにもありはしなかった。
あったのは、纏わりついて離れない絶望だけで。
けれども。

たとえそうだったとしても。

「……」

ふいに感じた、小さな温もり。

気がつけば、背中の彼女は小さな呼吸を繰り返していた。
その消え入りそうな息吹が、どうしようもなく苦しくて、切なくて、
悲しくて。

俺は無言のまま、奥歯を噛み締めた。

そして歩き出す。

闇の中へ。

希望はない。

でも、絶望ばかりでもない。

背中の少女だけが、唯一の希望だった。

2

薄暗いその場所で、少女は目を覚ました。

起き上がろうとすると、ふいにめまいがしたような感覚に襲われ、
目の前の景色がぼやけてくる。

重くのしかかる頭を支えながら、少女は少しずつ周囲に目を向ける。
薄暗い部屋。

灯りは枕元にある小さな電灯だけで、部屋の中には窓は見受けられない。
ない。

壁も天井も、部屋そのものの薄暗さが強調して灰色一色に包まれているように見える。

今の今まで少女が横になっていたベッドだけが、電灯のおかげで白

い色だということがわかる。

少女は記憶が途切れ途切れで、現在の自分の置かれている状況がどういふものなのかよく分からない。

だが少なくとも、体の自由も奪われていないし、怪我らしい怪我也してはいないようだ。

気分だけがあまり優れてはいないのだろうか、今感じためまいがまだ後を引きずっている。

ベッドから体を下ろすと、軋む音が闇の中に響いた。

意識せずとも、少女は誰に言われるでもなく足音を殺しながら、この部屋のドアへ歩き出す。

細く開いた隙間からは、微かに光が漏れていた。

ドアノブを握る。

鍵はかかっているようないようだ。

そつとノブを引いて、少女は顔だけで部屋の外を見る。

ドアの外は、左右にどこまでも広く続く廊下だった。

ガラス窓が同じようにどこまでも続き、その外からは中途半端に欠けた月が覗いている。

少女はその幻想的な絵に思わず見とれ、小さく口を開けて窓の外を凝視してしまう。

月明かりに照らされた少女の影が、実際の身長は何倍も長く廊下の奥へと伸びていく。

月を見上げながら、少女は思った。

月が出ているということは、少なくとも今は夜、もしくは真夜中ということになる。

窓ガラスに映りこんだ自分の格好を見ると、少女は実にラフな服装をしていた。

紺色のトレーナーに、茶系のプリーツスカート。

トレーナーのほうはサイズが大きいのだろうか、袖口から指先しか出てこない。

そんなどこにでもいるような格好をした自分が、一体こんな時間に

どこで何をしているというのだろうか。

「ここ、どこなんだろう……」

初めて口にした疑問は、なぜかどうしようもなく自分を不安にさせるものだった。

思い出そうとして、少女が廊下の真ん中に立ち尽くして思考を巡らせ始めた頃

「……？」

ふいに廊下の向こうから、カッンという物音が聞こえた。

石ころが落ちるような、地面を転がるような、そんな他愛のない音だけど、静か過ぎる廊下の奥から聞こえる物音は、少女を震え上がらせるには十分なものだった。

一瞬のうちに恐怖感が芽生え、少女は声を殺して壁に背中を預けることしかできなくなった。

動けば足音で気づかれてしまう。

だから少女は、さっきまでいた部屋の中に駆け戻ることなんてできなかった。

カッン、カッン。

これは、石が転がる音なんかじゃない。

紛れもなく、人間の足音だ。

それがだんだんと、近づいてくる。

嫌だ、怖い…。

少女は身をすくめながら、その足音がどこか別の方向に遠ざかっていくことを願った。

しかしそれに反して、足音は一步また一步とこっちに近づいてくる。息が止まりそうになる。

曖昧な記憶と恐怖がさらに混乱を招き、少女の精神を圧迫する。

カッン、カッン、カッン。

足音はさらに近づく。

もう、その距離はすぐそこまでやってきていた。

気配を感じる。

人間特有の存在感。

消しても消しきれない、拭っても拭いきれないそれ。

距離が、限りなくゼロに近づく。

月明かりに照らされて、その足が少女の視界に映る。

黒い靴。

そして黒いズボン。

闇が吐き出した影に怯え、少女は頑なに目を閉じる。

カッン。

「……！」

そして足音は、ピタリと止まった。

少女のすぐ近くで。

目を閉じていても、ありありと分かる。

その人は、今日の前にいる。

「……」

沈黙が二人の間を右往左往する。

目を閉じている時間というのは、どうしてこんなに長く感じるのだろうか。

一分経ったのか、それとも十秒すら経っていないのか。

少女が恐る恐る閉じた目を開けようとした、それより一瞬早く、その人物は口を開いた。

「気分はどうだ？」

「……え？」

その声色はややぶつきらばうだったが、今まで感じていた恐怖などを全て取り払ってくれるような優しさを持っていた。

間の抜けた一声で返してしまった少女は、ゆっくりと目を開く。

少女の目の前にいたのは、一人の青年だった。

少女よりも頭一つ分ほど高い背丈。

黒い靴に黒いズボン、少しシワの浮かんだ白いワイシャツで、ネクタイだけがだらしなく首からぶら下がっている。

その手には何かトレイのようなものを抱えており、乗せられた二つのコップから湯気が立ち上っている。

目つきはあまりよくないが、不思議と怖いという印象は受けない。かけられた言葉がそうだったからだろうか。

何にせよ、少女は目を丸くしてまじまじと青年の顔を凝視してしまう。

さすがにその態度が気になったのか、青年が再び口を開く。

「どうかしたか？」

「え？ あ、いえ」

「俺の顔に何かついてるのか？」

「いえ、そういうわけじゃないんですけど、その……」

しどろもどろになる少女を見て、青年は少し首をかしげる。

会話もまともに続けられなくなって、少女は急に恥ずかしいような情けないような気持ちになって、無言で俯いた。

「……まあいい。ここは冷える。とりあえず中に入れ日下部」

「……え？」

ふいに違和感を覚える。

青年の言葉が耳を伝わり、脳の中に情報として吸収されるその過程。何か、言葉では言い表しにくい矛盾が生じたような気がした。

「どうした？ 何をしている？」

「あ、す、すみません……！」

名前を呼ばれたことに気づいたかのように、日下部と呼ばれた少女は小走りに部屋の中へと駆け込んだ。

部屋に入って、背中越しにドアを静かに閉めた。

パタンという音が、水面に広がる波紋のようにゆっくりと壁や天井に染み込んでいく。

……あれ？

湧き上がった一つの疑問。

たった今感じた、違和感の正体。

口には出さず、日下部は胸の中で自分自身に問い質す。

私、自分の名前を覚えてない……？

答えてくれる自分はどこにもいない。

消えかけていた不安が、再び小さな渦を巻いて胸の奥からこみ上げてきた。

3

小さなテーブルを挟んで向かい合い、日下部と青年はコーヒーをすすっていた。

コーヒーはさきほど青年がトレイに乗せて運んでくれたもので、夜の空気で冷えた体を芯から温めてくれる。

ブラックで少し苦かったが、日下部はカップを両手で持ち上げて、冷ましながらず口にしていた。

「どうだ？ 落ち着いたか？」

「はい。あつたかいです」

さつきからお互いに二言三言交わしては沈黙の繰り返しだったが、日下部もここにきてようやく気持ちが落ち着いてきた。

少なくとも、今日の前にいる青年は自分に対して危害を加えるような存在ではないようだ。

それが分かっただけでも、精神的に安心するには十分なことだったが、まだ日下部には今時分が置かれている状況というのがよく分かっていない。

真つ先に思い浮かぶ疑問は、まずここがどこでなぜ自分はこんな場所にいるのかということだった。

実は先ほどから何度も声をかけようとする機会を伺ってはいるのだが、そのつどにタイミング悪く青年が口を開く。

青年も口を開くたびに日下部の身を案じてくれている言葉をかけてくれるので、「そんなことより」などと言うわけにもいかない。

しかし結局、青年の言葉に対して日下部は相槌を打つか簡単に返答を返すだけで、会話はまったく続かない。

青年は会話が終わるとすぐに何かを考え込むようなそぶりを見せるので、それがさらに話しかけることをためらわせるのだ。

だが、いつまでも胸の内にくすぶっていることを吐き出さないわけにもいかない。

現状を知る権利くらいは自分にもあるだろう。

日下部は小さく深呼吸を一つすると、手にしたカップをテーブルに置き、意を決して青年に話しかけた。

「あ、あのっ」

「ん？ どうした？」

反応こそ一瞬遅れたが、青年は穏やかな口調で聞き返した。
日下部の態度に気づいてか、彼も手にしていたカップを静かにテーブルへと戻した。

「その、いくつか聞きたいことがあるんですけど……」

「何だ？」

「えと……まず、ここは一体どこなんですか？　どうして私は、こんなところにいるんですか？」

まずと言った割には、同時に二つも問いを投げかけていた。

しかし日下部はそんなことに気づくはずもなく、やや身を乗り出すようにして青年の返答を待っている。

一方、聞かれた青年はすぐに答えるに至らず、少しの間何かを考え込んでいたようだった。

しかしやがて、疎ませた肩の力が抜けるように、青年はその重い口をゆっくりと開いた。

「一つずつ答えていこう」

日下部は頷いた。

今はとにかく、少しでもいいから情報がほしい。

「まず一つ目。ここは人里から離れた山岳地帯にある研究施設だ」「研究、施設？」

「正確には、かつて研究施設として使われていた場所だ。今はもう廃棄されて、使われてはいない」

「じゃあ、どうしてそんな廃墟みたいところに私……私や、あなたがいるんですか？」

「俺だって、別に来たくてこんな辺鄙なところに来たわけじゃないし、ましてお前を連れてきたわけじゃない。仕方がなかったんだ。」

苦肉の策とも言わべきか……追っ手を振り切って身を潜めるには、俺の心当たりはここくらいしかなかったんだ」

言い終えて、青年は再びコーヒーを口に含む。

一方日下部は、また頭が混乱し始めていた。

最初の質問の答えまではすんなり納得できた。

だが、二つ目の返答は逆に日下部の疑問を増やすこととなってしまうた。

仕方がないとか苦肉の策とか、拳句の果てには追っ手を振り切るとか。

追っ手がいるということは、自分、もしくは自分達は追われている身ということなのだろうか？

だとしたら、何に追われているというのだろうか？

そして、追われる原因とは何なのだろうか？

やはり、消化された疑問よりも多くの新たな疑問が浮かんでくる。

そんな言葉を聞いても、日下部にはどうしたらいいのか分からない。

結局また青年に対して、詳しく問いを投げることになってしまう。

啞然としたままの表情で、青年にまた問いかけようとしたところで、
またもや青年が先に口を開いた。

「……すまないと思ってる」

「え？」

言いかけた言葉を全て飲み込んで、日下部は青年の言葉に耳を傾けた。

それは単純で、何気ない一言のはずなのに、ひどく日下部の胸の奥を揺さぶった。

どうして謝るんだろう。

私はこの人に、何か謝られるようなことをされたのだろうか？

……分からない。

自分の頭の中にある全部の記憶を引っ張り出しても、この人に謝られるような出来事はない。

だとしたら、これは彼の独り言なのだろうか？

彼が何か思うところがあって、無意識のうちにそれを口に出しているのではないだろうか？

でもそれなら、どうしてこんな痛そうな、辛そうな、悲しそうな目をするのだろう。

それも、まるで私を見ないようにするために俯いたりして。

しかし考えたところで、今の日下部には何も分からなかった。

ただ、目の前の彼がとても苦しんでいるように見えて、不思議と日下部の胸の奥も痛んだ。

投げかけようとしていた言葉は虚空に消え、行き場を失ったように日下部は膝の上で手を組んだ。

「俺なんかが、軽々しくこんなことを口にする資格がないのは分かっている。だが、それでも……」

青年は唇を噛み締める。

苦痛の中で、必死に言葉を探しているようだった。

日下部はただ彼の顔をそっと見上げることしかできず、また彼の言葉を全部理解することも適わなかった。

それでも、彼の自分を責めるような表情を見れば、その言葉を聞き流すなんてことができるはずもなかった。

「お前だけは、必ず俺が守ってみせる。何に替えても、絶対に」

トクンと、日下部の心臓が静かに高鳴った。

気のせいかな、体温もわずかに上昇して、頬の辺りが火照っているようにも感じる。

それはきつと、日下部に限ったことではなく、異性からそんなことを言われた時の反応としては至極一般的なものだろう。ただ何か、この人の言う言葉には特別な意味が含まれているような気がする。

まだまだ分らないことは山積みだ。

でもきつと、この人は聞けば答えてくれるはず。

今の私たちがおかれている状況についても、そうなるに至った原因についても。

そして、私が失っている私自身の記憶についても、この人はきつと知りうることを全てを語ってくれるだろう。

それに何より、こんなにも優しく心強い言葉をかけてくれるのだから。

「……はい」

しつかりと彼の目を見て、日下部は答えた。

怯えていた自分を不安から開放してくれた彼を、今度は日下部が安心させるために。

受け取って、彼は静かに目を伏せた。

電灯の小さな灯りだけが頼りの部屋に、二人分の影が小さく踊る。

「すまない……ありがとう」

そう言った彼の背中が、ひどく小さく見えた。

日下部は小さく頷いて、すっかり冷めてしまった残りのコーヒーを、もう一口含んだ。

4

日下部はベッドの中で体を縮めていた。

あのあとはお互いに沈黙が続いてしまい、やがて彼が今日はもう寝ると言い出したので、私はそれに従うことにした。

とはいっても、ほんの一時間くらい前まで眠っていた体がそんなに早く寝付けるはずもない。

すっかり夜の闇に目が慣れてしまった私は、無機質な天井を眺めながらぼんやりと考え事をしていた。

正直な意見を言えば、まだまだ彼に聞きたいことはたくさんあった。聞けば聞くほど疑問が増えていくかもしれないが、何も知らないことに比べればずいぶんマシだと思う。

やはり、どうしてこんな状況に陥っているのかということも気になる。

それに私はまだ、彼に私の記憶が実に曖昧でばやけているということとを伝えてない。

もちろん、自分の名前すら覚えていなくて、彼がそう呼んだから初めて知ったということも。

もう一度日下部は頭の中を整理する。

今自分に与えられた少なすぎる情報をもとにして、雑ながらも推測を立てていく。

気がついたとき、そこはもう今寝ているベッドの上だった。

時刻は真夜中で、ここはどこかの山岳地帯にある、かつて研究施設だった場所らしい。

一緒にいたのが、例の青年だった。

最初は登場の仕方に驚きこそしたものの、少なくとも彼は危害を加えるようなつもりではない。

その彼は、どうやら何かに追われているらしい。

そしてその追われる側の立場の人間に、どうやら私も含まれているらしい。

ここまでを簡単に整理すると、つまり彼は、私を連れてどこか別の場所からここへ逃げてきたと考えられる。

しかし、それは一体何のために？

彼の口調からするに、事態は決して生易しいものではないようだった。

だとすると私は、まさか誘拐されてきたとでもいうのだろうか？

いやしかし、一緒に逃げてきたとなるとそれは誘拐ではないようにも思える。

じゃあ、任意同行なのだろうか？

だとしたらそれは、何のために……？

だめだ、分からない。

情報が少なすぎる。

それも当たり前なことなのかもしれない。

私の中に残された記憶なんて、おそらく時間に見れば半日ほどにも満たないのだろう。

そんな状態じゃ、いくら思い出そうとしてもたかがしれている。

考えることをやめて、私は静かに目を閉じた。

目の慣れた暗闇とは違う別の闇が、そこには広がっていた。

途端に私は、まるで何かに怯えるかのように慌てて目を開いた。

「……っ!？」

ほんの数秒の間に、私は額に汗の珠をいくつも浮かべ、背中にもかすかに汗を掻いていた。

ドクンドクンと、心臓の鼓動が必要以上に高鳴っている。

呼吸が荒くなり、体全体が熱を帯びているようだ。

息苦しささえ覚え始めて、私はベッドから体を起こした。

寒さから身を守ってくれていたタオルケットを跳ね飛ばして、呼吸を整えるために胸に手を当てる。

ドッドッドと、高鳴った心音が伝わってくる。

寒気すら覚えた冷たい空気が、今は心地よく感じてしまっくらいだった。

「何、今の……」

胸に添えた手を握り締めて、日下部は一人呟く。
それはほとんど条件反射のような行動だった。

目を閉じた瞬間、急に何かに首を鷲掴みにされたような息苦しさを
感じた。

息が止まり、空気を吸い込めなくなる。

悲鳴を出そうにも、のどが枯れて声も出ない。

意識がだんだんと薄れて、そのまま目の前が真っ暗になりそうにな
って……。

目を開けると、それらの異常は全て何事もなかったかのように消
え去っていた。

やはりここはベッドの上で、真夜中で、私は部屋に一人つきりだっ
た。

焦るように空気を吸い込むと、今度はちゃんと肺の隅々まで酸素が
行き渡ったようで、私は胸を撫で下ろした。

しばらくそのまましていると、やがて心音も正常な鼓動に戻っていっ
た。

一瞬前の出来事が嘘のように、私は汗一つ流さずにタオルケットに
包まったまま、天井を見上げていた。

「夢、だったのかな、今の……」

私はどうしようもなく不安になった。

改めて考えてみれば、記憶がない、もしくは欠落しているというこ
とはなんて恐ろしいことなのだろう。

知っているはずのことを知っていない。

見たはずのものを覚えていない。

聞いたはずのものを覚えていない。

積み重ねてきた全てのものが、ある瞬間を境にしてゼロへと戻る。

それは、とても恐ろしいことだった。

どうして今の今まで、私は悠長に初対面同然の人と何も感じずに話せていたんだろう。

あの人は私の敵ではないようなことを言っていた。

私のことを守ってくれると言っていた。

でも、その言葉は一体どこからどこまでが真実で、どこからどこまでが偽りなんだろう？

信じたいという気持ちは確かにある。

けどその一方で、疑うことを知らなくてはいけないのだ。

何度でも言おう。

私は今、本当にこんな場所で眠ってていいのだろうか？

この場所から一秒でも早く、逃げ出すべきではないのだろうか。

今になって思えば、彼は私の名前を知っているけれど、私は彼の名前すら知らない。

その名前だって、彼が適当に並べ立てただけのものなのかもしれない。

彼がもし、私が記憶を失っているという事実を知っているのならば、身近な人間を演じることはたやすいことだ。

そうやって少しずつでも、時間をかけて信頼を得ようとしているのだろうか。

いや、そもそも信頼など最初から必要すらないのかもしれない。

ある程度の期間、私をこの場所に監禁しておくことが目的だとすれば。

だとすれば、たとえ見ず知らずであつたとしても二人しかいない現状から動くこうと思うことは少ないはず。

今いるこの場所が山岳地帯で人気もなく、麓まで行くにしても危険を伴うとすれば。

私じゃなくても、かなり高い確率でこの場所に留まることを選ぶのではないだろうか。

では、こんな場所に私を監禁しているとして、その目的は何だ？

自分で問いかけて、私は答えることが恐ろしくなった。
しかし、考えずにはいられない。

私はもしかしたら……殺されるためにこの場にいるのではないだろうか？

「っ！！」

私は声を殺して、ギョツとタオルケットを掴んだ。
指先がわずかに震えている。

分かっている、今までの自分が自分のくだらない妄想なのかもしれないと分かっている。

分かっている、この不安は簡単には抑えきれない。
答えはすごく簡単なのに。

彼が、私の敵なのか味方なのか。

そんな簡単な二択問題だというのに。

追い詰められた心境では、物事は悪い方向にしか流れていかない。

ここにいることへの不安。

彼といることへの恐怖。

そればかりが募っていく。

もはや、自分の意思だけでは感情の昂ぶりをコントロールしきれない。
い。

どうして私は何も覚えていないのだろう。

どうして私は彼のことを知らないのだろう。

覚えていれば、きっと悩まなくていいのに。

知っていれば、こんなにも怯えることはないのに。

私は、どうすれば……。

日下部の想いをよそに、夜だけが静かに更けていく。

朝はまだ遠い。

月だけが、全てをはるか天空から見下ろしていた。

第一話：終わりが始まった夜（1）（後書き）

このたびは私の作品「きみのてのひら」をご覧になってくださり、ありがとうございます。

まだまだ素人丸出しの文章や構造ですが、どうにか最後のときまで物語を書いていきたいと思っています。

よろしければ、今後も暇なときにでもご覧になっていただければ幸いです。

更新は不定期ですが、なるべく早くに続編を投稿していきたいと思っています。

このたびはありがとうございます。
次回にご期待ください。

第二話：終わりが始まった夜（2）

1

眠れない。

目を閉じてどれくらい経っただろうか。

今日という一日がやけに長く感じて、身も心も疲れ果てているはずなのに。

全身の神経がピンと張っているようで、蜘蛛の巣のような警戒網を張り巡らせているようだ。

全身の力を抜き、だらりと体を放り投げて、考えることをやめることはできなかった。

今後のことについて、彼には考えなくてはならないことがあまりにも多すぎる。

自分はもちろん、日下部の身の振り方もそうだ。

いや、身の振り方どうこう以前の問題に、いつまでここでやつらの目をやり過ごすことができるかということのほうが重要だ。

もともとこの施設の存在は、研究所の同期の知人から話だけ聞かされていたものだ。

それが現在もこうして残っていたことは、あくまでも嬉しい誤算に過ぎなかった。

正直、もしこの場所を発見することができなかったら、あのまま山の中を歩き回るだけで倒れていたことだろう。

とりあえず今夜くらいは無事に過ごすことはできそうだが、いつまでもここに居座り続けるわけにもいかない。

研究員の中にはこの所在を知るものもいるかもしれない。

恐らくやつらは、今でも手当たり次第にこちらの行方を探し続けているだろう。

当たり前だ。

何しろ俺は、俺達が行っていた研究の集大成ともいうべくものを抱えて逃走しているのだから。

長年をかけて極秘に進められていた研究だ、やつらとしても歴史の表舞台にこれを逃がすわけには行かない。

だが、俺だってそれは同じだ。

こんな事実を日の目の当たる場所に晒すことなんて、まっぴらごめんだった。

だから俺は、隠さなければならない。

その上で、日下部を守り抜かなくてはならないのだ。

絶対にやつらに見つかるわけにはいかない。

見つければ最後、俺はもちろん日下部の命も助かるという保証はない。

十中八九、殺されるだろう。

今にして思えば、俺達はなんてものを作ろうとしていたんだろう。完成するまで、その意味することにまったく気づかないなんて、どうかしていたんじゃないかと思う。

実際俺は、どうかしていたのだろう。

だからそれに気づいたとき、誰よりも早く動くことができたのだ。そういう意味では、結果としては悪くないのか。

だがどう転んだって、俺達が続けてきた研究の結果は変わらない。

今回はまだ、実験段階なのだ。

だからこの実験さえ失敗に終われば……俺の手で闇に葬り去ることができれば、何もなかったことになるんだ。

失敗と分かれば、やつらはまた別の手段を考えるだろう。

実験というのは失敗の積み重ねだから、それは当たり前なことかもしれない。

だが、それでも失敗だけが続けばいつか人は諦めることを知る。

それが明日なのか一年後なのか一世紀後の世界のことなのか、それは俺には分からない。

だが俺は、今だけは研究者らしくなく思う。

どうかこの実験だけは、どれだけ先の未来の世でも成功しないであらう。

切に願わずにはいられない。

あの実験が成功してしまう未来のことを思うと、反吐が出る。

何もかもぶち壊してやりたい気分だ。

作る側も作らせる側も、俺自身も。

全部全部、狂っていた。

それに気づけたのが、今回は俺だったというだけの話で。

本当にやつらは、何も知らずに研究を続けているのだろうか。

俺みたいな下っ端研究員でさえ気づくことができたことに、なぜ誰も気づかない？

いや、本当は気づいているんじゃないだろうか。

だけどその、常識を遥かに超越したスケールの大きさに戸惑っているだけで。

もしかしたら、知っていながら研究を続けているやつもいるのかもしれない。

だけどそれは、俺がどうこう言って責められることじゃない。

俺達は研究者だ。

日々調査と実験を繰り返し、限りなく真実に近い事実を求める人間。そこに罪はない。

あるとすれば、全てが終わった後の後悔くらいのものだ。

いつだってそうだ。

結果を見なくては、良し悪しは分からない。

テストの結果にしても、宝くじの結果にしてもそれは同じだ。

だがそれが、あらかじめ問題用紙を盗んだり、当選番号がすでに決められているとしたら。

それは偶然ではなく、必然に変わる。

それと同じことが、俺達の手してきた研究にも当てはまるのだとしたら。

一体俺達は、何のためにたった一つの可能性を信じて歩んできたか。

いうのだろうか。

俺は思わず舌打ちする。

誰が悪いとか悪くないとか、そういう問題じゃなくて、
気づかずに今日まで生きてきた自分に腹が立つ。

今なおその事実を知ってか知らずか、研究をしているやつらに腹が立つ。

そんな世の中が平然と動いているこの世界に腹が立つ。

何もかもがめちゃくちゃすぎた。

どこから狂いだしたのだろうか。

始めから、全部狂っていたのかもしれない。

歯車が一つだけ足りなくて。

ねじが一つだけ抜けていて。

だから俺達は、抜け出せない時間の中を何度も何度もぐるぐると廻り続けているのだろうか。

だったら、直さなくてはいけない。

歯車をはめこんで、ねじをとめて。

止まったままの時間を、正しい方向に動かさなくてはいけないのだ。

そのために俺ができた、唯一のこと。

それが、目下部を逃がすこと。

だがそれは、奪い返されることを想定しておかなくてはならないことだった。

だから俺は、今度は守りきらなくてはいけない。

目下部を。

もう二度と、動き出したこの時間を逆戻りさせないために。

たとえ、自分の命を捨てても。

守らなくてはならない人が、ここにいるのだ。

「目下部……」

それは独り言か、それとも隣の部屋にいる彼女に向けてかけられ

た言葉なのか。

囁きのように細く小さなその声は、夜の空気に溶け込むようにしてすぐに聞こえなくなった。

不思議と肩が軽くなった気がした。

彼女の名前を呼んでみたり、彼女のことを考えたりすると、プレッシャーに押し潰されそうになるはずなのに。

彼は気づかないうちに、日下部のことを心の拠り所に使っていた。

彼女といると、彼は少しだけ優しい自分になれる。

本当は自分なんて、彼女の視界に入る価値さえないと知っていながら。

だが彼は、そんな曖昧な感情の変化に気づかない。

いや、無理矢理に押し殺している。

今はそんなことに気づく必要はないのだと、言い聞かせている。

気づいているのに。

気づきかけているのに、決して気づこうとしない。

それはまるで、研究を続けていた自分と鏡写しのようで、彼自身を見えないところで追い詰めていた。

目をうつすらと開く。

万が一のことも考えて、部屋には電気はつけていない。

それは日下部にも言い聞かせたことだった。

今はもう使われていない山中の研究施設から明かりが見えたら、誰だって怪しく思うだろう。

真っ暗だったが、長い間目をつぶっていたせいで、目はすっかり暗さに慣れていた。

窓のない部屋。

何もかもが灰色に染まった部屋は、夜の間だけ黒一色に塗り潰される。

一人の夜は久しぶりだった。

久しぶりといっても、この奇抜な脱走激が始まってからまだ、丸一日も経っていない。

昨日のことが遠い過去に思えるなんて、よほど疲れているのだろうか。

疲労はあった。

今だって焦りはある。

でもまだ、始まったばかりなんだ。

終わらせない。

終わらせるわけにはいかない。

終わりがやってくるとしたら、それは俺が全てを終わらせるときだ。最後の最後まで。

決して諦めるな。

彼は 阿久津恭祐は、椅子の背もたれにかけた上着の内ポケットに手を伸ばした。

ひんやりと、夜の空気に巻けず劣らずの冷たい金属の感触。

その闇の溶け込む黒い拳銃を握り、阿久津は思う。

全てを終わらせるためなら、いくらでも引き鉄を引き続けてやるとそれは恐らく、追ってくる立場のやつらも同じことだろう。

やつらは日下部は保護、あるいは生け捕りのために殺すことはないが、もはや阿久津のことは殺すことにためらいはない。

阿久津が死ねば、結局そう遠くない未来に日下部も殺される。

そんなことは絶対にさせない。

力チャ。

金属の擦れ合う音がこだまする。

「…させてたまるか」

阿久津は呟く。

「最後の最後まで、俺は抗ってやる。必要とあらば、殺すことだ
つてためらいはしない」

ギュツと、拳銃を握る。

「全てを決めるのはお前らじゃない。それに気づけなくて銃口を向けるというのなら……」

汗で手が滲む。

真つ暗な部屋で、それだけが黒光りを放っている。

「最初に引き鉄を引くのは 俺だ」

再び拳銃を内ポケットにしまいこむ。

握り締めていた手が火照り、外気に冷やされていく。ますます眠気がなくなってしまった。

阿久津は一度息をつく、顔でも洗ってこようと静かに部屋のドアを開けて廊下に出た。

そして、気づいた。

日下部の部屋のドアが、細く開いていることに。

2

飛び出したまではよかった。

が、次の瞬間にはもうすでに自分は迷いかけていた。

右も左も真つ暗闇。

真夜中の雑木林は、ただそこに存在するといっただけで言いようのない圧迫感を与えてくる。

周囲に細心の注意を払いながらも、日下部はじりじりと一歩ずつ闇の中を前進する。

目を凝らしても、何も見えはしない。

かろつじて木々の暗影があちこちにつつすらと浮かび上がるだけで、それ以外は何もない。

さつきまで地上を淡く照らしてくれていた月は、いつの間にか雲の陰に隠れてしまっていた。

唯一の道標を失って、文字通りお先は真っ暗だ。

とにかくにも、まずはここから下山しなくてはならない。

暗さのせいで斜面が緩やかなのか急なのか、それすらも分からないが、とにかく歩くしかない。

日下部は寒さに身を震わせながらも、手探りで歩を進める。

じりじりと砂と小石を踏みつける音が耳の奥に響き、それさえも胸中の不安を煽り立てる要素になる。

私は助かるのだろうか。

いや、助かりたい。

助かってみせる。

そのためには、まずは逃げ切らなくてはならない。

つまりは、人がいるところへいかななくてはならない。

こんな偏狭のような土地でも、必ずどこか別の道路と交差する場所が必ずあるはずだ。

まずはそこまで辿り着くことができれば、そこから下山すれば開けた道へと繋がるだろう。

もちろんそれは、日下部の頭の中の想像に過ぎない。

だが、こんなところで得体の知れない人間と二人つきりで、いつ殺されるかもしれない恐怖を覚えるよりかはマシだった。

殺されると決まったわけではない。

もしかしたら、あの青年は本当に自分の身を守ってくれるためにここにいるのかもしれない。

だけど、記憶のない日下部にそれを信じろというのは無理な話だった。

彼と二人で話をしていたときは、その場の空気や彼の勢いに流されたこともあつて頷きはした。

だが、それだつて半信半疑だったのだ。

その証拠に、彼は彼自身のことを何一つ明かしてはくれなかった。

教えてくれたのはこれまでの経緯だけで、名前すら聞かされていない。

それなのに彼は、まるで私の全てを知っているような口調だった。これから起こり得るであろうこと、これまでに起こってしまったこと。

全てを知った上で、なおかつ真実を語ってはくれない素振りだった。それを疑うなというのが無理な話だ。

だったら、私にはこういう選択肢しか残されていないじゃないか。そうだ、私はこうするほかなかったんだ。仕方、なかったんだ。

そう自分に言い聞かせて、日下部は斜面を下る。思ったよりも斜度がある。

地盤そのものは安定しているようだが、うっかり足を滑らせたらしばらく転がることになるだろう。

無論、ただの擦り傷程度で済むはずがない。

打ち所が悪ければ、その時点で死ぬ可能性だって十分ある。

「くっ……」

慎重に、それでもできるだけ早く。

あの人に気づかれる前に、少しでも遠くに。

不安、焦り、恐怖といった負の感情だけが底なしに溢れてくる。

戻れと、心のどこかでそう叫ぶ自分がいる。

しかし戻れない。

戻れば助かるという保障はない。

だが、逃げ延びれば助かる。

どちらを選ぶかなんて、考えるまでもなかった。

記憶を失ったことに対する恐怖よりも、死に対する恐怖のほうが大きかった。

足が震える。

それは、死に対する恐怖か、それとも戻ろうとする無意識の意思なのか。

混同する意識、交錯する感情。

私は一体、どちらを信じればいい？

自分か、それとも、彼か。

答えを出すよりも早く、私の足は少しずつ、しかし確実に斜面を下っていくのだった。

土を踏みしめる感触と、木の葉や小枝を踏み砕く音。

木の幹にしがみつきなから、ゆっくりと下る。

まだほんの数十メートルしか歩いていないのに、もう息が上がってきた。

振り返ると、もうそこにはあの建物の外観は捉えられなくなっていた。

まるで林の木々が視界を遮るようにして、目の前を全て覆い隠してしまう。

空を見上げて、月はまだ隠れたまま。

行く手を遮るものは何もないが、導くものも何もない。

それでも、行くしかない。

この木々の檻を抜け出して、歩くしかない。

「大丈夫、大丈夫。きつとうまくいく……」

何度も自分に言い聞かせる。

落ち着かせるように、諭すように。

だからもう、振り返ってはいけない。

後に求める場所などないのだから。

あるはずがないのだから。

なのに、どうしてだろう……。

「……」

胸の奥深くで、見えない針がチクリと刺すような痛みが走るのは一体、どうしてなんだろう？

「どう、して……？」

そのわずかに感じる痛みにも、日下部は思わずその場に膝を折った。衣服が汚れることなど構わずに、木に背中を預けて座り込む。

片方の手で胸を押さえる。

しかし、そんなことで痛みは消えたりはしない。

両目をつぶり、唇を硬く閉じる。

寒さに身を震わせながらも、その場から動くことはおろか立ち上がることもできない。

痛みが別の感覚へと変わっていく。

胸が締め付けられるようになり、息も苦しくなる。

ついには耳鳴りのようなものまで始まった。

「んっ……！」

日下部は開いているもう片方の手で頭を押さえる。

ものの数秒で頭痛は消える。

同時に胸の苦しさもなくなり、体全体がふわっと軽くなったような感覚になる。

「はあっ」

肺の奥から尾も狂うしい空気の塊を吐き出すと、気分は少し楽になった。

だが、まだ少し頭がふらついている。

とはいえ、いつまでもこんなところでのんびりと休んでいるわけに

はいかない。

もしかしたら、今頃は自分がいないことに彼が気づいてしまっているかもしれない。

そうなれば、彼は必ず私を追いかけてくるだろう。

追いかけてくる理由は、今の私には分かりはしないのだが。

ぐずぐずしている時間はない。

日下部は立ち上がる。

少しでも遠くへ。

ふらつく頭を片手で押さえながら、斜面をまた一歩進もうと足を踏み出して

「え……」

ふいに、自分の体が宙に浮いた。

空気以外の全てが、体のありとあらゆるところから離脱して、体全体が浮かび上がった。

そして次に起こった衝動は、落下。

重力に引きずられるがままに転がっていく体。

少なくない痛みの数、再び止まりそうになる呼吸。

そして、訪れる静寂と共に薄れていく意識。

日下部が遠のいていく意識の中で、かろうじて最後に見上げた視界の先。

「……………」

そこには、やはり月のない夜空がどこまでも蒼く黒く続いていた。

3

無人の廊下に佇む闇を引き裂くように、足音だけが連続して反響

していた。

懐中電灯を片手に、阿久津は暗がりの中をあちこち走り回っていた。もともと体力には自信があるわけではない体が、すでに息を上げている。

首筋から背中にかけてじわりと汗が滲む。

決して広くはないこの施設の中、もうほとんどの場所を走り回った。だが、そこに日下部の姿を見つけることはできなかった。

トイレにも給湯室にも、使っていない空き部屋のどこにも彼女の姿は見当たらなかった。

数分前、顔を洗おうとして部屋を出た阿久津は、そこで信じられない光景を目にした。

隣の日下部が休んでいる部屋は、もぬけの殻になっていたのだ。最初は阿久津も、彼女がトイレにでも言ったのだろうと思っていた。だが、よくよく考えれば実際にそんなことはありえない話だった。なぜなら、日下部はこの施設のどこにトイレがあるかを知らないからだ。

意識を失ったままの彼女をその部屋まで運んできたのは阿久津自身である。

彼女が意識を取り戻してから建物の中を案内したりなどはしていないので、少なくとも日下部はどこに何があるのかを知らない。しかも時間は真夜中だ。

灯りの一つも持たずに建物内を徘徊するというのは考えにくい。

つまり彼女は、黙って部屋を出ていったということになる。

なんのために？

決まっている。

逃げ出してしまったのだ。

恐らくは、記憶が混同して不安になり、いてもたってもいられなくなったのだろう。

では、どこに逃げたのか。

建物の中はあらかた探しつくした。

懐中電灯の明かりしか便りがないとはいえ、どこかで隠れている日下部を見落とすとは思えない。

ということは、彼女はもう建物内部にはいない。

つまり、外だ。

案の定、彼女がいた部屋を出た正面の窓の鍵が内側から開けられていた。

灯台下暗しとはこのことだ。

阿久津は焦っていて、こんな近くに外への入り口があることをすっかり見逃していた。

そして今阿久津は、暗い林の中を走っている。

どこに追っ手がやってきているかも分からない現状では、電灯の灯りさえ頼るわけにはいかなかった。

加えて、大声で日下部の名前を呼ぶわけにもいかない。

しんと静まり返る夜の中では、光よりも音のほうが著しく目立つ。

頼りになるとすれば、己の視力と聴力のみ。

阿久津はどちらも決して悪いわけではないが、この広い範囲の中ではそれもすずめの涙程度にも役に立たない。

さらに言うならば、阿久津が進んでいる方向と日下部が進んだ方向が同じとも限らない。

状況は明らかに絶望的で、それを後押しするかのように気温がどんどんと冷え込んでくる。

山の気温は地表に比べてはるかに低い。

高山地帯ではないとはいえ、酸素濃度も薄いはずだ。

ふと、日下部の服装を思い出す。

とてもじゃないが、寒さから身を守るほどの暖かいものだったとはいえない。

もしもこのまま朝方まで見つけることができず、なおかつ日下部が道に迷ったりしていようものなら、凍死すら免れない。

どうしてこう幾重にもわたって危機迫る状況に追い詰められなくちゃいけないんだと、阿久津は齒噛みする。

「くそっ！ どこだ、日下部っ！」

彼はと枯れ枝を踏み碎いて、阿久津はほとんど林の奥へ進む。向かう方向が正しいとか間違っているとか、そんなことはもはや頭の中にはなかった。

見つかるまで探すことしか、今の彼にできることはなかった。

木々の間をすり抜けて、阿久津は走る。

方向感覚なんてとつくに失っていて、もはや施設があつた場所さえ曖昧になっていた。

それでも走りながら、真っ暗な景色の中に動く影や違和感を探していく。

慣れない運動量に、息が止まりそうになる。

心臓が爆発してしまいそうなくらいに高鳴り、鼓動が彼を余計に焦らせる。

吐く息はいつしか白く濁り、外気の低さを鮮明に物語っていた。額に浮かんだ汗を腕で拭った、その時だった。

「なっ……」

阿久津は足を取られ、そのまま前のめりに大きく体を放り出された。

ブレーキもきかず、体はごろごろと緩やかな斜面を転がり始める。何とか転倒を止めようと、阿久津は必死で腕を伸ばした。

すると、運良く木の根元に腕が絡まり、急いでもう片方の腕を手繰り寄せる。

木の幹にしがみつくようにして、阿久津の体はどうか停止した。焦りの呼吸と安堵の息を交互について、阿久津は体を起こす。

「ハア、ハアッ……」

すでに体力は限界に近づいていた。
どうにか五体満足で呼吸をしているのが不思議なくらいだった。
もしもあのまま転倒し続けていたら、ただではすまないだろう。
阿久津が今立っている場所から少し先のほうは、急に地面の高さが
低くなっている。

つまり、斜面の角度が急になっているということだ。
一歩間違えれば、確実に阿久津は命を落としかねないことになって
いただろう。

思わず背中に寒気がこみ上げてくる。

そして同時に、不安もこみ上げてきた。

果たして日下部は、無事なのだろうか。

こんなに視界の悪い状況で、ましてや灯りの一つも持っていない彼
女は……。

いや、そんなことはない、まだ間に合うはずだ。

しかし、万が一……。

考え始まるともう止まらなかった。

どれだけ自分を言いくるめても、悪い方向にしか想像は巡らない。
そしてそれは、結局自分自身を攻め立てる言葉となって跳ね返って
くる。

俺は一体何をしているんだ？

ついさっき言っただけじゃないか。

アイツを守って見せると、言っただけじゃないか。

まだだ、まだ何も終わっちゃいない。

手遅れなんていう考えは捨てろ。

遅すぎるなんて結論は、まだ早すぎる。

俺の体は、手は、足は、まだ動く。

だったら走れ。

今、すぐ！

「……っ！」

止まった足を動かして、阿久津はまた走り出す。しかし、どれだけ走り回ったところで、肝心の日下部がどこにいるのか見当もつかない。

闇雲に探すだけでは、遭難者が一人増えてしまっただけだ。阿久津がそのことを理解してないわけがない。

だが、今の彼にはこうするほかないのだ。

ただ探し続けることでしか、彼は一人の少女すら救えない。

ここで彼女を救えないのなら、この先もずっと彼は誰一人として救えない。

だから、走る。

がむしゃらにでも、何度転びそうになっても。

そうすることでしか、自分の答えを見つけ出せない。

人は彼を不器用な人間と呼ぶだろう。

当たり前だ。

器用なら、そもそも誘拐なんて真似事してはいないのだから。

それでも阿久津は、今でも確かに思う。

自分のしたことは、世界から見れば間違っているのかもしれない。

だけど、間違いだと言ってなお、俺はこの少女を救いたい。

見殺しには、できない。

結局のところ、ただそれだけのことだったのだ。

彼はただ、目の前で苦しんでいる一人の少女を、救いたいと思った。

それだけのことだったのだ。

そして阿久津を、二度目の衝撃が襲う。

むき出しの木の根に足を取られ、そのまま転倒した。疲労のあまり、草の根を掴む余力も残ってはいない。ただ重力のなすがままに、傾斜を転がり落ちていく。

「が、はっ……っ！」

痛みと疲れで息が止まりそうになる。

何度も背中を打ち付けて、そのたびに鈍い痛みが全身を駆け巡る。どれだけの時間転落していただろうか。

そう長い時間ではないが、気がつく和阿久津の体はぴたりと静止し、そのうつ伏せの体の上を静寂だけが通り過ぎていった。

「……くっ、そ」

痛みに顔をしかめながら、阿久津はようやく顔だけを起こす。

土と枯れ葉の混じった匂いが鼻腔を刺激し、口の中は鉄の味が少し広がっている。

かならず全身を強く打ったが、幸いなことに骨折などの重傷だけは避けられたようだ。

とはいっても、満身創痍なのは変わらない。

目立つ怪我は、額からのわずかな出血くらいだろうか。

他は大丈夫だ、痛みはあるが手も足もしっかり動く。

阿久津はうめきながらも、どうにか上半身だけを無理矢理起こした。そして改めて、自分が落下してきた斜面を見上げる。

急ではあるが、上れないほどのものではない。

だが、さすがに体が言うことを聞かなくなってきた。

かといって悠長に休んでいる暇もない。

奥歯を噛み締めて、阿久津は壊れかけの体を立ち上げさせようとして…。

瞬間、背筋が凍りつきそうな映像を見た気がした。

たった今視界の端に捉えたものが、フラッシュバックするかのよう

に頭の中を横切る。

思考が停止しそうになる。

頭では理解していても、体が思うように振り向こうとしてくれない。見間違えの可能性は大いにある。

一寸先は闇。

しかし、闇の中でそれは確かに見えた。

阿久津の視線の先には、確かにそれがあった。

木の葉でもなく枝でもなく、紛れもない衣服が。

そして、腕が、足が、顔が。

一人の人間という形をそのまま残して。

「 日下部っ！！！」

彼女はそこで、静かに眠っていた。

まるで、水面にゆらゆらとたゆたう花びらのように。

4

夢を見ていた、のだと思う。

ずいぶんと長く、それでいて儚いくらいに短い夢。

氷の中に閉じ込められたような寒さ。

指先から徐々に感覚がなくなっていくって、やがて体全体がただの冷気に包まれた。

例えるなら、永遠に解けることのない氷の結晶の中に、生きたまま閉じ込められたような、そんな感覚。

寒いとか冷たいとかを通り越して、もう何も感じない。

生きながらにして死んでいる。

それは果たして、生きているといえるのだろうか？

聞いたところで、答えは何一つ返ってこない。

静かだ。

世界が活動を停止してしまっているようだ。

静と動のうち、動が死んで。

静だけが音もなく、しかし確実に動いている。

おかしな話だ。

いい加減にはつきりしてほしい。

ここは止まった世界で、その場所で私も止まっている。
息遣いも、心臓の鼓動も感じない。

指先一つ動かせず、閉じた瞳は開かない。

これはきつと、死というもののなのだろう。

だって、目の前はこんなにも真っ暗だ。

何も聞こえず、何も見えず、そして何もありはしない。

世界は死んだ。

そして私は、世界の一部だった。

だから私も死んだ。

うん、分かりやすい。

だとしたら、ここはどこなのだろう？

私は一体、どうしてここにいるのだろうか？

……分からない。

考えれば考えるほど、思い出そうとすればするほど、何もかもが黒
一色に塗り替えられていく。

こんな世界は、嫌だ。

これ以上何を黒くしようというのだ。

もう、何もかもが黒々しい闇に染まりきっているじゃないか。

黒に何を混ぜても、黒にしかないよ。

ここに光はない。

あるのは闇。

闇が闇を生んで、生まれた闇は闇と混ざる。

そうやって闇だけが増え続けて、いつか私もその闇の中に消える。

それがきつと、この世界の正しい在り方。

だからもう、私は何もしないし何もできない。

いずれ今の自分の何もかもが、闇に飲み込まれていく。

残るものは何もない。

記憶も、景色も、言葉も、想いも、声も、世界も、死も。
やがて消える。

私は、生まれながらにして死んでいた。
命なんてない。

私は死にながら生まれたのだから。

……あれ？

そういえば。

私は、一体……。

いつ、生まれてきたんだろう……？

「……」

トクンと、何かが鳴った。

それは音でもなく、声でもなく。

それなのにどうしてか、不思議と感じることができた。

この、闇だらけの宇宙の中で。

瞬く星なんて一つもない、無限に続く闇の螺旋の中で。

届いたそれは、何？

トクン。

トクン、トクン。

少しずつ高鳴るその感覚。

弱々しく、それでいて決して消えない。

その音は、すぐ近くにあるようで、遥か遠くから聞こえてくるようだった。

頼りない、消え入りそうな鼓動。

だけど、こんなにも暖かいと感じてしまう。

……暖かい？

凍りついたように動かない体が、暖かさを感じている。

指先は動かない、目は開かない。

それでも確かに、分かる。

伝わってくる。

その、温もりが。

春の日差しを浴びているような、そんな暖かさ。
体に羽が生えたよう。

陽の照る下に、体を放り投げているみたい。
闇色の氷が、少しずつ解けていく。

あつたかい。

揺り籠が揺れるような心地よさ。

春に抱かれ、眠る私。

まるで、誰かに守られているような…。

何があっても……

え？

何だろう、今は。

ふいに耳に届いた、声。

儚くて、でもそれでいて力強く、どこか安心できるような、そんな
声。

この声、前に、どこかで……。

指先が、微かに動く。

何があっても、お前だけは……

澄んだ青空のように広い声。

今はまだ、そんなに大きな声では言えないけれど。

時々、消え入りそうなくらいに弱々しくもなるけれど。

私はこの声を、知っている。

名前も知らないあの人が口にした、唯一の優しさ。

そして私は、その優しさが信じられなくなって…逃げたんだ。

こんな真っ暗な闇の中を、走り回って。

ただ、怖くて。

疑うことが怖くて。

信じることが怖くて。

そんな自分が、何よりも怖くて。

ただ、逃げていた。

まぶたが浮く。

一筋の光が射すように、うつすらと目が開く。

何があっても、お前だけは絶対に……

服越しに感じた、確かな温もり。

揺り籠に乗せられた私。

彼の背中から、確かに音が聞こえてくる。

トクン、トクン、トクンと。

懐かしい匂いがした。

体全体が、暖かさに、温もりに包まれる。

彼の足音が、息遣いが、鼓動が、こんなにも近くに感じられる。

……ああ、そうか。

最初から私は、この人を恐れてなどいなかったんだ。

私は知らず知らずの間に、記憶がないという恐怖をこの人のせいに
してしまっていたんだ。

この人は私を少しでも安心させようと、きっと必死だったというの
に。

私は彼が差し伸べてくれた手を、いつの間にか振り払っていた。

自分の中にある恐怖に負けて。

ただ、不安から逃れようという一心だけで。

目の前の現実から目を背けて、そして逃げた。

私はバカだ。

こんなにも心配してくれる人が傍に居てくれたというのに。

薄く開いた瞳の端から、音もなく透明な雫が流れ落ちた。

頬を伝い、静かに上着に染み込んでいく。

「っ、っ……」

もう、涙を抱えておくことはできなかった。

私は彼の背に揺られたまま、ただ子供のようにすすり泣くことしかできなかった。

何があっても、お前だけは絶対に俺が守ってやる……

そう言ってくれた彼を信じることができずに、逃げ出した私。

それでも彼は、やってきてくれた。

どうして私は、彼を信じることができなかった？

名前を知らなかったから？

素性を知らなかったから？

違う、そうじゃない。

そんなものは、私から聞けばよかったただけなのだ。

結局のところ、私は聞くことさえも恐れた。

知ることが怖くて。

ただ、怖くて。

こんなにも暖かく優しい言葉をかけてくれる人を、裏切ってしまった。

私は、大バカだ。

私は自分の小さなてのひらを、そっと彼の肩に添えた。

ギュッと、私は無言で彼の肩を掴む指に力を入れた。

震える指先。

しかし彼は、黙ってそうさせていてくれた。

「……な、さいっ……」

「……」

彼は答えない。

ただ無言で、私を背負って歩き続ける。

「ごめ、なさ……私、わた……」
「……ああ」

たった一言、彼はそう言っただけ。

背中に抱えた赤ん坊をあやすように、諭すような言葉で。

夜明けが近づいていた。

朝を迎えたら、彼に名前を聞こう。

消えかけた月が世界を照らす中、私は泣きながら彼の背中で、再び浅い眠りの中へと落ちていった。

第二話：終わりが始まった夜（2）（後書き）

第一話から拝見してくださってる方、そうでない方。

まずはご覧になってくださってありがとうございます。

本作「きみにてのひら」は、この第二話でようやく冒頭部分の終わりを迎えます。

今後は色々な展開があるのですが、それは第三話ないしは第四話あたりからがメインとなっていく予定です。

次回の投稿は不定期なのですが、なるべく遅くならないように努力するつもりです。

それでは手短ですが、この辺で失礼します。

一人でも多くの方々に目を通していただけるようにがんばりますので、今後もよろしく願います。

では、第二話でお会いしましょう。

第三話：少女の存在

1

私は再び、真っ白な部屋の真っ白なベッドの上で目を覚ました。まだ完全に覚めていない目を少しこすりながら、上半身をゆっくりと起こしていく。

「いたっ……」

しかし、途端に背中や二の腕の辺りに鈍い痛みが走る。

痛む場所に手を添えながら見てみると、私の体には二の腕だけではなく太ももやふくらはぎの辺りにも包帯が巻かれていた。

他にも、体中あちこちに小さなすり傷の跡が目立つ。

体中あちこちから痛みが走る。

動けないほどひどいものではないが、やや不自由さを感じるには十分だった。

痛みに体のあちこちをさすっているうちに、私の目はだんだんと覚めてきた。

そして、同時に昨夜の出来事の顛末がありありと思い出せた。

そうだ、私は傾斜の上から転落して、そこで意識を失ってしまつて、それで……。

「あ……」

思い出した。

彼が……あの青年が、私のことを背負つてここまで運び届けてくれたのだ。

彼の背中に揺られているうちに私は急に眠くなつてしまったのだ。

彼が私をベッドの上に寝かせてくれたことは微かに覚えている。その後、私が寝てしまつまでずっと傍にいてくれたことも。

あるとき彼は、何かを言っていたような気がした。

その言葉に私は全身の緊張と不安が溶けるように消えて、そのまま眠ってしまったのだ。

「ちゃんと、お礼言わないと。それに、名前も聞かないとね」

私はベッドの下に揃えられたスリッパを履き、まだあちこちに痛みが残る体を動かそうとする。

が、左足の足首に強い痛みを覚え、すぐにベッドに手をついてしまう。

よく見ると、足首の部分にはやたらしつかりと包帯が巻かれていた。どうやら捻挫を起こしているようだ。

包帯の上から少し撫でただけでも、顔をしかめるほどの痛みに襲われる。

「困つたな、これじゃ歩き回ることできないよ……」

それでもどうにか立ち上がろうと、手近の壁やベッドの枠に捕まりながら立ち上がるうとして

「わ、わ、あわわ……」

片足だけでは全体重を支えきれず、体がおかしな方向に曲がりだそうとする。

そして体はだんだんとベッドの上から引つ張られ、目の前にコンクリートの床が迫ってくる。

「きゃっ」

と叫んだ次の瞬間には、私の体は冷たいコンクリートの上にうつ伏せに転がってしまっていた。

顔や頭は強くぶつけていないが、包帯巻きにされたあちこちをぶつけたので、そのたびに痛みに襲われた。

起き上がろうと力を入れるが、いかんせん力が入らない。

どうしたものかと溜め息をついていると、何の前触れもなく部屋の扉が押し開けられた。

反射的に私は顔を上げた。

しかし、考えるまでもなくこの場にいる人間は私を除外すれば彼しかないのだ。

そして案の定、彼はコーヒークップを2つ、それぞれ両手に握ったままの状態でそのばに立ち尽くしていた。

私は今の自分のあまりにみつともない格好を改めて思い出し、急激に恥ずかしさを覚えた。

そしてそれを後押しするかのように、棒立ちの彼は言った。

「日下部、何をやっている……？」

その表情は疑問たつぷりだった。

私は答えられず、ただただ愛想笑いを繰り返すばかりだった。

やがて彼は小さく溜め息をつく、持っているコーヒークップを脇の机の上に置き、立ち上がれないでいる私に歩み寄ってきた。

そして一拍の間もなく、軽々と私の体を抱きかかえ、そのままベッドの上に戻した。

まるで犬や猫を扱うような動作だった。

というか、よく考えてみれば今のわいわゆる「お姫様だっこ」ではないだろうか。

そう思うなり、今以上の恥ずかしさがこみ上げてくる。

私は彼の顔をまともに直視できず、タオルケットの中に顔を突っ込

んだ。

「どうした？ 寒いのか？」

いえ、むしろ暖かいを通り越して熱いくらいです、おかげさまでとは口に出せず、私は彼に何でもないと一言だけ告げた。

「ならいいが……ほら、飲め。暖まるぞ」

そう言つて彼は片方のコップを差し出した。

顔を上げた私は、とりあえず彼のカップヲ受け取った。

コップを握る両手から、じんわりと熱が伝わる。

ゆっくりと口を近づけ、一口含む。

多少苦味は感じるが、飲めないことはない。

のどもと過ぎれば熱さを忘れるというが、しだいに体も温まってくる。

「体の方はどうだ？ どこか強く痛むところはあるか？」

ふいに彼は聞いてくる。

彼の言葉はいつも突然だ。

タイミングというものがまるで図ることができない。

「あちこち痛みますけど、そんなに大したことはないと思います。ただ……」

私は視線を私の足元に移す。

彼もその視線を追つて、私の足首に目を向ける。

「痛むか？」

「捻挫みたいです。まだちょっと、歩くのは難しいかも……」
「そうか……」

途端に彼の表情が曇る。

昨日見た、あのとても悲しそうな顔だった。

ともあれば、今にも泣き出してしまいそうなくらいに弱々しい表情。どうして彼は、こんなにも悲しい顔をするのだろう。

そんな彼の横顔を見ると、私もなぜか胸の奥が締め付けられるような感覚を覚えた。

「すまなかった。俺がもっとしっかりしていれば、こんなことにはならなかった」

彼は目を伏せて呟いた。

その言葉に、私は慌てて口を挟む。

「な、なんでアナタが謝るんですか？ もとはといえば、私が勝手に逃げ出すような真似をしたから……」

「そうなるような状況にしまったのは、俺に原因がある」
「そんな……」

それ以上は言葉が続かなかった。

言いたいことはまだまだあるのに、声にならない。

きっと彼には、私のどんな慰めの言葉も届かないのではないだろうかと、そんなことを考えてしまう。
そんな悲しさを、彼は持っていた。

「……」
「……」

沈黙が流れる。

お互いに何も言わず、彼がコーヒーをすすする音だけが室内にこだました。

「……そんな顔をするな」

彼の言葉に、私は顔を上げる。

「お前がそんな調子だと、こっちの調子が狂う」

彼はぶっきらぼうにそう言つと、コップを置いて立ち上がる。

「あ、あの」

彼の背中に、私は呼びかけた。

彼は無言で振り返り、次の言葉を待っている。

「あの、1ついいですか？」

「……なんだ？」

「その、あなたの……名前はなんていうんですか？」

「俺の、名前……？」

彼はやけに驚いた顔をしていた。

やはり、彼も知らなかったのだ。

私が彼に関することも、何一つとして覚えていなかったということ。

「日下部、お前まさか……」

彼は驚きのせいか、小声で呟く。

私はそれに、頷きで答える。

「覚えてないんです、何も。あなたの名前も。自分の名前だって、あなたがそう呼んでいるからそうなんだなって……」

彼は絶句していた。

しかしすぐに表情を取り繕って、真剣な眼差しに戻る。

「……分かった。色々と話さなくちゃいかんようだな。ちょっと待っていてくれ」

「あ、どこにいくんです？」

彼が部屋を出ようとしたのを、私は慌てて引き止めてしまった。

自分でも良く分からないくらいに、声がうわずっていた。ただ、その理由は私にも分からない。

「顔を洗ってくる。多分、長い話になるだろう。すぐに戻る」

言い終えて、彼は静かに扉を閉じていった。

そう思った矢先、彼はいきなり扉を開いた。

私は驚いて、思わずその身を竦ませる。

「阿久津だ」

「え？」

一瞬、彼が何を言ってるのか分からなかった。

彼は繰り返し返す。

「阿久津恭祐。俺の名前だ。呼びやすいように呼んでもらって構わない」

それだけ告げて、阿久津は再び扉を閉めた。
廊下の向こう側に、彼の足音がだんだんと遠ざかっていくのが聞こえた。

「阿久津……」

胸の奥で、その名前を何度も繰り返す。

懐かしいようで、どこか悲しい感じ。

でも、全ては思い出せない。

だが一つ、はつきりしたことがある。

やはり私は、阿久津さんのことを知っていたのだ。

記憶の奥底、微かに思い出せる程度だが、彼の名前には確かに聞き覚えがあった。

だけど、どうしてなんだろう。

彼のことを思い出そうとすればするほど、辛くなってしまふのは。
言葉で言い表せない感情で、胸の中が破裂しそうになる。

私は阿久津さんが戻ってくるまでのわずかな時間を、ずっと胸を押さえて待っていた。

2

室内にはだんだんと暖気が回ってきた。

阿久津さんが持ってきた電気ストーブが、ちりちりと焦げ臭い匂いを放っている。

私はベッドの上に足を伸ばして座り、阿久津さんはパイプ椅子に腰掛けている。

「さて」

その声に、私は阿久津さんのほうに向き直る。

「どこから話せばいいんだろうな」

彼はしばしの間言葉を探しているようだった。

かく言う私も、一体何から聞いていいのか分からなくなっていた。知らないことはたくさんあるのに、自分が一体何を知りたいのかが明確にならないのだ。

名前、歳、血液型、生年月日、出身地などなど。

個人情報レベルで考えるならそれこそきりがないほどだ。

だけどそれは、私が知りたいと思っていることではないだろう。知らなくていいと言えば嘘になるが、それよりもっと大事なことがあるはずだ。

まず知るべきことは、自分が一体どういう理由で、現在に至るような状況に立たされているのか。

そして、なぜ阿久津さんも私と同じ状況に陥っているのかということだった。

しかし私は、聞きたいことが頭の中であるていど整理されたにもかかわらず、自らは問いを投げかけられないでいる。

完全に受身の状態だった。

まず阿久津さんに話を始めてもらい、疑問があれば問いを投げる。

これはちよつとズルイやり方なのかもしれないと、内心でも思う。

だが私は、他でもない彼自身の口から、事実を聞きたいのだ。

そうすれば、彼が時折見せるあの不可解な悲しい表情の正体も、何となく分かるような気がしたのだ。

本当に、ただなんとなくのだけど……。

やがて阿久津さんは組んでいた足を崩し、口を開いた。

「俺は、こうなる以前は東京都の郊外に位置するある研究所で研究員として働いていた。その研究内容というのが、実は公には公表

できないような内容のものでな。研究内容はおろか、そんな研究所の存在さえも、社会的には認められていない。いわば、非合法だった。決して歴史の表舞台には出ることなく、あくまでも歴史の闇の部分、影の部分として存在し続ける、ある種の組織めいた団体と言いついていいだろう。今から何十年以上も前から、その研究は続けられていた。日本国内の有名著名大学や、個人で優れた才能を持つ人材の多くが、この研究所に足を運んだ。『この先の未来のために、君達の力が必要だ』そんなありきたりなセリフに心打たれてやってきた人間も、実際は少なくないだろう。かく言う俺も、そんな中の一人だったのかもしれない」

阿久津さんの言葉は、すでに常識の範囲を少し飛び越えた内容のものだった。

非合法とか歴史の裏とか、耳にしたことはあるけれど、実際には存在を目の当たりにできないもの。

だからこそ非合法なのだろうが、冒頭からそんなファンタジーにも似た話を聞くことになるとは、私は思いもしなかった。

かといって、私はまだ問いを投げるほどに話の内容を理解できていない。

こうして話してくれる場を設けてくれた以上、少なくとも阿久津さんの話す内容は真実なのだろう。

例えばそこに現実離れたギャップを感じても、それが事実である以上は受け入れなくてはいけない。

阿久津さんは一呼吸して、話を続けた。

「その研究所というのがな、大きく言ってしまうえば遺伝子研究に携わる研究をしている。生物学的な分野だな。微生物を繁殖させたり、植物の遺伝子を組み合わせたり置き換えたりして、新しい植物を作ったり。咲くはずのない花……例えば緑色のバラの花とかだな。そういうものを生み出す研究を主体としている。他にも、動物の皮

膚を人間の皮膚の代わりに使えるようにしたりとか。重度の火傷を負ったとき、皮膚組織が破壊されてしまうと人口の皮膚を使用したりするんだが、そのくらいは聞いたことがあるんじゃないか？」

確かに、そういう話は聞いたことがあるような気がする。

もはや移植技術などは、近年になって急速に発展しているとか。

医療技術で最先端を誇るアメリカなどでは、通常では考えられない治療法などが数多く存在するとか。

「だからまあ、表向きは医療遺伝子関係の研究という風に見て取れるわけだ。けどな、それだったらわざわざ研究所の存在や研究内容を隠す必要なんてまるでないわけだ」

私は一つ頷く。

それは確かにその通りだと思う。

むしろ、存在を公にしたほうが様々な方面から支援や情報が集まるのではないだろうかと思う。

ただでさえ科学技術がめまぐるしく発展する現在、医療や遺伝子関係の研究はそれこそ注目を浴びることも多いだろう。

それならば、もっと分野を拡大したり、公表してさらに人材の確保などに向かえばいいのではないだろうか。

そういった方面の知識はまるでからっきしな私だけど、それでも分かることがある。

それは、阿久津さんの言った隠す必要ということだ。

隠す必要があるということは、それはつまり

「隠さなくてはいけないことが、そこで行われてるということだ」

私の心の声を通り越して、阿久津さんは静かにそう告げた。その表情はどこか、苦しみに耐えているような印象を受けた。

あの悲しそうな顔に、それはよく似ていた。
やがて、阿久津さんは静かに目を閉じて再び語りだす。

「その、隠さなくてはならないこと。それは……」

それは。

私の心臓がドクンと跳ねる。

乾いた空気の塊を飲み込んで、肺の中でゴトリと音を立てて転がった。

「ここから先は、お前にとっても辛い内容になるだろう」

しかし阿久津さんは、一度そこで話を区切る。

彼の表情は、あの悲しいものに変わっていた。

自分を責めて責めて、それでも責め切れずに、抜き身の刃で全身をズスタに切り裂いてしまいそうなほどの悲しい顔。

それが、私を躊躇わせる。

真実を知りたいか？

真実を知ってなお、自分を見捨てないでいられるか？

自分を拒絶せずにいられるか？

他にもない、私自身が問いかけてくる。

私は自分の胸に手を添える。

ドクンドクンと、さっきよりもまた心臓の鼓動が高鳴っているのが分かる。

それは恐怖か、高揚か。

どちらでもないのかもしれない。

だけど、ここで私が私の過去を拒絶したら、それは今一緒にいる阿久津さんまでも拒絶してしまうのではないだろうか。

根拠のない考えだったが、なぜだかそれに頷いている自分が確かにそこにいた。

阿久津さんは言った。

私を連れて逃げてきたと。

私にはそのときの記憶はないけれど、もしそれが、私が阿久津さんに「助けて」と叫んだのだったとしたら。

私はこれ以上、逃げるわけにはいかない。

胸を撫で下ろす。

鼓動はまだ収まらない。

阿久津さんに視線を向けると、彼は黙ったまま私の目を見据えていた。

その目が、できるなら語りたくないと言っている。

だけど、私は……。

ごめんなさい、阿久津さん。

そう心の中で呟いて、私は口を開いた。

「話してください、阿久津さん」

決心のこもったその声に、阿久津は再び目を閉じた。

表情が強張ったように見えたが、それは一瞬で消える。

「……分かった。話そう」

そして彼は、真実の断片を語りだす。

「遺伝子レベルの研究をするほどの研究所であるからには、そこはかなりの設備が揃っていた。現存する日本の中では最先端と断言してもいいだろう。それを目当てにやってくる人も少なくはなかった。ゆえに、研究所内では連日のように実験が行われた。これ自体は別におかしなことじゃない。やろうと思えばそのへんの大学でも簡単にできる。設備さえ整っていればな。さつきも言ったような、遺伝子の交配、配列の変換。他にも動物の解剖、生態系の調査、数

えればきりがない」

阿久津さんの言っている単語の意味は何となく理解できるのだが、どうもイメージが沸いてこない。

それは私の記憶が欠損しているからなのだろうが、ここで私は思い当たった。

どうやら私は記憶を失っていると言っても、一般的な教養に対する知識は失ってはいないようだ。

そうでなければ阿久津さんの話を理解することはおろか、そもそも私は日本語を喋ることすらできないはずなのだから。

そんな私の考えをよそに、阿久津さんは続ける。

「だが、その中で俺が見つけてしまった当時の……16年前の記録は、本当にとんでもないものだった……」

阿久津さんの表情が曇る。

怒りすら覚えるような表情に、私は思わず肩を竦ませた。

「そのとき初めて、俺は闇に触れた。触れてしまったんだ。その研究所が、ただの実験場だと知って……」

「……実験場？」

私は無意識のうちに聞き返していた。

しかし、阿久津さんから返事はない。

彼はただ顔を俯いて、額を手で押さえてうなだれるだけだった。だが次の瞬間、私はその言葉に背筋が凍る思いをした。

「人体実験だ……」

私は声が出せなかった。

その言葉の意味を汲み取るのに、一体どれだけの時間を必要としただろう。

感情を押し殺して、阿久津さんは続けた。

「そこは研究所とは名ばかりの、実験場と処刑場に過ぎなかったんだ……」

私はただ、沈黙することしかできなかった。

3

やがて、阿久津さんは覚悟を決めたように顔を上げた。
後戻りはできないとでもいうように、それでも彼が奥歯を食いしばっているだろうということは何となく分かった。

「あるとき、研究所の裏手に見慣れない車が止まっていたのを俺は偶然見かけたんだ。すぐにおかしいと思った。研究所に入るには正面ゲートで二重、三重にも及ぶチェックを受ける必要がある。すでに研究員として登録されている人間なら、認証のカードキーで自由に入入りできるが、外部の人間だと話は別だ。そして、研究者は全員研究所管理の寮のような場所に住まわされることになっている。外出の場合は許可が必要だし、何より一度外出して戻ってきたとしても正面から入ってくれば何も問題はないはずだからな。だからその車は、明らかにその場所では異常だったんだ。俺はあやしいと思って、その一部始終を見届けることにした。前々からこの研究所には不審な点が多く、俺も少なからずに疑問を持っていた。それを確かめるいい機会だと思ったんだ」

変わらずに話す阿久津さんだったが、顔色はさっきよりも悪くなっているように見えた。

部屋が薄暗いというのもあるが、それを差し引いてもやや蒼ざめているように見える。

現に、阿久津さんは両手を合わせて握り締めているが、そこには微かな震えが見られる。

私はとてつもなく不安になった。

この先、彼の口からどんな言葉が出てくるのかと思うと、耳を塞ぎたい衝動さえ覚えた。

「だが、そもそもそれが間違いだったのかもしれない。俺はそこで、決して見てはならない、触れてはならない事実には首を突っ込んでしまっていたんだ。……俺がしばらく建物の影で身を潜めていると、ふいに非常口のドアが開いた。中から出てきたのは、同じ白衣姿の男性だった。面識こそはないが、同じ研究員だということは一目瞭然だった。それを合図にするように、停車していた車のドアが音もなく開いた。そこからでてきたのも白衣に身を包んだ男性だった。車内には男性のほかにも2人ほど別の男性がいたようで、その誰もが端から見れば同じ研究員に見える格好をしていた。彼らはいくつか言葉を交わしていたが、俺には遠くて聞き取ることはできなかった。やがて彼らは、車のトランクの中から信じられないものを持ち上げた。遠目に見てもはつきりと分かった。あれは、間違いなく人間だった」

その言葉に私は息を飲んだ。

もはや寒気などというレベルは通り越している。

おぞましいほどの吐き気とめまいが、胃の中でごちゃまぜになっているようだった。

阿久津さんの話はまだ終わっていなかったが、私にでもその後は容易に予想が付いた。

トランクの中から担ぎ出された人間。

運ばれた場所は研究所。

もう十分だった。

その運ばれた人間は、その後どうなるのか。
決まっている。

彼らの手によって研究材料とされるのだ。

「う……」

私は思わず呻き、口を手で抑えた。

吐き気がこみ上げてきた。

胃酸がこみ上げ、口の中にわずかに酸味が広がる。

それでも私はやめてとは言えなかった。

それは逃げることになるし、話してくれている阿久津さんだって同じ気分のはずだからだ。

私はあえて沈黙を押し通すことで、阿久津さんに話の先を促した。

「……彼らに運び出された人は、そのまま手術台のようなカートの上に寝かされて研究所の中へと運ばれた。俺はすぐにあとを追いかけた。彼らは非常用のエレベータに乗り込むと、そのまま姿を消した。俺はパネルで階を追いかけて、すぐに階段で向かった。驚いたよ。俺はそのとき、研究員として半年ほどそこで生活を送っていたが、そのとき初めて知った。この研究所に地下なんてものが存在していたことに……」

研究所の地下。

これから起きることを考えれば、まさにもってこいのような場所だ。地下なら悲鳴も漏れない。

処理にも困らない。

それはまさしく、歴史の闇という表現にぴったりだった。

「そこで、俺は見たんだ。あいつらはすでに人間が踏み入れている

い領域を、とつくに土足で踏み越えてしまっているということに」

その言葉を聞いて、私は疑問を持った。
どうということだろう。

私が考えていたこととは、何か食い違いが発生しているような気がする。

ためらいがちに、それでも私は思い切って口にした。

「あの、阿久津さん。どうということですか？」

「……どうということ、とは？」

阿久津さんは私の問いの意味が分かっているようだった。
私は細くの意味も含めて、言葉が続ける。

「……その、こんなこと考えたくもないですけど、その運ばれた人は実験体みたいな扱いをされたんじゃない？」

「ああ……その通りだ」

「で、でもですよ。例えば、警察とかでも殺人事件とかが起きれば死体を解剖したりはしますよね？」

私の頭の中には、いわゆる司法解剖のイメージがあった。

死因を調べるために死体を調べるという、あの行為だ。

だから私は、運ばれた人も病気が何かですでに息がなく、それを調べるものだと思ったのだ。

もちろん仮にそうだとしても、死体に鞭を打つようなやり方は私は考えられない。

死んでしまったのなら、そのまま静かに眠らせてあげればいいと思う。

それが唯一、死者に対して冥福を祈るというものなのではないだろうか、と。

しかし、私の考えはとんだ奇麗事だった。
それこそ、夢物語もいいところだったのだ。
阿久津さんの言葉で、私はそれを思い知らされることになる。

「確かに、日下部の言っていることは一つの理論としては正しい」
「なら……」

一体何が、どのような領域を踏み越えているというんですか？
そう聞くよりも早く、阿久津は告げた。

「だがそれは、あくまでも死者を相手にした場合の話であって、
死んでいない人間を秤にかけたものではない」

「……そんな……それじゃ、まさか」

私はそれ以上言葉が続かなかった。

さつき以上の強烈な吐き気が込み上げてくる。

阿久津さんは、ただ黙って頷いた。

そして、言った。

「あいつらに実験体の生死などまるで関係ない。生きていれば、
どの程度で絶命するかを実験するだけだ」

私は思わず口を抑えた。

胃の中のもの全部逆流しそうになる。

そんな私に、阿久津さんが椅子を倒して立ち上がる。

すぐに私の背中に手を回し、少しでも落ち着かせようと肩を抱いて
くれる。

だけど、私は全然落ち着いてなどいられない。

それどころか、頭の中にいやな映像が流れて止まらない。

生きている人間。

目を閉じているのは眠っているから。

だが、もう目覚めることはない。

なぜなら、今から殺されるから。

麻酔を打たれ、脳を仮死状態にし、ありとあらゆる薬物を投与され、神経さえも麻痺。

血液をぎりぎりまで抜かれ、臓器を取り出され。

それは、ただ生命活動を保つことができているだけの 人形。

壊れた玩具。

自我では指一本さえ動かせない。

哀れな人形。

機械仕掛けの。

マリオネット。

それでも、助けを求めて。

叫べない。

声にならない悲鳴。

涙すら流れない。

それでも、生きていた。

救いを求めていたのだ。

ダレカタスケテ。

シニタクナイ。

シニタクナイヨ……。

ダレカ 。

「嫌あああああああああああーっ！！！」

私は狂ったように叫びだしていた。

もう自分でも、何を叫んでいるのか分からないほどに。

両耳を手で塞ぎ、膝の上に顔を突っ伏し、迷子の子供のように泣き続けた。

涙が止まらない。

悲しいわけじゃないのに。

どこからこんなに溢れてくるんだろうというくらいに。
どうしようもなく怖かった。

怖くなってしまった。

記憶のない自分が怖いんじゃない。

こんな話をした阿久津さんが怖いのもない。

そんな風に、道端の雑草を蹴り散らすような仕草で人の命を弄べる人間がこの世界の存在していることが、どうしようもなく怖い。

「落ち着け、日下部。大丈夫だ、大丈夫だから」

ようやく我に戻った私は、一瞬ここがどこなのか分からなくなっ
てしまった。

だが、すぐに思い出す。

薄暗い灰色の部屋、白い壁、白いベッド。

変わらない場所で、私は膝を抱えて泣いていた。

はずだった。

なのに、私の体はいつの間にか阿久津さんの腕の中にすっぽりと収
められていた。

彼が着ている白いワイシャツが目の前に飛び込んできて、私は自分
の目を疑った。

そして背中には、未だに阿久津さんの手が優しく添えられていた。

「怖がるな。お前はここにいる。俺もここにいる」

そういう彼の言葉が、今の私の心に優しく溶けていく。

「言っただろう？ お前は俺が守る、何があっても、絶対にだ。
だから、もう泣くな……」

「……はい」

私は消え入りそうな声で、どうにかその一言を搾り出した。
阿久津さんはもう片方の手で、私の頭を軽く撫でた。
涙はもう止まりかけていたけど、私はもう少しだけこうしていたくて、静かに目を閉じた。

4

それから少しの時間が経って、ようやく私は落ち着きを取り戻した。

阿久津さんは、これ以上は私の精神的負担が大きいかから、話すのをやめようと言った。

しかし私は、無理言ってそれを聞かせてくれと頼んだ。

こんな中途半端で投げ出すのは嫌だったし、それにまだ私は私のことを何一つとして知らないままなのだ。

そんな終わり方だけは、どうしてもしたくなかった。

しぶしぶだが、阿久津さんも承諾してくれた。

すっかり冷め切ったコーヒーをお互いに一口含んだところで、阿久津さんは再び口を開いた。

「それで、だ。俺がそこで見たものっていうのはそれだけじゃなかった。むしろ、こっちのほうに俺には衝撃が大きかった」

生きた人間が実験材料として使われることよりも衝撃が大きいこと。

私は想像も付かなかったし、できればしたくもなかった。

私が無言でいるのを見て、阿久津さんは続けた。

「日下部、お前は試験管ベイビーという言葉を知っているか？」

急に話を振られ、全くの虚を疲れた私は慌てた。

「え、えっと……」

私は自分の中の記憶以外の一般知識をひっくり返す。

「詳しくは分かりませんが、人工授精とかとよく似たあれですか？」

「まあ、似たようなものだな」

頷いて、阿久津さんは答えた。

「一般的には子供がほしくてもできない夫婦などが、人工的に精子と卵子を受精させて子供を授かるうとするわけだ。うまく受精卵となったら、あとはそれを母親となる女性の体に直接戻してもいいし、きちんとした設備さえあるのなら試験管の中で栄養を与え続けるということもできる。ある程度まで成長したら、そこからは実際の両親の手で育てさせればいいわけだ」

いいイメージは持てなかったが、私は素直に納得した。

確かに前者のように、どうしても子供ができない家庭というのは世界中に決して少なくないだろう。

それを思えば、やむをえずにそういう手段をとることもあるというわけだ。

「でも、人工授精も一応は認められているはずじゃ……」

「確かに、まだまだ反対の意見は圧倒的に多いが、危険視されているというわけではない。ただ、生命の誕生という神秘的なものを人の手で人工的に行うというのは、やはりいいイメージは持たれないだろう」

「つまり、それが入ってはいけない領域に足を踏み入れるっていうことなんですね」

私が納得しかけたところで、しかしあっさりと阿久津さんはそれを一蹴した。

「いや。俺が言ったことはそういうことじゃない」

「え？」

「確かに日下部の言う通り、人工授精という技術も生命の誕生という神がかった分野を大きく侵している。だが、そもそも出産には病院関係者も含めて大勢の人間が関わる。もちろんそこには医療機器なども存在するし、全体を見ればそれは人々の手によって行われているものであって、決して領域を侵しているわけではない。事実、出産には多くの人が立ち会うだろう。もはや生命の誕生という瞬間は、限りなく人為的なものとして扱われていると俺は思う」

言われて見ればそうなのかもしれない。

少なくとも私自身は出産の立場に立ち会ったこともないし、経験に關してはあるわけがない。

なのでいまいちぴんとこないが、阿久津さんの言っていることも一つの意見としては間違っではないと思う。

だとしたら、一体阿久津さんは当時、その目で何を見たというのだろう。

私の視線に気付いたのか、阿久津さんは話の先を語り始めた。

「俺が見たのは、それこそ同じ人間がすることとは到底思えないものだった。思い出すだけで反吐が出そうになる……」

阿久津さんがそこまで言うということは、相当なことだったのだろう。

正直、私も聞くことに躊躇いを覚えている。
だけでもう決めたのだ。

自分の周りに起きたことを、全て正面から受け入れると。

「……あいつらは、まさに今俺が言ったことを繰り返していたんだよ」

「繰り返し？」

聞き返すが、私には意味が良く分からない。

繰り返すとは、一体どういうことだろうか。

単語そのものの意味はもちろん分かっている。

同じ事を何度も何度も、ということだろう。

……何度も何度も？

同じ事を？

阿久津さんが、今、言ったことを……？

それは、つまり。

「人工授精……」

私は呟いた。

消え入るような声だったかもしれない。

阿久津さんは答えずに、その先を語りだす。

「あいつらは、そうやって運ばれてきた実験材料の体内から精子および卵子を取り出し、冷凍保存させ、無差別に受精させて新しい人間を作り出していた……。そして誕生したばかりの人間さえも、ただの実験道具として扱っていた」

私は絶句した。

すでに気持ち悪さを通り越して、吐き気はおろか言葉すら出てこな

い。

何を言えばいいかわからない。

なんだ？

なんなのだろうそれは？

実験体として遊びつくすだけではならず、彼らの遺伝子にまで手を伸ばして新しい実験体を手に入れる？

理解できない。

本当にそれは、人間のすることなのか？

同じ人間がすることなのか？

「……そんな、そんなのって」

ありえない。

その一言が、どうしても言い出せなかった。

なぜなら、これは紛れもなく事実だったからだ。

私はそれ以上何も言えず、ただタオルケットを強く握り締めていた。許せない。

信じられない。

そう思うたびに、同時にたとえようのない無力感が支配する。

どう思おうと、全てはもう終わった過去のことなのだ。

今更どうしようもない。

分かっている。

分かっている、どうしようもなくやるせないのだ。

「だが」

阿久津さんの言葉に、私は耳だけを傾けた。

「いくらなんでも、そんなにしょっちゅう人体実験は行えない。

何よりもまず、人がいなくなれば必ずそれは事件になる。事件にな

れば警察が動くし、そうなれば研究所の存在そのものが公になってしまう可能性がある。もう一つ、それは実験体としての役目を終えた死体の処理だ。研究所は人の目に付かないとはいえ、東京都の郊外だ。死体を捨てるにしても埋めるにしても、それが日本の首都というのは危険すぎる。かといって、どこか遠くの山奥まで死体を運ぶのもそれはそれで危険が増す。そういう手間を考えて、ほとんど多くの死体は秘密裏に焼却された。骨の欠片も残さないほどにな

もはや反応を返せない。
今の私こそが、それこそ人形のようにその場に佇んでいるようだった。

「それでも、あいつらは実験をやめようとはしなかった。それどころか、新たにとんでもないことをやり始めた。要するに、自分達が幾度となく実験を繰り返しても、社会的にそれが騒がれなければ何も問題はないと。そう考え出した連中は、そこでとうとうその結論に辿り着いてしまった。どれだけ殺しても騒がれない、問題にすらなりえない人間。つまり、社会的にその存在を生まれたその瞬間から認識されていない人間がいればいい。だが、そんな人間はいるわけがない。全ての人間は生まれた瞬間からその国に所属し、国籍と共に個人情報を与えられて国に管理されるからだ。だったら……」

阿久津さんの言葉が止まる。

言葉を探しているのではない。

言うか言うまいか、すんでのところであまり留まっているのだ。

阿久津さんの表情が苦渋に包まれる。

見ている私が辛くなるほどに。

しかし彼は、拳を握り締めて、言った。

「いないのならば、作ってしまえばいい……」

私の頭の中を電撃が貫くような衝撃が走る、
そして同時に、そこに残された一つの言葉。
ああ、そうだったのか。

これが阿久津さんの言っていた、決して踏み入れてはいけない領域を侵したという意味だったんだ。
私は俯いて、静かにその言葉を口にした。

「……クローン」

阿久津さんは何も答えなかった。

それが無言の肯定であることに、私は気付いていた。
お互いの間に、長い沈黙が流れる。

どちらも、その沈黙を取り払うことができないでいた。
時間だけが流れていく。

私も阿久津さんも、俯いたまま何も言葉を発さない。
分からなくなっていた。

今自分がいるこの世界というものの、どこまでが正しくてどこから
が間違いなのか。

私がふいに顔を上げた、そのときだった。

阿久津さんは俯いたままで、静かに話し始めた。

「……そしてその結果として、16年前に研究所で初のクローン
実験が行われた。被験体として選ばれたのは、当時17歳の少女だ
った。……彼女は数日前から行方不明になっていて、実験体として
は申し分なかった。仮にこのまま行方不明のままでも、社会的には
何の問題もなかった。彼女が実験体として運ばれてきたとき、彼女
はすでに虫の息だったらしい。だが、連中にはそんなことは関係な
い。連中が用があるのは、彼女ではなく彼女の遺伝子だ。一回でも

クローンが成功すれば、あとはその成功体をさらにクローンすればいい。だから連中は、思ってもいなかっただろう。まさか16年後の今になって、そのクローン体が連れ去られるようなことになるなんてことは……」

「……え？」

私は思わず聞き返した。

すると、阿久津さんはゆっくりと顔を上げた。

その表情は、あの悲しみに満ち溢れたものだった。

見ているだけでこっちの胸が苦しくなりそうな、そんな表情だった。その目は真っ直ぐに、私を直視していた。

まるですごまれたように、私は出かかった言葉を飲み込んだ。心臓の鼓動が高鳴る。

搾り出した声は、彼の名前を呼ぶだけのものだった。

「阿久津、さん……？」

「……彼女の」

阿久津さんは私の言葉に反応せずに続けた。

「被験体となった彼女の名前は 日下部楓」

「………え」

時間が止まってしまったかのような感覚。

私と阿久津さんの周りの空気が、凍りついたように停止する。頭が正常に働かない。

今のは空耳？

聞き間違い？

頭が全てを拒否しようとする。

だけど、私は聞いた。

私だけが聞いていた。
その言葉を。

「君のことだ。 日下部」

体が言うことを利かない。
彼の言葉から、耳が離せない。

「君は、日下部楓の クローンなんだ」

凍りついた時間が、崩れ落ちて動き出す。
私は阿久津さんの目を見たまま、何も聞き返すことができなかった。

第三話：少女の存在（後書き）

どうも、拝見してくださった方にはありがとうございます。

作者のやくもと申します。

「きみのでのひら」も今回で第三話となります。

話の一つ一つが短めなので、割とすらすらと読んでくれていると思います。

この第三話ではちょっとリアリティというか、血生臭い表現も使用しています。

あまりこういった表現は得意ではないのですが、これも小説全体で見ればなくてはならない通過点ですので、色々試行錯誤しながらもがんばってみました。

とはいえ、まだまだ表現力が足りないのもまた事実。

もっと精進せねばならないようです。

さて、前回のあとがきで書いたとおり、ここからストーリーは少しずつ変化を遂げていきます。

少しでも読者のかたに「続きが読みたい」「気になる」と思っただけならば幸いです。

もしかしたら予想通りの結末かもしれません。

もしかしたら予想外の結末かもしれません。

ひょっとしたら結末なんてものは最初から存在しないのかもしれないせん。

なにはともあれ、どうか最後までお付き合いいただければと思います。

それでは、また次回お会いしましょう。

第四話：束の間の小さな幸福

1

やはり話すべきでなかったのだろうか。

阿久津は外の空気を吸い込みながら思った。

今の自分に語れることは全て語った。

あとは日下部自身が、どこまでこの目の前に突きつけられた事実を受け入れることができるかだ。

しかし、やはり胸は痛む。

事実を語った自分は、果たして本当に正しかったといえるのだろうか。

それが仮に、日下部自身が望んだことであつたとしても、だ。

ただでさえ記憶を失っている日下部には、相当辛い現実を突きつけてしまったことだろう。

彼女を傷つけた。

直接ではないにしても、それが阿久津の中で残った結論だった。

「俺は……」

他に何ができたんだろう。

適当な嘘を並べ立てて、少しでも彼女の気持ちを落ち着かせることもできたろう。

記憶のない彼女に、作り物の記憶を植え付ける。

だがそれは、阿久津が嫌っている研究所の連中と似たような考えに過ぎない。

自分の都合のいいように、他人の記憶や思い出を操作する。

そんなこと、できるはずがなかった。

ただでさえここまで自分の身勝手に、彼女を危険な目に巻き込んでいるというのに。

「俺は本当に、正しかったのか……」

阿久津は空を仰いだ。

どこまでも蒼く澄んだ空、雲一つない青天。

吹く風は相変わらず冷たいが、注ぐ日差しはどこか懐かしさを含むような暖かさを感じさせる。

こんな景色だけを眺めていれば、同じ空の下どこかであんな汚れた行為が行われているなどと、誰が想像できるだろうか。

いつだってそうだ。

この世界は理不尽の塊でできている。

罪もない人が命を落とし、罪人はのほほんと生き延びる。

優れた才能はやがて、歴史を変えるだけの闇によって作り変えられる。

誰がそれを望んだというのだ？

彼らはただ、何も知らなかっただけだというのに。

何も知らないということは、それだけで罪となりうるのだろうか？ そんな馬鹿げた話があったまるか。

いつの時代のどこに生まれた命だろうと、他人がそれをどうこうと手を出していいはずがない。

誰であろうと、どんな命であろうと、それらは生きるために生まれてきたのだ。

それを弄ぶ権利なんて、たとえ神であっても持ち合わせてはいけない。

だが、人はその領域を踏み越えた。

いとも簡単に踏み越えたのだ。

そして阿久津もまた、知らず知らずのうちにそんな人間に手を貸していたのかもしれない。

できることなら、そんな連中を一人残らず片っ端から消し去ってやりたい。

だが、そんなことで自分の中の苛立ちや憤りを解消したところで、結局は何の解決にもなりはしない。

死んだ人間は生き返らないし、過ぎた過去はもう書き換えることはできない。

だから、科学者の多くは過去にこだわらない。

過去には何もないことを彼らは身をもって知っているからだ。常に見るのは先の先。

半世紀先の未来までも見据え、彼らは歩き続けているのだ。

しかし阿久津は違う。

彼だって研究者である以上、彼らの考えには納得できるし共感だつて持てる。

間違っているとは思わない。

だが、正しいとも思えない。

捨て切れない過去なんて、いくつもあるだろう。

少なくとも、阿久津は持っている。

消えない傷、忘れられない過去の記憶。

それらは嘘でも偽りでもなく、今だって彼のまぶたの裏に鮮明に残っている。

「……………」

阿久津の呟きは、吹きぬけた風に運ばれた。

それは、数年前の過去の記憶。

忘れられない、忘れてはいけないこと。

そのために、自分は今こうしてここにいるのだろう。

たとえそれが、最終的に彼女を今よりももっと深く傷つけることになってしまうとしても。

それでも自分には、これしかできない。

それが彼女を連れ去り、真実を伝えた自分の最後の役目。
赦されなくなつていい。

せめてそのときを迎えるまで、彼女の傍にいたことができるのなら。
これ以上の幸せが、他にあるはずがない。

阿久津はもう一度空を見上げる。

そこに、真昼の月があつた。

あの月は昨夜も、自分と彼女を照らし出してくれたのだろうか。
手を伸ばす。

届かないと分かっているけど、掴めそうな気がした。
自分なんかのちっぽけなてのひらにも、何かを掴めそうな気がした
のだ。

そして阿久津は、研究所の中へと引き返す。
思った以上に体が冷えていた。

防寒具の一つも着用していなかったことに、阿久津は本当に今更に
なつて気付いたのだつた。

苦いコーヒーの一杯でも飲んで、それから日下部の部屋に行こう。
まだ阿久津は、彼女の口からの言葉を受け取っていない。

それが拒絶でも、否定でも、なんであろうとも。

その全てを受け入れようじゃないか。

そのために、自分という存在はここにいるのだから。

2

阿久津は扉をノックする。

しばらくして、中から日下部の声が小さくはいと答えた。

静かに扉を押し開け、阿久津は部屋の中へ入った。

日下部はさつきと同じように、ベッドの上で足を伸ばして座つてい
た。

顔色も幾分かよくなったような気がする。

阿久津も先ほど同じように、パイプ椅子に腰掛けた。

しばらくは沈黙が流れると思ったが、意外にも日下部はすんなりと口を開いた。

「阿久津さん」

「……なんだ？」

「クローンって言うのは、コピーとは違うんですよね？」

「……ああ、そうだ」

一拍置いて、阿久津は続ける。

「クローンというのは、あくまでも遺伝子の構造が同じというだけであって、人間そのものを同じとしているわけじゃない。極端な話、同じ遺伝子を持つ双子でも性格や趣味は様々だろう？ それと同じで、仮に1つの遺伝子から10のクローンが作られたとしても、それぞれ顔も体格も性格も違う、別々の人間として存在することになる。性別や血液型は同じだがな」

それを聞いた日下部は、どこか安心したような表情を見せる。

「じゃあ……私は一体、誰なんですか？」

阿久津は言葉に詰まる。

言葉を探しているといった方がいいかもしれない。

できるだけ日下部を傷つけないような言い回しを探しているのだ。

「……遺伝子上、日下部楓と同じものを持っているのだから、日下部楓ということになる。だが……」

日下部は顔を上げ、阿久津を見る。

「同じ遺伝子を持つ日下部楓でも、16年前に死んだ彼女と今のあなたは全く違う、それぞれの独立した人間だと俺は思う。彼女は彼女、お前はお前だ。例えばクローンであつても、今のお前は一人の人間だ」

「……本当に、そうなんですか？」

日下部の声はわずかに震えていた。

彼女の阿久津を見るその目は、うつすらと涙で滲んでいる。

「確かに私は、こうして人間として生きているかもしれませんが。だけど、それだけで本当に私は人間であるといえるんですか？人権も国籍も何もない、世界に存在すら認められていないのに、それなのに私はこうしてここにいる。呼吸をして、喋って、涙を流してる。それでも、本当に……」

最後の方は涙に紛れて小声になっていた。

阿久津はただ、そんな日下部の姿を見ていることしかできなかった。

「私は、生きているといえるんですか……？」

助けを求めるように、日下部は口を開いた。

彼女の涙は頬を伝い、ぼたぼたと真つ白なタオルケットの上に灰色の斑点を作っていく。

阿久津は胸が締め付けられる。

己の無力さを呪ってしまいたくなるくらいだ。

しかしそれでも、彼は言う。

言わなくてはならない。

彼女はきつと、その言葉を待っているから。

他でもない、世界中の他の誰でもない。

阿久津恭祐の口から、その言葉が紡がれるのを。

「……当たり前だ」

その言葉に、涙を流しながら日下部は顔を上げる。

「例え今のお前が社会的には存在しない存在でも、世界の誰もお前のことを知らなかったとしても、俺だけはお前の存在を否定しない。絶対に否定しない。……お前は、人間だ。血も涙も通ってる。嬉しいときに笑える、悲しいときに泣ける。誰かのために笑える。誰かのために泣ける。他に何が必要だ？」

その言葉に、少女の堰が崩れる。

抑えていた涙と言葉が、一気に溢れ出る。

まるで赤ん坊のように、日下部は泣き続けた。

今の今まで、感情を押し殺して胸の奥にしまいこんでいたもの。

恐怖、不安、拒絶、否定。

それらがようやく、出口を見つけて流れ出す。

きっかけはなんでもよかったんだろう。

夜中に一人、泣くことだってできたはずだ。

ただ、一人で泣くことも怖かっただけ。

誰かに聞いてほしかった。

自分の弱さを全部さらけ出してしまいたかった。

一人では抱えきれなかった。

支えてくれる誰かが必要だった。

本当は、その優しさに触れていたかっただけ。

本当は、その温もりに触れていたかっただけ。

だけど、その優しさや温もりが偽りのものではないかと思ってしまっ
う自分がいる。

どこまでが偽りでどこまでが真実なのか。

そう思うと、ただ、怖かった。

だけでもう、心配は要らない。

この人なら信じられる。
信じよう。

例えば世界の全てが間違っているとしても、この人だけは私を導いてくれる。
真実の場所へ。

「ごめん、なさい……ごめ、なさ……」

「……分かってる。分かってるから」

「私、ずっと信じ切れなかった……何度も助けてもらったのに、それが全部、嘘みたいに見える……」

日下部の細い指が、阿久津のシャツを掴んで離さない。

その指先は、小さく震えている。

彼女はその小さな体に、どれだけの恐怖を押さえ込んでいたのか。

阿久津はただ、そっと日下部の肩に手を置いて、彼女が泣き止むのを待続けた。

今自分の胸の中で泣いているのは、たった一人の少女だ。

クローンでも、16年前の日下部楓でもない。

今を確かに生きている、日下部楓という小さな少女だった。

3

今日という一日が静かに終わりを告げようとしていた。

私はこの足ではなかなか思うようには動けないので、結局一日中ベッドの上で過ごしていたことになる。

これではまるで入院患者だ。

私は何をするわけでもなく、ただ体を横にしていた。

阿久津さんは阿久津さんで、何をするわけでもなくベッドの脇でパイプ椅子に腰掛けていた。

時々私が思い出したように声をかけて、阿久津さんがそれに答えて

適当な会話が始まる。

それが終わるとまたお互いに口を閉じ、やがてまた私が口を開く。その繰り返しだった。

昼を過ぎ、夕方になるまでそんな時間が過ぎていった。

ちよつど6時を過ぎた頃、阿久津さんが尋ねた。

「日下部、腹は減らないのか？」

「え、私ですか？」

「昼前に起きて、ずっと何も食べていないだろう。コーヒー一杯だけじゃ体が持たないぞ」

言われて見れば、確かに少なからず空腹感を覚えている。そういえば、昨日の夜も食事らしい食事をした記憶がない。もう丸一日近くコーヒーだけで過ごしていることになる。

「ちよつとお腹も空いてますけど、それよりも、食料なんてあるんですか？」

私はそれが気になっていた。

コーヒーを出されている時点で気付くべきだったのだが、阿久津さんの言葉を借りるならここはもう廃墟同然のはずだ。

そんなところに食料などがあるのかと思うと、正直言ってあまり期待はできないと思う。

そもそもガスや電気、それに水道が止まっていないのも気になる。もうずいぶん前に、ここは廃棄されたのではなかったのだろうか。私は阿久津さんに疑問をぶつけた。

「それは俺も気になったが、だからといって飲まず食わずでいるわけにもいかないからな。もしかしたら、ここは一時的に閉鎖されただけであつて、復旧する可能性もあるのかもしれない。だから電

「気やガスが繋がっているのかもな」

なるほど、そういう考え方もある。

そう納得しかけたところで、私は新たな疑問が浮かんた。

こうやってガスや水道が使われ続けられれば、当然ながらそこには料金が発生するだろう。

この研究所のそういった費用がどこから支払われているのかは知らないが、そういう痕跡が残るのはまずいのではないだろうか。

「そうだな。確かに日下部の言う通りではある。だがな、どの道今のお前の足では満足に歩くこともできないだろう。それに、ここに来るまでの道のりは車だったが、それももうガソリンが尽きて使えない物にならない。移動するにしても、あらたな移動手段を考えなくてはいけない。どちらにしても、今は怪我を治すことが先決だ」

「そうですね……私が昨日、あんな無茶しなければ、こんなことにはならなかったのに……」

「過ぎたことをどうこう言っても仕方ない。今は怪我の治療に専念するしかないんだ。……それと、あまり自分を責めるな、日下部」

「でも……」

「お前じゃなくても、こんな状況に遭遇すれば逃げ出したくなる気持ちにもなる。お前の反応は何も間違ったことじゃないんだ」

「……………」

私は言葉を失う。

気にするなという方が無理だ。

「とりあえず、何か作ってくる。このままじゃお互いに体が持たない」

「作るって、材料は……」

「一応保存食はある程度残っていた。ガスも水道もあれば、簡単

なものなら調理できる」

阿久津さんは椅子から腰を上げる。

「すぐ隣は給湯室になっているから、何かあったら呼べば分かる」
「あ、はい」

私が頷いたのを確認して、阿久津さんは部屋をあとにした。

私はそのまま、ぼんやりと天井を眺めていた。

なんだかんだで、私は阿久津さんに迷惑をかけっぱなしだ。

でも、こんなことを阿久津さんに言ったら、くだらないことを気にするなと返されそうなのでやめておく。

あの人は言葉は不器用だけど、それと裏腹に本音はすごく優しい。いつも自分よりも真っ先に、私の身を案じてくれる。

それは本当に嬉しいことなのだけど、その反面とても悲しくなる。

それはつまり、阿久津さん一人ならこんな場所からすぐに離れていくことができるからだ。

それは私の足の怪我など、あまり大きな問題ではなくて。

阿久津さんは頭もいいし、判断力や適応力もあると思う。

あまりに短い時間しか過ごしていないけど、私には分かる。

あの人は一人で何でもできる。

だから、ここから逃げ延びる事だってさほど難しいはずではない。でも今は、私がいるから。

私が気付かないうちに、彼の重荷になってしまっているから。

……これ以上考えるのはやめておこう。

この先のことを口にしたら、阿久津さんはきつと怒るだろう。

怒っている阿久津さんはまだ見たことがないけれど、きつと怖いに違いない。

そういえば、笑っている顔も泣いている顔も私は知らない。いつも見るのは、ちよつと無愛想な感じの顔だ。

泣き出してしまいそうな悲しい顔は何度か目にしているけど、阿久津さんは涙は流していない。

正直、阿久津さんが笑った顔と泣いた顔に関しては想像もできない。笑った顔は……意外とかわいいのかもしれない。

でもきつとあの人のことだから、笑顔と呼ぶには小さすぎる、微笑のような笑みだろうなと、私は勝手に想像する。

あ、ちよつとかわいいかもしれない。

思うと、私は小さく笑っていた。

そして気付く。

阿久津さんのことばかりどうこう言っていたけれど、私も今になってようやく笑えたのではないだろうか。

色々思い詰めていたとっかかりが消えて、初めて安心して笑えたような気がした。

思えば、私は阿久津さんとは対照的に泣いてばかりだ。

拳句の果てには脱走劇までしてしまい、怪我までの始末。

何度思ってみても情けない。

これじゃ溜め息しか出てこないのも仕方ないか……。

そう思う矢先、私の口から溜め息が出る。

そういえば私は、料理などに関してはどうなのだろうか。

包丁などの使い方はしっかりと出し出せるが、それイコール料理ができるとは限らない。

せめて女の子として、そのくらいの得意分野はあってほしい。

どうやら私が阿久津さんにできることは、そのくらいしか思い浮かばない。

しかもそれも、足がちゃんと治ってからではないといけない。

つくづく情けなくなってしまう。

でもまあ、今は阿久津さんに言われたとおり治療に専念しないとイケない。

私は体を起こして、そつと左足の足首に触れた。

今朝ほどの痛みはないが、それでもまだ歩くことは難しそうだ。

……待てよ。

私はそこでとんでもないことに思い当たった。

お手洗いはどうすればいいのだろうか？

まさか、そのつどに阿久津さんの手を借りて送迎されなくてはいけないのだろうか？

せめて松葉杖のような、支えになるものがあつてほしい。

いくらなんでもそれは恥ずかしすぎるし情けなさすぎる。

想像しただけで、私は沸騰したやかんみたいに顔が真っ赤になる感覚を覚えた。

誰もいないのは分かっていても、顔までタオルケットをかぶってしまふ。

どうしようどうしようとうと自問自答を繰り返していると、私はふと視界の端にそれを捉えた。

「ん……？」

そこには阿久津さんが腰掛けていたパイプ椅子があつて、その隣には机が置かれていた。

その机の引き出しの一ヶ所が、わずかだが開いていた。

私はなんだろうと思い、取っ手に指をかけてそつと引き出しを引いた。

すると引き出しの中から、埃をかぶった小さな箱のようなものが出てきた。

重さはさほどなく、振ってみても音がしない。

私は埃を取り払って、そつとその箱を開けた。

すると、中には細かい機械の部品が収まっていた。

回転すると思われるローラーのようなものの上には、あちこちに小さな突起が見える。

その突起が、ホッチキス針のようなものがいくつも並んだものを弾くように回る仕掛けのようだ。

「あ、これって」

そこまで見て、私はそれがなんであるか分かった。

「オルゴール？」

まさしく、それはオルゴールそのものだった。

本来なら、蓋を開ければメロディが流れる仕掛けになっていたのだろう。

だが、長い年月の間ずっと手付かずでいたせいだろうか、金属部分にはところどころ錆も見える。

埃をかぶっていたくらいだから、ずいぶん昔のものなのだろう。

それに、これがちゃんとしたオルゴールであるのなら、もう一つ必要なものがある。

私はそれがないか、机の中を改めてみた。

しかし、引き出しの中は埃しか見当たらない。

他の引き出しも念のため開けてみるが、どこにもあるはずのものが見当たらない。

そう、オルゴールのぜんまいを巻くネジがなかったのだ。

箱の背中の部分には、ネジを巻くであろう穴があるのだから、ネジもどこかにあるとは思っただけど……。

少なくとも、この机からはネジは見つからなかった。

私が少しがっかりしていると、ちょうど阿久津さんが部屋の扉を押し開けた。

「材料が限られていて、こんなものしか作れなかった。まあ仕方ないか、保存ができるものといえば麺類が主体だからな」

そう言っただけ阿久津さんは、手に持っていたお皿を机の上に置いた。

「何かテーブルのようなものがあればいいんだが……」

阿久津さんがもう一度給湯室に向かって出て行くのを見て、私は机の上に置かれたそれを覗いた。

お皿の上に載せられていたのはスパゲッティだった。

おいしそうなトマトソースの匂いが私の食欲を誘った。

そうこうしていると、阿久津さんが何かを抱えて戻ってきた。

「こんなものしかなかったが、まあないよりはマシだろう」

それは折りたたみ式のテーブルで、組み立てるとちょうどいい高さになった。

阿久津さんはそこに、真っ白な布を敷いた。

ベッドの替えのシーツが何かだろうか。

そしてその上にお皿と、あとからもってきたフォークを乗せた。

「味に保障はできないが、冷めないうちにな。少しでも体力をつけておかないとな」

阿久津さんはそう言うが、レトルトの見た目にしてはとてもおいしそうだ。

空腹がそれを後押ししているのかもしれない。

空腹こそが最高の調味料とはよくいったものだ。

「どうした？ のびるぞ？」

「あ、はい。いただきます」

私は一度手を合わせ、フォークにパスタを絡めて口に運ぶ。トマトソースの酸味と暖かい味が口の中に広がる。

とてもレトルトとは思えないほどにおいしかった。

「どうだ？ 味は大丈夫か？」

「はい。おいしいですよ」

本当に美味しかったので、私は素直に感想を述べた。
本当に、ただそれだけのことだったのに。

「そうか」

そう言って、阿久津さんは小さく微笑んだ。

その笑みは、私が勝手に想像していた阿久津さんの笑みとそっくりだった。

なので、私は思わずドキリとしてしまう。

フォークを握った右手が宙ぶらりんで止まってしまう。

「どうかしたか？」

「あ、いえ、なんでもないです！」

意味もなく声がうわずってしまう。

阿久津さんは不思議そうに首を傾げたが、すぐにまた食事を再開した。

だけど私は、その後もなかなか心臓の高鳴りが止まなかった。

せっかくのおいしいスパゲティだったのに、味わうのも忘れて機械的に口に運んでいたため、完食したのに味を覚えていなかった。

「食欲はあるみたいだな。安心した」

阿久津さんがそう言って食器を下げたあとも、私はまだ真っ直ぐに阿久津さんの顔を見ていられなかった。

気のせいかな熱っぽさまで感じる。

思い返してみれば、私はもう何回も阿久津さんの目の前で泣き出してしまっているのだ。

それどころか、抱きついて泣いていたと思う。

それは普通に考えれば、とても恥ずかしいことではないだろうか。本当に今更になって、私は阿久津さんという男性を意識し始めてしまっていた。

しかし、意識し始めてしまったら最後、今までの行いを思い返すだけで頭から湯気が出そうになる。

「何をしているんだ、日下部？」

私がベッドの上で奮闘していると、いつの間にか戻ってきた阿久津さんがそこにいた。

「え！？ わ！？ いや、別に何でも……」

もはやなんでもないわけがない。

自分でも何を言っているのかさっぱり分からない。

阿久津さんは目を丸くしていた。

だが、すぐに小さく微笑んで

「何があつたかは知らんが、少しは元気になったみたいだな。なら、それでいい」

そう言つて、私にコーヒーの入ったコップを差し出した。

「あ、ありがとうございます……」

まただ。

また阿久津さんが微笑んだ。

私は顔を伏せながら、すするようにコーヒーに口をつけた。

阿久津さんは一口飲み干したコップを机の上に置いて、何かに気付いた。

「これは……？」

「あ、それは」

それはさっきまで私が手にしていた、古びたオルゴールだった。

「オルゴールか……」

「引き出しの中で見つけたんですけど、もう音が出ないみたいで……ずいぶん古いみたいですから」

「ネジもなかったのか？」

「全部の引き出しを見ましたが、ここにはなかったです。なくなっちゃったのかもしれないですね」

「……そうか」

阿久津さんはオルゴールの箱を戻すのと入れ替わりに、コップを手にしてコーヒーを口にする。

その後私達はいくつか会話をしながら、しばらく時間を潰した。

「けど、あれですよ。当たり前ですけど、ここまで何もないと時間もなかなか潰せないですね」

「確かにそうだな。四六時中話し続けているのも変だしな」

「せめて、本くらいあればよかったんですけどね」

「難しいな。仮にあったとしても、研究所として使われていたような場所だ。専門の書籍しか置いてないだろう」

もっとも、私としてはこうしている時間もそれはそれで退屈はし

なかった。

記憶はなくても、こうしてちゃんと会話を楽しめる。それは私にとって嬉しいことだった。

「まあ、することがないときは早く体を休ませた方がいいだろう。生活のリズムは狂うかもしれないがな」

阿久津さんは空のコップを手にして立ち上がった。

「無理に寝る必要はないが、横になつていた方がいいだろう。へたに動いて傷が悪化したら意味がないからな」

「そうですね」

「俺は隣の部屋にいる。何かあったら壁越しに呼ぶなり壁を叩くなりしてくれればすぐに来る」

「分かりました」

阿久津さんはそのまま扉を開けて、部屋を出ていく。

そのすんでのところで、私は彼を呼び止めた。変に焦ったような、ちょっとおかしな声が出ていたかもしれない。阿久津さんは扉の間でこちらを振り返っていた。

「あ、あの……」

私は緊張しながら、それでもどうにかその一言だけを言葉にすることができた。

「お、おやすみなさい……」

突然のことに、阿久津さんは目を丸くしてその場に立ち尽くしていた。

しかし、やがてあの小さな微笑を浮かべて

「ああ。おやすみ、日下部」

そう言つて、静かに扉を閉じた。

それだけの出来事だったけど、私はとても嬉しかった。

こんな境遇だけど、不思議と安心して眠れる気がした。

まだ微かに鼓動の高まったままの胸を、私は自らの小さなてのひらを押し当てながら静かに横になった。

第四話：束の間の小さな幸福（後書き）

どうも、本作の書き手のやくもと申します。

さて、まずはこの場を借りてお詫びをしなくてははいけません。

それはというのも、前回の第三話の後書きではこの辺りから物語に変化が現れる予定ですと明記しておりました。

しかし実際に書き終えてみると、まだ書き足りない部分などありまして、話の展開はさほど大きい変化を遂げておりません。

よくあることといえばそこまですが、堂々と期待させるようなことを書き並べておいた割にはこんな風になってしまいました。

どうも申し訳ありません。

次回こそは、もう少しちゃんとした展開を用意できる……はずですよ。すいません、やはり実際に書いてみないとわからんかもしれません。こんな私ではありますが、少しずつ読んでいただけていることにはとても感謝しています。

読んでいただいた方は、きっと第一話から読んでくださっている（はずですよ）と勝手に思い込み、それを励みに今後もがんばっていいこうと思います。

今はまだ書き出しの部分なので、更新も思った以上に早いペースです。

ですが、今後は2〜3日を目安に更新していこうかなと考えています。

それと、目を通していただけた方は、もしよろしければ採点などの評価にも手を伸ばしていただければ幸いです。

感想は書くのが面倒だというのも十分理解できますので、できれば採点だけでもお願いしたいのです。

甘口でも辛口でも構いません。

どうかよろしくお願いします。

それでは今回はこのあたりで失礼します。

第五話の後書きでまたお会いしましょう。

第五話：あの頃と変わらない

1

簡単な夕食が終わり、時刻は夜の9時半にさしかかろうとしていた。

阿久津は静かに日下部の部屋の扉を開けた。

どうやら日下部はすでに眠ってしまったようで、耳を澄ますと彼女の小さな寝息が聞こえた。

阿久津はどこな安心するような笑みを見せ、そのまま静かに扉を閉じた。

そのまま自室に戻り、阿久津本人も少し仮眠をとっておこうかと思っ

た。が、あることが気になって阿久津は静寂の続く廊下を歩き出した。そしてそのまま、屋外へと出て行ってしまふ。

途端に冷たい風が阿久津の身を切り裂くように吹き付け、思わず彼はその場で肩を竦ませた。

季節は秋から冬へと移り変わろうとしているのだろう。

気のせいかな、昨日の夜よりも寒さが増しているようにも感じられる。夜の中にひしめく林を一度見回して、阿久津は手にした懐中電灯の明かりを頼りに山道を下り始めた。

彼が向かうのは、置き捨ててきた車だった。

この場所に辿りついた時はそれどころではなかったが、もしかしたら車のトランクの中には何か使えそうなものもあるかもしれない。砂利を蹴飛ばし、小枝を踏み折って阿久津は夜の道を進む。

ほどなくして、やや見覚えのある場所までやってきた。

懐中電灯に照らされた地面にも、まだ新しいタイヤのあとが見て取れる。

車は林の中に少し入ったところに置いてきたはずだ。

阿久津は明かりを林の中に向け、ゆつくりと足を踏み入れた。昼間でも薄暗い林の中は、夜ともなればそれだけで何もかもが見えなくなる。

文字通り、この電灯の明かりが命綱といってもいいだろう。

やがて明かりの中に、車体の影が映りこむ。

阿久津は足元に注意しながら、車へと歩み寄った。

当たり前だが、車はほぼそのままの原形を留めてその場所に佇んでいた。

トランクの鍵穴に鍵を差し込んで、阿久津は車体の後部を持ち上げる。

埃くさい匂いがわずかに鼻につき、阿久津は2、3度ほど小さく咳き込んだ。

長いこと使っていない部屋の中にいきなり入ったときのような匂いがした。

阿久津は電灯を片手に、がさがさ和中に目を向ける。

そう都合よく何かが見つかるとは思っていなかったが、まさにその通りの結果だった。

あったのはドライバーなどの工具のほかに、ガソリンを拭き取ったときに使ったであろう薄汚れたタオル。

そのほかワックスやモップなど、車体を掃除するために使うようなものがほとんどだった。

「当たり前か……」

阿久津は溜め息と共に呟く。

それもそのはずだ、そんなに都合のいいものばかりが車のトランクに入っているわけがない。

とりあえず、あまり役に立ちそうなものはなかったということだろう。

仕方なく戻ろうと、トランクを閉めようとして

「……ん？」

阿久津はふと思い立った。

そしておもむろに工具箱を手にして、まじまじとそれを見る。

「……一応持っていくか」

そしてそれを片手に持ち、ボタンとトランクを閉めた。

収穫らしい収穫はなかったと言えるが、もともと期待はしていなかったものでこんなものだろう。

せめて予備のガソリンでもあれば再び車で移動もできるのだが、阿久津自身ガソリンをトランクに積み込んだ記憶はない。

どうやらしばらくは、日下部の怪我を治すことに専念することになりそうだ。

かく言う阿久津も、昨夜の転倒で体のあちこちを痛めていた。

日下部のように捻挫などに至る部分はなかったが、こうして普通に歩いてるだけでも実は結構痛みに襲われている。

それを日下部に悟られなかったのは、単に阿久津が感情を読み取りづらいのとやせ我慢しているからだ。

そんな素振りを見せれば、日下部はまた自責に走るだろう。

阿久津はただ、そんな彼女の顔を見ているのが辛かったのだ。

もちろんそんな本音も、日下部の前では言わないのだが。

一体いつから、こんなに自分は丸くなったのだろうと阿久津は思う。

少なくとも、連中と同じ研究所に所属し、何も知らずに実験の日々に追われていたあの頃は、ずっと一人きりだったはずだ。

あの場所では成果を上げることだけが全てだった。

実験の成功失敗はもちろん、データの収集、観察に考察、独自の研究、それだけに追われていた。

自分一人の力で、世界が変えられると信じていた時期もあった。今にして思えば、それは大きな思い上がりだったのだが。

それでも当時はそれが自分の全てだった。

他人と馴れ合うこともなかった。

そこに至る前にも、他人を寄せ付けるといふことはほとんどなかっただろう。

それが劇的に変化を遂げたのは、やはりあの研究記録を見たあのときからだろうか。

あまりのおぞましさに、阿久津は胃の中のもの全てを吐き出したことをよく覚えている。

そして同時に、一瞬だが殺意にも似た感情がこみ上げたことも覚えている。

そのときはそれだけで終わったが、一歩間違っていれば阿久津はあのとき自らの命を絶っていたかもしれない。

それを思いとどまらせたともいうべきが、研究記録の中に記された日下部の存在だった。

それを読んだ阿久津は、恐らく生まれて初めてのことだっただろう。彼女を助きたい。

自由にしてやりたい。

せめて、ありふれた日常の中で人並みの幸せを与えてやりたい。そう思ったのだ。

そしてそんな阿久津の想いは、決して正義という言葉でしめくくることができなかったが、こうして形にすることができた。

だけど、少なくとも今の彼女はまだ幸せではない。

だから阿久津は、これから彼女を送り届けなくてはいけないのだ。せめて、彼女がいつも笑っていられるような場所へ、彼女を連れて行く。

それだけが阿久津の願いだった。

今日も日下部は何度も涙を流した。

自分を責めた。

だけど、それは間違いだ。

少なくとも今の阿久津は、日下部という少女の存在に助けられている。

そうでなかったら、彼はとうの昔にその命を絶っていただろう。

今の日下部の存在こそが、阿久津の存在を支えていた。

きっと日下部は、そんなことには気付いていないだろう。

そしてこれからも、気付くことはないだろう。

だが、それでいいと阿久津は思う。

いつか……いつになるか分からないが、できるならそう遠くない未来。

自分の口から、日下部に伝えなくてはいけない言葉がある。

それが明日なのか、明後日なのか、10年後の未来なのかは分からないけれど。

彼女の目を見て、伝えられればいいなと阿久津は思う。

「ふう……」

ようやく坂道を登りきり、阿久津は研究所の前まで戻ってきた。

体はすっかり冷え込んでしまっている。

そういえば、ここには給湯室があった。

ということは恐らく、仮眠室などもあるかもしれない。

風呂かシャワーの備え付けでもあればいいのだが、そういえばまだ確かめていなかった。

自分にしても日下部にしても、いつまでも入浴をしないわけにもいかない。

どうやら夜が開けたら、まずはそれを確認する必要があるそうだ。

阿久津は廊下を歩き、自室へと向かう。

と、その途中で人影を見つけた。

当然その人影に該当する人間は、この場所に一人しかいないので、阿久津は静かにその名前を呼んだ。

「……日下部？」

声をかけられたことによほど驚いたのか、日下部は暗闇の中でも分かるくらいに大きく肩を竦ませた。

「あ、阿久津さん！？」

その声はうわずっていた。

まるでバケモノでも見たかのような反応だった。

「お前、その足で何をしてるんだ」

阿久津は慌てて駆け寄り、日下部に肩を貸す。

「あ、阿久津さん、寝てたんじゃなかったんですか？」

「いや、ちよつと外の空気を吸っていた。それよりも、一体どうしたんだ？」

聞くが、日下部はあちこちに視線を移したりしてなかなか口を開かない。

気のせいかな、なぜだか顔が赤くなっているようにも見える。

「その………に」

「ん？ なんだ？」

小声すぎて聞き取れない。

阿久津は耳を寄せる。

当然、日下部の顔が紅潮していることなど気付きもしない。

「お、……………いに」

「……………すまん、よく聞き取れない」

「だ、だからですね……………お……………」

「お？」

「……………お手洗い、です……………」

そして阿久津はしばし凍りついた。
やがて頭を押さえながら立ち上がり

「……………すまなかった」

と、本当に心底すまなそうに呟いた。
だが結局、そのあと阿久津は日下部に肩を貸しながら部屋まで送り届けた。

その後阿久津は自室に戻り、持ってきた工具箱はとりあえず机の上に置いたままにしてベッドに横になった。

それからしばらくして、阿久津もようやく浅い眠りの中へと入っていった。

だが、すぐ隣の部屋で日下部がなかなか寝付けないでいたことを、阿久津は全く知らなかった。

2

それは、夢か現か幻か。

阿久津はまるで重力のない宇宙の海に漂うかのようにそこにいた。
体はまるで自由に動かない。

意識ははつきりとしているにもかかわらず、目を開くことすら適いはしなかった。

（なんだ……………ここは、どこだ……………？）

その言葉に答える者はいない。

どこまでも続く闇の中に、阿久津の体はだんだんと沈んでいく。痛みも苦しみもない。

水の中の落とした氷が、やがては溶けて混ざり合うかのように、阿久津の体は徐々にその闇に食われていった。

（やめろ……どこへ連れて行く）

ゆらゆらと、水面で揺れる木の葉のように。

深く遠くへ沈んでいく。

（俺にはまだ、やらなくちゃいけないことが……）

その叫びすらも、言葉にならない。

嘲笑うように、闇はただ無言で阿久津の体を引きずり込む。

『お前の行動は無意味だ』

闇が言った。

『他でもないお前が、それを誰よりも理解しているだろう』

闇は繰り返す。

恐ろしく低く暗い声。

何の感情もこもっていない、無機質な機械仕掛けの録音でもこんな声は出せない。

それは、ありとあらゆることを否定することが許された声。

まるでこの世界の神にでもなったかのような、しかし微塵の神々しさも傲慢ささえも感じさせない声。

言うなれば、闇ではなく無。

（何を言っている……お前は、何だ？）

そうしている間にも、徐々に阿久津は闇に沈み食われていく。

爪先から膝までが、まるで消しゴムでなぞるかのように消え失せた。

『お前には誰も救えはしない』

闇は吐き捨てるように言った。

救うという一言に、阿久津の神経は研ぎ澄まされたように反応する。そこに浮かんだ映像は、たった一人の少女の姿だった。

（日下部……）

いつの間にか、そこに日下部が背を向けて立っていた。

彼女は振り返らない。

阿久津がたゆたう目の前に、その小さな背中がある。

手を伸ばそうとしても、体は動かない。

足掻くことももがくこともできない。

（何をしている？ どうしてここにお前がいるんだ、日下部……？）

どれだけ言葉を探しても、彼女は背を向けたまま決して振り返らない。

それはこれが、夢か幻だからだろうか。

目の前にいるはずの少女は、今にも消えてしまいそうなくらいに希薄に見えた。

『お前は、この少女を救えるのか？』

頭の中に直接言葉をねじ込まれたような感覚。

耳鳴りにも似た低い残響。

感覚そのものはなくなっているというのに、それだけで阿久津は吐き気がしそうだった。

（何が言いたい？ お前は何なんだ？）

『無理だな』

闇は阿久津の言葉など無視し、そう言い切った。

『お前に救えるわけがない。この少女にはもはや滅びしか残されていない。そうだろう？』

そして阿久津は、なぜかその言葉に反論をできずにいた。

わけのわからない夢の中の出来事だと分かっているながら、その手は、指先は確かに震えていた。

（……違う。そうじゃない、俺は……）

『何が違う？』

阿久津の心臓が跳ね上がる。

心の奥底を見透かされている。

それも、恐ろしいほどに冷たい目で。

得体の知れない一言一言が、閉じ込めた記憶の氷を刻み付ける。

『お前は、神にでもなったつもりだったのか？』

（……違う）

『その手で領域を踏み越えて、満足したか？』

（違う……）

『望みもしない生を与えた気分はどうだった？ さぞかし愉悦だったことだろうな』

（違う　っ！）

波紋のように広がる声。

そんな声にも、背を向けた少女は振り返ることはない。

『どれだけ叫んでも、終わりはすでに始まっている。お前が始めたんだ。彼女の終わりを』

（俺は……俺は……）

揺らぐ世界。

阿久津と少女の間に、見えない雫が落ちる。

雫は波紋となり、広がっていく。

二人を遠く離れ離れにして、どこまでもどこまでも広がっていく。

（待て、待ってくれ日下部！）

阿久津は少女の名を呼ぶ。

それでも少女は振り返らない。

ただ、流れるがままに消えていく。

そして、闇が全てを飲み込んだ。

「待ってくれ！」

そんな叫び声とともに、阿久津はベッドの上から体を起こしていた。

呼吸が荒く、全身から嫌な汗が滲み出ているようだった。

上下する肩のまま、阿久津はゆっくりと視線を移す。

そこはどう見ても、無機質なただの白い部屋だった。

「……夢、だったのか……？」

阿久津は重くのしかかる頭を片手で支える。

体温がずいぶんと上昇している。

背中にはじっとりと寝汗をかいていて、それが余計に気分を悪くさせているようだ。

阿久津は腕時計の文字盤に目を落とす。

深夜2時。

眠る直前の時刻から、まだ3時間ほどしか経っていなかった。

それにしても、なんという夢見の悪さだろうか。

あんなに自分という存在がじわじわと追い詰められていく夢は、生まれて初めてのことだった。

思い出そうとするだけで頭が痛くなる。

精神的にも肉体的にも、今の夢は後味が悪すぎる。

しかし、阿久津の心が引きずっていることはそれだけではなかった。

それは、今の夢がある意味で一つの真実を物語っていたからだった。突きつけられた真実。

否定も肯定もできない自分。

改めて思い知らされる、自分というあまりにちっぽけな存在。

そしてそのちっぽけな存在の自分でさえ、神の領域に足を踏み入れていたこと。

そうだった。

何を今まで、都合のいい偽善を振りかざしてきたのだろう。

結局自分も、自分が心底毛嫌いしている連中と何一つ変わらないというのに。

「……くそ……っ」

阿久津は呻くように呟く。

結局自分は言い返すことができなかったのだ。

あの、得体の知れない声の主に。

それは、あの声が全ての真実を言い当てていたからだった。

まるで見てきたかのように、あの声は全てを知っていた。

そして阿久津は、なんとなく気付いていた。

あの声の主が、一体誰であるのかということに。

だが、それをあっさりと認めたくない。

認めてしまうことが、何よりも恐ろしい。

自分は一体何なのか。

何のためにここにいるのか。

その答えを一番求めているのは、他ならぬ阿久津自身なのだから。

「……………」

もはや眠気などというものはすっかりなくなっていた。

ようやく呼吸も落ち着いて、頭の中も鮮明になってくる。

こんな状態では、もう一度眠ることなどしばらくできそうにもない。

阿久津はベッドから立ち上がると、白衣を羽織って静かに部屋を後にした。

廊下から静かに聞き耳を立てると、日下部の部屋からは彼女の優しい寝息が微かに聞こえた。

起き上がったときは大声で叫んでいたので、てっきり起こしてしまったかと思ったが。

阿久津はそのまま廊下を進み、三日月の浮かぶ空の下にやってきた。

今夜は風がないが、気温はかなり低いようだ。

乾いてない寝汗に濡れた背中が、凍えるように阿久津の体温を奪っていく。

「……なんなんだろうな、俺は」

阿久津は三日月に向けて呟く。

一体どこからが間違いの始まりだったのだろう。

あの月がまだ満月だった頃、阿久津はまだ正しい道の上に立っていただろうか。

それとも、すでに間違った道の上を歩き出していたのだろうか。

どれだけ記憶を遡っても、正しい答えは見つからない。

それはきつと、いつの間にか自分でも答えを見失ってしまっているからなのかもしれない。

そんな結論こそが、まさしく最大の傲慢であると知りながらも。

頭上の月は全てを見下ろす。

そして、全てを嘲笑っている。

歪曲した口元のように、世界を罵っている。

『お前には誰も救えはしない』

それは、誰の言葉だったか。

考えるまでもない。

阿久津の中の、過去の阿久津の言葉だったのだ。

「それでも、俺は……」

阿久津は足元を見る。

月に照らされて伸びる影。

それこそが、今の自分を嘲笑う過去の自分。

「諦めるわけにはいかないんだ……」

詠うように眩き、静かに目を閉じる。

澄んだ空気が流れ、つま先から髪の毛の先端を包み込んで……。次の瞬間、崩壊は始まった。

「いいえ。貴方には誰も救えやしませんよ」

阿久津がその声の方向に顔を向けるよりも早く、その声の主の右手に握られた銀色の拳銃が一発の咆哮を上げた。そして続けざまに、阿久津の左肩を焼けるような熱い痛みが襲う。

「ぐ、あつ……」

阿久津は打ち抜かれた左肩を右手で抑える。

白い白衣が見る見るうちに真っ赤な鮮血で染まっていく。

傷口を庇う右手も赤く染まり、指と指の間を縫うように血が流れていく。

痛みには堪えながら、阿久津は月下に照らし出されたその男を見返す。

夜の闇にも相容れない漆黒の髪。

長身で細身、体格は阿久津とほぼ同じ。

彼の右手には、うつすらと硝煙を立ち昇らせる銀色の拳銃。

その銃口は、今も阿久津に向けられている。

「探しましたよ。阿久津さん」

男は言う。

何の感情も含まれてない言葉で。

阿久津は方膝をつきながら痛みを耐え、奥歯を軋ませながら男の名を呼んだ。

「赤嶺、礼二……」

赤嶺は答えず、ただその色のない目で阿久津を見ていた。

3

銀色の銃口に月明かりが反射する。

そのひどく鈍い輝きは、それだけで全身を震わせる威圧感を持っていた。

二人は月明かりの下で対峙していた。

いや、それはもはや対峙とは呼べないだろう。

赤嶺は目の前でひざまずく阿久津に銃口を突きつけ、阿久津はただそれを見上げることしかできない。

どう見ても状況は最悪、形勢逆転などという言葉は片腹痛いと笑い飛ばされてしまう。

どれだけの沈黙が続いたのだろうか。

阿久津は左肩の痛みにも小声で呻きながらも、赤嶺から決して視線を外すことはなかった。

やがて、赤嶺は微動だにせずに口だけを開いた。

「信じられない、という顔をしていますね」

「……」

阿久津は答えない。

しかし気にも留めず、赤嶺は続ける。

「それは私だって同じですよ。まさか貴方が脱走なんて真似をしでかすだなんて、事実を聞いたときは驚きました。しかし、やはりというかなんというか……勘が当たったのか、貴方は思ったとおりここにいた。そして、貴方がいるということは、彼女もいるんですよね？」

「あの実験体のクローンが……」

「やめろ！」

阿久津は叫んだ。

傷の痛みなど忘れ去るくらいに、その声は周囲に響き渡った。

「実験体だのクローンだの、そんなことは関係ない。あいつは……日下部は人間だ。俺達と何も変わらない、人間だ」

「……日下部？ ああ、もとなった人間の名前ですか。同じ名を与えたんですか？ だとしたら、ずいぶんと残酷なことですね」

「お前……！」

食いかかる阿久津を、赤嶺は銃口で迎え撃つ。

両者の距離は5メートル弱。

手負いの阿久津がどんなに早く踏み込んでも、赤嶺の拳銃はそれまでの間に的確に阿久津の心臓か頭を撃ち抜けるだろう。

阿久津は歯嚙みする。

そして同時に、自分の考えの甘さを呪った。

研究所の騒ぎがある程度落ち着くまでは、追跡はないものと考えていた。

しかしそこに、阿久津同様に個人の意思で動く人間がいるのではないかということを全く予想していなかった。

結果、自分は手負いにされて日下部の身にも確実に危険が迫っている。

一体自分は何をしている。

阿久津は何度も自分自身に叱責した。

そしてそのたびに、内なる声が囁く。

『お前には誰も救えはしない』

何も言い返すことはできなかった。

愚かしいほどの無力感が、体中から溢れ出るようだった。

「さて」

赤嶺の言葉に、阿久津は身を強張らせる。

「私があるのは貴方じゃない。単刀直入に用件を済ませていただきます」

赤嶺は建物に目を向ける。

そしてその中には、何も知らずに眠っている日下部の姿がある。止める。

心が叫ぶ。

この男を行かせてはならない。

行かせてしまえば、もう何も守れなくなる。

まだ答えを見つけていないのに。

何もしてあげられていないのに。

赤嶺は一步、建物に歩み寄る。

止める。

だがどうやって？

相手は拳銃を持っている。

加えて、自分は手負い。

正面から渡り合うどころか、立ち上がることさえかなわないかもしれないというのに。

傷が痛む。

体に力が入らない。

心のどこかで、諦めろと弱い自分が囁く。

そんなことできるはずがない。

だったら立て。

動け体。

死んでもこの男を止めるんだ。

『できやしないさ』

自分が言う。

『いい加減に認める。お前には誰一人として救うことなどできない』

違う、違う、違う！

救わなくてはならない。

生きてもらわなくてはならないのだ。

まだ彼女は、その目で見える景色がある。

その耳で聞く音がある。

その口で紡ぐ言葉がある。

終わらせるわけにはいかない。

『できるのか？ ならばやってみる。その懐のものはただの飾り物か？』

阿久津は脳に直接衝撃を加えられたような感覚になった。

血に染まった白衣のうちポケット。

そこから覗く、赤嶺と同じ銀色の拳銃。

それを、血染めの右手で触れる。

恐ろしく冷たい感触。

指先から伝わり、全身の血液が凍りつくような冷たさ。

震える手。

鼓動が高鳴る。

ドクン。

握る。

あとはただ、狙いを定めて引き鉄を引くだけ。
傷の痛みなど消え失せていた。
構える。

赤嶺は気付いていない。

千載一遇のチャンス。

引け。

その引き鉄を。

『殺せ』

決めたはずだ。

絶対に守って見せると、決めたはずだ。

ためらう理由はないはずだ。

ならば撃て。

震えが止まらない。

それは間違いだと、声がする。

『殺せ。殺さなければ、お前はまた奪われる』

意識が混濁し、気が狂いそうになる。

どちらが正しくて、どちらが間違っているのか。
分らない。

赤嶺を殺した手で、日下部を救えるのか？

彼女は本当に、それを望んでいるのか？

彼女が望んだものは、何だった？

阿久津は狙いを定める。

手の震えはなくなり、銀色の銃口は一点を見据えた。

人差し指を引き鉄にかける。

その瞬間、まるで何かを感じ取ったかのように赤嶺の体が翻った。
赤嶺の銃口が阿久津の頭を捉えるよりも早く、彼は阿久津が握って

いるそれに驚愕した。

その一瞬の隙間を、阿久津は見逃さない。

右手の人差し指を引き、一発の銃声と共に真っ赤な鮮血が舞い散った。

弾丸は赤嶺の右掌を貫通し、彼は拳銃を手放した。

「がつ……」

赤嶺が苦痛に表情を歪めながら崩れ落ちる。

弾かれるように赤嶺の手を離れた拳銃は、地面を転がった。

利き腕と拳銃を失った赤嶺に、もはや勝機はない。

阿久津はよろめきながらも立ち上がり、赤嶺の近くに歩み寄る。硝煙の匂いが鼻先をかすめ、気分はひどく憔悴していた。

それでも阿久津は緊張を解かない。

両膝を突いた赤嶺に銃口を突きつける。

ほんの数分前と立場は逆転していた。

赤嶺にとっての誤算は、阿久津が拳銃を携帯していたということだろう。

そして赤嶺は同時に、阿久津は人を撃つことができないと確信していた。

にもかかわらず、阿久津は銃口を向けて発砲した。

赤嶺にとつて信じられないことだった。

しかしそれは紛れもない事実で、それを物語っているのが焼けるような傷の痛みだった。

「……まさか、貴方が撃つだなんて思いもしませんでした」

「……」

答える言葉を阿久津は持ち合わせていなかった。そして同時に、阿久津は疑問に思っていた。

確かに自分は、発砲した。

だが、それは確かに赤嶺の心臓を狙っていたはずだった。

あの瞬間、手の震えも全て止まっていた。

間違いなく殺したはずだったのだ。

だが実際は、阿久津の弾丸は赤嶺の掌を貫いていた。

自分でもわけが分らない。

無意識のうちに照準をずらしたのだろうか。

あんな一瞬でそんな芸当ができるとは思えないが、結果として事実を受け止めるしかないだろう。

「……日下部をあの場合に戻すことはできない。だから俺は、逃げたんだ」

阿久津は銃口を赤嶺から外す。

少なくとも、もう引き金を引く気力は残っていそうにない。

「なぜですか？ 貴方も一人の科学者なら分かっているはずですよ。犠牲なくして進歩はないと。それは今に限ったことではなく、今まで世界中のどこでもそうして歩んできた道なんですよ？ 彼女がいれば、それだけで犠牲が必要なくなるんです。存在しない存在、これほど優れた犠牲が他にあるはずがないでしょう？」

「……赤嶺、お前の言っていることは、確かに科学者という観点から見据えれば一つの理論なのかもしれない」

阿久津の言葉に、赤嶺は顔を上げる。

「だが、俺はそんなのはごめんだ。たとえどんな理由があつて、その結果がクローンだったとしても、俺はそれを犠牲として認めることはできない。それらの結果を生み出したのも、また俺達だからだ。自分達でいいように創って、いいように滅ぼす。こんな身勝手

で傲慢な神は必要ない。そんな道の上を歩くくらいなら、俺は自ら死を選ぶ」

「貴方は……」

「矛盾だらけだとは思う。事実、俺達は神にでもなったつもりだったんだろ。生命を創り、繁殖させ、犠牲という名の下に実験を繰り返す。確かに俺も通った道だ。……だけど、それでも退くわけにはいかない。俺はもう決めたんだ。最後のときをあいっと……日下部と共に生きると、そう決めたんだ」

「……そこに残された時間が、絶望的なまでに少ないと知っても、ですか？」

「ああ」

小さな風が吹いた。

それを合図にするように、二人に会話は中断した。

阿久津は拳銃を内ポケットにしまう。

思い出したように湧き上がる肩の痛みに目をしかめながら、壁に背中を預けた。

「……貴方は科学者としては不向きですよ」

「……そうかもな。今では自分でもそう思う」

「犠牲なくして発展はありえない。これが私達の住む世界の法則です」

「犠牲でしか得られない発展なら、俺はいらない」

「屁理屈ですね」

「だが理屈だ」

阿久津は小さく笑った。

赤嶺は小さく溜め息をついた。

「貴方と話していると疲れます。私はもう行かせてもらいますが、

どうします?」

「どうする、とは?」

「私は研究所に戻ります。貴方達の所在についても報告するかもしれない。ここで私を殺しておかないと、いずれ後悔することになるかもしれませんよ?」

「そのときは、逃げ延びて見せるさ」

阿久津は一言だけ返すと、建物の中に向けて歩き出した。

赤嶺は立ち上がり、転がっていた拳銃を拾い上げ、左手で構える。銃口の向く先は、あまりにも無防備な阿久津の背中があつた。

「阿久津さん、一ついいですか?」

銃口を向けたまま、赤嶺は尋ねた。

阿久津は振り返り、銃口と向き合う。

「どうしてわざと狙いを外したんですか?」

赤嶺の右手からは今でも血が滴り落ちる。

だがそれは本来、自分の心臓を貫くはずの弾丸だった。

「……外したんじゃない。外れただけだ」

「……」

赤嶺はそれ以上何も言えなかった。

「俺も一つ聞きたい」

「……なんででしょう?」

「どうして狙いを外したんだ?」

阿久津は言つて、左肩を抑えた。

赤嶺は銃口を下ろし、背中を向けて告げた。

「外したんじゃない。外れただけですよ」

そして、そのまま夜の山道の中へと静かに消えていった。

阿久津はその後姿が見えなくなるまで、ずっと目で追いかけていた。赤嶺は研究所の同期の人間だった。

そして、阿久津にとって唯一友と呼べる人間だった。

その人間を殺すことなど、できるわけがなかった。

それは、赤嶺も同じだったのだろうか。

それを確かめることは、おそらくもうないだろう。

だが、阿久津は忘れることはない。

阿久津が赤嶺の心臓を貫く弾丸を撃ち出そうとしたとき、彼は、確かに……。

「ありがとう、礼二……」

阿久津はもう見えない友の背中に向けて呟いた。

あの一瞬、彼が見せたかすかな笑みを、阿久津は生涯忘れることはないだろう。

もし、もっと違う形で出会っていたら……。

阿久津はそこで考えるのをやめ、建物の中へと戻っていった。

第五話：あの頃と変わらない（後書き）

更新がやや遅くなりました。

書き手のやくもです、こんにちは。

ここ数日諸事情で出かけていたもので、更新が遅れてしまいました。続けて読んでいただけた方々、少しでも期待してくださってた方々、もしいらっしゃったら申し訳ありません。

さて、第五話まで終了したところで、ようやく物語りは中盤から折り返し、そして終幕へと向かっていこうとしています。

予定では第十話前後が最終話になるものと考えておりますので、もうしばらくお付き合いいただければと思います。

手短になります、ではこの辺で失礼します。

また次回お会いしましょう。

第六話：見え始めた終わり

1

銃弾は肩を貫通していた。

出血こそ今は止まっているものの、痛みはずきずきと頭の芯にまで響いてくる。

阿久津は部屋には戻らず、ロビーの椅子に腰掛けていた。

隣においてある救急箱は、近くの空き部屋から持ってきたものだ。阿久津は痛みに顔を歪めながら、白衣を脱ぎ、ワイシャツを裁縫用のはさみで肩口まで切り取った。

露になった傷口は、自分で見ていても思わず目を背けたくなくなるような光景だった。

肩口から二の腕にかけて伝った血は乾き、べったりと皮膚に張り付いている。

身体は身震いするくらいに寒いのに、傷口だけが未だに熱を持っている。

焼けるような熱さ、そして痛みが何度もこみ上げてくる。

阿久津はガーゼを適当な大きさに切り取り、消毒液を染み込ませる。

それをまずは身体の正面の方の傷口にあてがう。

「……っ！」

阿久津は痛みに顔をしかめる。

止まっただけの血が再び噴き出してしまっているのではないかと思った。あてがったガーゼが落ちないように、阿久津は患部を紙テープで固定した。

すでにガーゼはうっすらと桃色に染まり、徐々にその染みを広げて

いる。

そしてここからが問題だった。

銃弾が貫通しているということは、早い話が体に穴が開いているということだ。

要するに、入り口があれば出口もある。

背中側の箇所にも、銃弾が貫いた傷口が残っているのだ。

だが、左腕が全くとっていいほど使い物にならない今の阿久津にとって、背中の中は視界にも入らない。

とても自分の右腕一本だけでは傷口の場所が見えないのだ。

しかし、だからといって傷口をそのまま晒すわけにもいかない。

放っておけば化膿するだろうし、細菌感染を引き起こせばもはや自力での治療は不可能だ。

できることなら病院でちゃんとした治療を受けたいところだが、今の状況ではそれもかなわないだろう。

医者に見せれば傷は治るかもしれないが、同時のこの傷が銃創だということも一瞬で見抜かれる。

病院側がそれを警察沙汰にせずに保留するとは思えない。

そこから事件性が発覚すれば、阿久津はもちろん日下部の身柄も拘束されざるをえないだろう。

そうなれば、もうあとは時間の問題だ。

そういう事態への展開は防がなくてはならない。

阿久津自身のためにも、何よりも日下部のためにも。

『……………そこに残された時間が、絶望的なまでに少ないと知っても、ですか？』

赤嶺の言葉が重くのしかかる。

そうだ。

もう、残された時間はわずかしかない。

だからせめて、そのときを迎えるまでに……。

「分かっているさ、そんなことは……」

阿久津は自分の手を開いた。

そこは、自身の体から流れ出た血潮で溢れていた。

今まで誰の手を握ることもなく生きてきて。

知らぬ間に、数多の生命を食い散らかした。

そして、かつての友を撃ち、撃たれた手。

そんな汚れきった体にも、こうして血が流れている。

阿久津は今、確かに生きている。

目の前の現実から逃げ出して、身勝手な驕りで生命を弄び、それでも救いたい人がいる。

そのためには、何だってやってみせる。

死は怖くない。

本当に怖いのは、まだ伝えられないたった一つの真実。

それだけが、阿久津の心を徐々にしめつけていく。

「……」

時間だけが過ぎていく。

阿久津の時間と、彼女の時間。

だがそれは、決して平等ではない。

いつか、お互いに終わりを迎えるときがくる。

そのとき、阿久津のその手は何を掴んでいるのだろうか。

血塗れたその手のひらに、何を求めているのだろうか。

阿久津はゆっくりと手を握る。

まだ、答えは見つかからない。

阿久津は再びガーゼを手取る。

首だけで背中を見えるが、どうがんばっても反対側の傷口が見えてこない。

なんとか左腕も動かそうとするが、そのたびに肩口に激痛が走った。そしてまた痛みで顔をしかめていると

「……阿久津さん？」

ふいに、通路の奥からそんな声がした。

阿久津が肩越しに振り返ると、そこには壁に手を添えながら立っている日下部の姿があった。

「……日下部、何をしている？」

しまったという叫びを押し殺して、阿久津はつとめて冷静に言う。答える前に、日下部はよろよろとおぼつかない足取りで進んでくる。それがあまりに危なっかしくて、阿久津は思わず立ち上がって日下部のところへ歩み寄った。

「無理をするな。その足じゃ満足に歩けないだろう」

「すいません。でも……」

日下部は口ごもる。

そして何かを言い出そうとしたが、それよりも早く阿久津の体の異変に気付いた。

「阿久津さん、それ……血が」

「……なんでもない。もう血も止まった」

「なんでもないわけじゃないじゃないですか！」

日下部は叫んだ。

そのことに阿久津は驚き、一歩後退する。

「ちょっと、見せてください」

「……平気だ。このくらいはなんでもない……」

言い終える前に、日下部は阿久津の二の腕に触れた。

「……っ！」

阿久津は声を殺したが、その様子で日下部にはばれられた。

「全然大丈夫じゃないです！ 早く手当てしないと……」

阿久津は観念した。

さすがにもうケガを隠すなんてことは無理のようだ。

どの道自分ひとりでは満足に包帯も巻けないので、阿久津はしぶしぶ口を開いた。

「……そこに救急箱がある」

阿久津は指を指す。

今にも駆け出しそうな日下部を制して、阿久津は肩を貸した。

これではどっちが患者なのか分かったもんじゃない。

日下部は阿久津に言われたとおりにガーゼに消毒液を染み込ませ、それを反対の傷口にテープで固定した。

それから脇の下を通す形で包帯を巻きつけ、二ヶ所の傷口を固定した。

応急処置に過ぎないかもしれないが、これでいくらかはマシになったろう。

「すまない。助かった……」

阿久津は小声で呟く。

「いえ……。でも、どこでそんなケガを……」

阿久津は言葉に詰まった。

バカ正直に銃撃戦をしたなどと言えるわけがない。
しばし間をおいて、阿久津は答えた。

「古傷なんだ。昔にちょっとした事故に遭ってな。さつき外を歩
いてるときに、足を滑らせて強く打った。そのときに傷口が開いて
しまったみたいだ」

どう聞いてもそれは言い訳に過ぎなかった。

古傷がそんなに簡単に開くわけがないし、よく見れば傷が真新しい
ものと分かる。

しかし、それでも日下部は

「そうですか……」

そう一言言うだけで、あとは何も聞かなかった。

「それより、日下部こそどうした？ 何かあったのか？」

「私は……」

手洗いということも考えられたが、そんな様子ではない。

考えられるのは、阿久津に何か用事があったということくらいだが。

「……夢を、見ました」

「夢？」

日下部は小さく頷いた。

顔色は変わってないが、ひどく沈んだ様子に見える。

「……阿久津さんが、いなくなっちゃう夢でした」

「……」

「阿久津さんはすぐ近くにいるのに、背中しか見えなくて……声をかけても振り返らないんです。その背中も、なんていうか……幻みたいに儚げで、虚ろで……本当はそこにいないんじゃないかなって思えるくらいで……」

「日下部……」

「それで、ちょっと目を離したらいなくなっちゃうんです。周りは真っ暗で、何にも見えなくて……。やっぱり、何度叫んでも誰も答えてくれなくて。目が覚めたら、急に怖くなっちゃって。でも、阿久津さんの名前を呼ぶのも怖かったんです。もし返事が返ってこなかったら……いなくなっちゃったらって思うと、怖くて……」

日下部の声は涙声になっていた。

阿久津はその言葉に胸を痛める。

そのとき、阿久津は部屋にはいなかった。

ちょうど今いるこの場所で、傷の手当てをしていた。

いるはずの人がいない。

それだけのことで、今の日下部は壊れそうなくらいに脆い。

いつの間にか彼女の中で、阿久津という存在はかけがえのないものになっていた。

悪夢から覚めた日下部は、何を思ったのだろう。

壁一枚隔てたその場所に、阿久津がいないと分かったら。

彼女の心は、粉々に砕け散るかもしれない。

「……すまない」

「……違うんです。阿久津さんが悪いんじゃないで、私が弱いから」

ら……」

俯いて、日下部は無理して笑った。

「……そんな顔をするな」

阿久津はそつと日下部の頭を撫でた。

「お前は、自分が思っているほど弱い人間なんかじゃない。弱い人間は、自分の弱さを認めることなんてできないんだ」

それだけ言っ、阿久津は立ち上がる。

「部屋に帰ろう。ここは冷える」

言っ、阿久津は日下部に手を差し伸べた。

日下部は黙っ、その手を握り、目元を拭っ、立ち上がった。

二人の足音が、廊下の奥の闇に吸い込まれていった。

2

夜明けが近づいてくる頃になっ、阿久津は眠ることはできなかった。

傷の痛みもそうだが、あれこれと頭に色々なことが浮かんできていた。

その大半はやはり日下部のことで、思えば思っほど、悩めば悩むほど、阿久津は自己嫌悪に侵されてしまっ。

時間が巻き戻ればと、何度思っ、ことだろうか。

それが現実から目を背けていることだと知りながらも、願わずにはいらなかった。

阿久津は微かに身震いした。

部屋に戻ってからずっと、暖房の一つもつけていなかった。羽織っていた白衣は血に染まってしまい、ワイシャツも左肩から先の部分がなくなっている。

そんな格好でよく今まで寒さを感じなかったものだ。

今更になって思い出したように、阿久津はタオルケットを背中から羽織った。

その程度で寒さは紛れたりしないが、妙に気分は落ち着いている。それも寒さのせいなのだろうか。

「こうしている間にも、時間はなくなっていくんだよな、礼二…」

阿久津は赤嶺の言葉を思い出す。

もつとも、それは赤嶺に言われるよりもずっと前に阿久津も気付いたことだったのだが。

それでも阿久津は、まだそのことを言い出せないでいた。

いや、言えなかった。

その言葉はあまりにも単純で、そしてこの上なく残酷だった。

それは、ただ一言。

『お前はもう、長くは生きられない』

ただそれだけのこと。

それゆえに、言い出せない言葉だった。

阿久津はずっと知っていた。

日下部の終わりのときが、そう遠い未来のことではないことを。

今日という日が終わる頃に、彼女の命も終わりを迎えてしまうかもしれないということ。

言うなれば、日下部の体にはタイマーの止まった時限爆弾が組み

込まれているようなものだった。

今はタイマーが止まっているが、いつ作動するか分からない。作動してしまうと、爆発まではもうわずかな時間しか残されていない。

そして追い討ちをかけるように絶望的だったのは、その爆弾はどんな手段を用いても解除できないということだった。

世界中のありとあらゆる最先端の技術を用いても、取り外しは不可能。

延命の措置すらもままならないのだ。

これほど厄介な爆弾が他にあるだろうか。

唯一爆弾を止めることができるとしたら、それは不発の奇跡を信じることしかない。

だが、それでも日下部は救われない。

不発でさえも、それは彼女の死を意味するからだ。

もとより、その爆弾は爆発などはしないのだから。

タイマーが作動したら、あとはカウントがゼロになるまで待つしかない。

そしてゼロの時間の訪れは、彼女の死を意味するのだ。

では一体、なぜそんな爆弾を抱えているのか。

これに至ってはもっと残酷だ。

爆弾は誰の意思によってつけられたものでもない。

あえて誰かいるとするならば、まさしくそれは神しくないだろう。その爆弾は、言わば当然の結果だった。

なぜなら、日下部はクローンだからだ。

クローン技術は確立こそされ始めているものの、完成した技術ではない。

薬品でも同じことが言えるように、必ず新薬が開発された後も安全性を確かめる時間が設けられる。

様々な段階を経て、安全だと判断されて始めて市場に出回るようになるのだ。

つまりそこに、どうしても避けては通れない副作用や反作用、反発などが生じる。

日下部の抱えた爆弾は、まさにそれだった。彼女はクローンの体であるゆえに、いつ死ぬか分からないという爆弾を抱えてしまった。

確かに普通の人間でも、誰も自分がいつ死ぬなんてわかるわけはないだろう。

しかし、前兆はある。

長く生きれば寿命が近づくし、重病や不治の病などなら宣告によって知ることができるだろう。

だが、クローンである日下部にはそれがない。

クローンが病気にならないというのではない。

逆に、どれだけ健康な体で病気の一つを抱えていなくても、ある日タイマーが作動してしまえば何もできずに死んでしまうのだ。

なぜならそれは、すでに決められた結末だからだ。

クローンとして生まれた瞬間に、全てのクローンはその爆弾を抱えてしまうのだ。

だから、そこには誰のどんな意思も存在しない。

それどころか、爆弾と表現はしているものの、実際に爆弾そのものが仕掛けられているわけでもない。

ゆえに、取り外しも解体もできない。

こんな言葉で言い含めるのは科学者の端くれとしておかしいことだが、まさしくそれは運命と呼ぶしかないものなのだ。

それが変えられる運命ならいいだろう。

だが、これだけは絶対に覆ることはない。

何があるかと、定められたそのときを迎えれば彼女は死ぬ。

抵抗も何もできないまま、ただ死んでいく。

なぜならそれは、あらかじめ決められていた終焉だからだ。

そして、阿久津は知っていた。

予測の結果では、日下部の命が終わりを迎えるのは、どんなに遅く

ても17歳に至る前だということを。

16年前に、日下部楓の遺伝子から作られた今の日下部は16歳だ。つまり、彼女はどんなに遅くても今年が終わるまでに……死亡する。阿久津はその事実だけを、未だに日下部に伝えることができなかった。

言葉にすれば、本当に短すぎるもののに。

……言えない。

言えるわけがなかった。

決して望んで生まれてきたのではない日下部が、すでに終わりを決められて生きてきたなんて……。

「……俺には、できない……」

自分はもう、日下部に対してどれだけの罪を重ねてきただろう。

そして彼女には決して望んだ未来が手に入らないことを知りながら、今もこうしている。

それは、もはや罪を通り越している。

そんな自分が生きて、なぜ何の罪もない日下部が死ななくてはならない？

どうしてこの世界は、そんな理不尽な運命を受け入れることができるのだ？

彼女はただ、望まずに生まれてきただけなのに。

何も悪くないというのに。

阿久津は己の無力さを思い知る。

全てが自分の責任だとは思わない。

そうは思わないが、だからといってそれを理由に見捨てることなどできるわけがない。

阿久津でなくても日下部を救えることはできない。

それだけは絶対だ。

もしも奇跡なんてものがこの世界に存在するのなら、阿久津は何

を犠牲にしてもそれを手に入れるだろう。

そして日下部を救うことをためらいなく選ぶだろう。

彼女に生きる道を示せるのならば、それこそ悪魔に魂を売ったって構わない。

その手で数え切れない人だって殺してみせるだろう。

なんだってやってみせるはずだ。

その先に、確かな未来があるのならば。

「……」

阿久津は机の上に置いた拳銃を握る。

銃弾はあと5発装填されている。

だが、もうこの銃を誰かに向けることはないだろう。

阿久津は決めていた。

そしてもう、後戻りはできない。

赤嶺の命を奪っていないとはいえ、友に銃口を向けた時点でそれはもう手遅れだった。

人の命を奪う道具を人に向けたその時点で、もう阿久津は誰も救えはしない。

『お前には誰も救えはしない』

その通りだった。

どれだけ否定しても、結局は行き着く先がそこだった。

本当はずっと前から……多分、日下部を連れて逃げる前から、阿久津はその言葉に気付いていたのかもしれない。

そして同時に、決めていた。

日下部が終わりを迎えたそのときに、自分もそこで終わりを迎えよう。

だからもう、この銃は誰も傷つけない。

阿久津は弾を一つだけ残し、残りを抜いていく。

最後の一発は、彼自身を終わらせるためのもの。

やがてやってくるであろう、そのときに。

自らの頭を貫く、断罪の銃弾。

「日下部、決してお前一人では死なせない。俺も、一緒だ……」

夜が明ける。

残された時間は、阿久津が思うよりもずっと少ない。

彼女は今日も、彼と同じ月を見上げることができるのだろうか。

その答えは、誰も知らない。

3

何となくだけど分かっていた。

阿久津さんは気付いているかどうか分からないけど、彼は嘘をつくのがヘタだ。

普段からあまり表情を変えないせい、そういうときになるとすぐに分かってしまう。

阿久津さんが嘘をつくということは、それはまだ私が知らないことがあるのだろう。

だけど私は、それを無理に知りたいとは思わなかった。

まだうる覚えな部分もあるけれど、少なくとも今に至るまでの記憶はある程度取り戻した。

阿久津さんの話してくれたことにも嘘はないと思う。

それでも、私の中にある記憶なんていうものは本当にちっぽけなものだった。

時間に言い換えるなら、まだ3日程度のものだ。

結局私は、自分が生まれたそのときのことを覚えていない。

クローンだということは理解してるし、事実なのだという事も分

かっている。

けれど、やはり実感が沸かない。

遺伝子から作られたとはいえ、見た目も中身も人間そのものなのだから。

ただ、私の場合は生い立ちがちょっと普通ではないだけの話。

阿久津さんの話を聞いて、私は私自身をそう改めて認識した。

だって、どんな理由だろうと私はこうして生まれて生きているのだから。

それは確かに、望んだものではなかったけれど。

でも考えてみれば、誰だって望んで生まれてくるわけじゃないのだ。そう考えれば、私は生まれるべくして生まれたわけではないけれど、それでも生まれたことに感謝すべきなのだ。

そして生まれたからには、精一杯生きようと思う。

今の私が置かれている状況は、決断していいとはいえないものだけだ。

私は今、一人じゃないから。

この先にあることなんて、私の目には映らないけど。

それでも私は、一人じゃない。

阿久津さんがいてくれる。

そう思うと、私の心はふわっと軽くなる。

「……これって、やっぱり……」

口には出さずに、私は心の中で小声で呟いた。

好き、なのだろう。

そうだと思う。

まだはつきりとしらない部分は多いけれど、それでも私は阿久津さんに惹かれている。

考えただけで夜も眠れなくなる、とまではいかないけれど……。それでもやはり……。

「……好き、なんだろうな」

それは確かに、私達の置かれた状況がそうさせているのかもしれない。

追われる身として一緒にいるからなのかもしれない。
でもきつと、やはりそれだけじゃないと思う。

うまく言葉にはできないけど……そういうものがあるんだと私は思う。

私は枕に顔を沈めた。

眠気はもうなくなっていたけど、こうして目を閉じれば眠ることはできるかもしれない。

眠れない原因は、阿久津さんのことだった。

さっき見たあの肩のケガ。

阿久津さんは古傷が開いたと言っていたけれど、どうなんだろう。

私は医者でもなんでもないから、傷の度合いとか何が原因とかは全然分からない。

だけど……。

「あの匂いは……」

阿久津さんに包帯を巻いたとき、かすかに鼻先をかすめたその匂い。

絶対の確信は持てないけど、あれは多分……。

「火薬……」

正確にはそうではないかもしれないけど、煙のような匂いがしたのは確かだった。

そして、暗がりでは見えなかったけど、阿久津さんの脱いだ白

衣の内側に銀色に光るものが見えたような気がした。
もし、もしも。

あれが拳銃だったとして、煙の匂いが火薬だとすると、それはつまり……。

そこまで考えて、私は考えるのをやめた。

それ以上は考えてはいけないような、そんなブレーキがかかったのだ。

樂觀できるケガではなかったけど、阿久津さんが無事だったからそれでいいと思うことにした。

でも結局、そのことがあとを引きずって全然眠れない。

今こうして横になって、わずかに眠気が訪れてきたのは幸運だった。私はその眠気に身を任せて、そのまま眠りの中へ入っていった。

だけど、私は本当は分かっていたのかもしれない。

阿久津さんは拳銃を持っていて、私が知らない間にあのケガを負うような何かがあったのではないのかと。

あの肩の傷は、銃で撃たれたものなのだろう。

そうでなければ、あんな風に二ヶ所に傷口ができるはずがないのだから。

でも今は、それを知るときじゃない。

阿久津さんも自分から口を開くことはないかもしれない。

だったら、それでもいい。

今は寝てしまおう。

何もかも忘れて寝てしまおう。

明日になれば、きっと……。

第六話：見え始めた終わり（後書き）

こんにちは、作者のやくもです。

やや時間がかかってしまいましたが、とうにか六話まで書き終えることができました。

どうやら自分で思っているよりも、残された話は短いものになるかもしれません。

なにはともあれ、物語はもうすぐ終わりへと向かいます。

私としても、年内にこの物語を完結させたいなと思っています。

ですので、皆様もうしばらくお付き合いくださいませ。

それではこの辺で。

次回でお会いしましょう。

第七話：それぞれの真実

1

……ここはどこだろう？

私は起き上がろうとするが、体には全く力が入らない。腕も足も、指先すら動かすことができない。

あれ……どうなってるんだろ……。

私はゆっくりと目を開ける。

すると、そこは真っ白な場所だった。

上も下も、右も左もわからないけれど、視界に映るものの全てが真っ白。

雪景色にしては寒さを感じない。

まるで、どこまでも無限に広がるキャンバスのようだった。

「あ……」

いつの間にか体は自由に動かせるようになっていた。

私は一人、地面かどこか分からない場所に立っている。

やはりどの方角を見回してみても真っ白で、そこには何も景色らしいものはない。

触れるものもなく、聞こえる音は自分の声だけ。

太陽もなければ空もなく、風の吹く気配もない。

まるで、世界全体が止まって凍り付いてしまったかのように。

「何、ここ……」

私はおそおそと一歩踏み出す。

地面を踏みしめるような感覚は感じるが、足音も聞こえなければ地

面も見えない。

不思議な空間だったが、恐ろしさは何も感じない。

それどころか、なんだか妙に落ち着いているようにすら思える。

私は数歩ほど歩いた。

しかし、背景全体がそれに合わせて一緒に動いているような感覚を覚える。

どんなに遠くまで見渡しても、白以外のものは何一つ見えない。

仮にこれが白い大地と白い空だとしたら、きつとどこかに見えてい
るはずの地平線まで真っ白なのかもしれない。

私は歩くのをやめて、その場に立ち止まる。

そしてゆっくりと後ろを振り返って

「……！」

驚きのあまりに言葉を失った。

そこに、一人の女の子がいた。

無限に広がるこの壁紙のような場所と同じ、真っ白な服に身を包み、
小さく微笑みながらそこにいた。

「こんにちは」

唐突にそんな言葉をかけられて、私は反射的に肩を竦ませてしま
う。

おかしい、そんなはずはない。

そんな言葉が頭の中をぐるぐると回っている。

前も後ろも分からないけれど、そこはほんの少し前まで私が立って
いた場所だ。

どうしてそこに、この人がいるんだろう？

そして、この人は一体なんなんだろう？

そんな疑問ばかりを膨らませる私を、その女の子は変わらずに小さ

く微笑みながら見つめていた。

私はただなんとなく、直感的にその女の子に懐かしさにも似た感覚を覚えてしまっていた。

「こ、こんにちは……」

私はそう一言返す。

彼女はそれを確認すると、もう少しだけ柔らかく微笑んだ。

「あの、あなたは……」

私は自然と言葉を投げかけていた。

なぜかこの彼女に対しては警戒心を抱けなかった。

それどころか、会ったこともないはずなのに親近感さえ覚えてしまう。

「私？ 私……」

彼女はそこでなにやら考える素振りを見せ、うーんと小声で呟いた。

「……どう言えばいいのかな」

「……じゃあ、ここはどこなの？」

私は質問を変えてみた。

彼女が何をそんなに悩んでいるのかは分からなかったが、待っていても答えが返ってこないように感じたのだ。

「あ、それだ」

としかし、彼女はなんだかとても見当はずれな言葉を返した。

「そ、それって……どれ？」

「え？ ああ、ごめんなさい。そういう意味じゃなくってね……」

女の子は一拍の間を置いて言った。

「私は、ここ。だから、ここは私」

「……え？」

私は女の子が言っている意味がさっぱり分からなかった。

それでも女の子は微笑んだままだった。

だけど、それはふざけているようにには思えない。

かといって、女の子の言葉をそのまま鵜呑みにするのもとんでもないような気がする。

「その……ここっていうのは、ここ？」

私は足元を指差して聞いた。

すると女の子は

「そう。私は、今私達がいるこの場所そのもの。だから、この場所
は私そのもの」

言葉としては女の子の言っている意味は理解できた。

だが、理性ではそれが全く理解できない。

「それって、どういうこと……？」

「意味はないの。でも、それが真実。今私がこうしてここにいる
ことも、あなたがこうしてここにいることも。全部含めて、それが

あなたの真実でもあって、私の真実でもある」

女の子はまるで詠うように言う。

相変わらず私は意味がさっぱり分からないのだけれど、どうしても、彼女の一言一言が妙にしつくりとくる。

「無理に理解する必要はないの。今は分からなくても、いつかきっとそれがあなたの真実になる」

「……う、うん……」

私は意味もなく納得してしまった。

もちろん、全然納得できていないのだけれど。

「じゃ、じゃあ、どうして私はここにいるの？ それに、あなたは どうしてここにいるの？」

「それは、私があなたを呼んだから」

あっさりと彼女は答えた。

私はそのまま、彼女の言葉に耳を傾けた。

「まず最初に、私はあなたに謝らなくちゃいけない」

「え、どうして……？」

「私がいれば、あなたはいなかった。私がいなくなったから、あなたがいる。もう何もかもは手遅れになってしまったけど、やっぱり私はあなたにとって恨まれても仕方がない存在だから……ごめんなさい」

私はますますわけが分からなくなってしまう。

そもそもこの女の子とは今ここで初対面であって、手遅れとか言われても私にはここ数日の記憶しか残っていないので見当もつかない。

「あの、よくわからないけど……そんな、謝られるような覚えは私にはないよ？ 人違いとかじゃ……」

「言っただでしょ？ 無理に理解する必要はないって。いずれ全てが分かる時がくるよ」

「そ、そんなこと言われても……」

いきなり謝られて、理由に心当たりのないのに受け入れるというのは無理だと思う。

なんだかこれじゃあ、私のほうが謝りなくなってしまうくらいだ。

「だけど……」

彼女の声のトーンが急に落ちた。

表情は変わらず微笑をたたえているが、その笑みがどこか悲しいものに変わっているような気がした。

「全てが分かった、そのときは……」

「……」

彼女はそこで口を閉じた。

言葉を探しているのか、それとも間を置いているのか。

私にはどちらでもないような気がした。

何かこう、決して言葉にはできないようなものがそこにはあるような……そんな気がして。

「……無理に理解する必要はないんだよね？」

私がそう聞き返すと、彼女は一瞬だけ驚いて目を丸くしたが、すぐに肩の力が抜けたような小さな笑みを浮かべて

「……そうだね。それが一番、かな。きっと」

そう答えた。

どうして私はそんな言葉を口にしたんだろう。

気がついたら、私は浮かんだその言葉を口にしていた。

なぜだか分からないけど、私が彼女の立場だったら、きっとそう言
ったと思った。

「……あなたは、もう大丈夫みたい」

「大丈夫って……何が？」

「私はだめだったから。だからせめて、あなたは大丈夫なように
って思っ、あなたを呼んだんだけど……いらない心配だったみた
い」

彼女は微笑んだ。

本当に、心の底から嬉しそうに。

「それに、あなたはもう気付いているんでしょ？」

「……え？」

「……あなたという存在が、今こうしてここにいること。そして、
あなたがあなたでいられる時間のこと」

「……」

その言葉に私は俯いた。

チクリと胸の奥が痛む。

それは、ずっと心の奥にしまいこんでいたことだったから。

彼女は本当に、何でもお見通しだった。

心の中を直接覗きこまれているような、それなのに不思議と嫌な気
持ちは感じさせない。

それをあつさりと受け入れてしまう私がいる。

なんなんだろう、この感覚は。

受け入れやすいとか、親しみやすいとか、そういう言葉では言い表せなくて。

例えるなら、真つ二つに割れたカケラがぴったりくつつくのが当たり前であるような、そんな自然な……。

「……あなたは、一体……」

私が聞きかけると、彼女はまた小さく微笑んで

「私はここ。ここは私。そして、あなたもまたこの世界の一つ」
「え……」

私が言葉を続けるよりも早く、彼女は続けた。

「終わりは、始まりがある以上必ずやってくるもの。どんなに怖くてもそれから逃げてはいけない。それに、あなたは幸せだよ」

私はただその言葉を聞いていた。

詠うようなその女彼女言葉の一つ一つが、私自身を物語っていたからだ。

「だって、もうあなたは一人じゃないでしょ？」

その言葉を合図にするかのように、彼女は淡い光に包まれた。

「……私はもう、どこにもいない。けど、ここにはあなたがいる。そしてあなたには、あなたの終わりを覚えてくれる人がいる」

彼女の真っ白な服が、体が、徐々に光の粒子に変わっていく。

「私も、あなたのことを忘れない。ずっとずっと覚えてる。だからあなたも、忘れないで。私のこと、あなたのこと、そして、あなたのためにいてくれる人のこと」

光が溶け、世界を包む。

「私のせいであなたが生まれて、私のせいであなたが終わりを迎える。……ごめんね、ごめんね……」

「あなたは……」

彼女は涙を流しながらも微笑んでいた。

それが真実だと言わんばかりに、彼女は泣いていた。

「せめてあなたは、あなたの居場所で終わりを迎えて。それが、私のたった一つのお願……」

「待つて！ あなたは、あなたはもしかして……」

「……さよなら。あなたに会えてよかった。……ばいばい、日下部楓……」

「ま……」

そして、彼女は音もなく姿を消した。

まばゆいほどの光が晴れると、そこには最初から誰もいなかったかのように、真っ白な空間が広がっているだけだった。

「……あの子は」

私はそれ以上、口を開くことはなかった。

そして全てが最初からなかったように、私自身も光に包まれた。

翌朝……いや、正確にはもう昼に近い時間。

私は目を覚ましていたけれど、体中のあちこちにまだ睡魔がくすぶっていた。

体は鉛のように重いし、頭の中もまだぼーっとしている。

見上げているのはいつもと変わりのない白い天井なのに、それが近づいたり遠ざかったりしているようで距離感が掴めない。

霧に包まれたみたいに視界がぼやけて、空気が波打つように見えた。私は体を起こそうと力を入れてみるけど、やはり体は動かない。

少なくとも、自分の体重すらもまともに支えることはできなかった。仕方なく私は、再び天井を見上げた。

そこに映る白い色。

あれは夢だったのだろうか？

私は自分の身に起こった、あの夢とも幻ともつかないことを思い出していた。

私は真っ白な場所で、真っ白な彼女と出会った。

彼女は言った。

ごめんなさい、と。

今だからだけど、私はその言葉の意味が分かる気がする。

彼女はきつと、私自身だったのだろう。

正確に言えば、私と同じ遺伝子を持つ人だった。

今から16年前にこの世を去った、本当の日下部楓だったのだろうと私は思う。

どうりで、私は彼女に親近感のようなものを覚えたはずだ。つまりところもう一人の自分だったのだから、当たり前だ。

彼女は悔やんでいたのかもしれない。

私は、彼女がどういう理由で実験体として選ばれたのかを知らない。だけど、彼女は実験体にされたことによって、そこから私という自

分の分身を作り出され、その分身である私が背負う運命を知った。
彼女は言っていた。

私は恨まれても仕方のない存在だから、と。

私がいなくなっただから、あなたが生まれたのだと。

それは決して彼女の意思ではなかったのだろうけど、結果として私はクローンとして生まれた。

彼女はそこに、言いようのない後悔を感じていたのかもしれない。

だから、もう手遅れだと分かっているとしても、伝えずにはいられなかったのだろう。

私が背負った運命を。

私が辿る道を。

私が終わるときを、彼女は全て知っているのだろう。

そして私自身も、そのことには薄々と気がついていった。

眠れない夜というのは残酷なものだった。

いやでも考え事をしてしまう。

私はもうちょっとバカな頭で生まれたかった。

せめて、自分の結末がそう遠くない未来だということを気付けないくらいのバカでいたかった。

彼女が繰り返し返していた真実とは、このことだったんだろう。

私がいなくなると、終わりのときを迎えてしまうということ。

それはきつと、阿久津さんが今でも抱えたままにいる言い出せない言葉と同じもので。

うまくもない嘘を並べてでも、私に悟らせたくないことなのだろう。
だから私は、阿久津さんを責めることもないし、そういう気持ちにもならない。

それが彼の優しさからのことだということは、ちゃんと分かっているつもりだったから。

私は静かに目を閉じた。

「……もう少し、寝てよ」

独り言が静寂の中に溶けていく。

怖くないといえ、それはきつと嘘になる。

いつだって、私の本音は生きたいと叫んでいる。

だけどそれは、叶わない願いだということも知っている。

だから私は、生きていられる時間を精一杯に生きるしかない。

本当は今だって、寝ている時間さえもつたいないと思うくらいなんだけど。

だけど、今だけはこうしていいといけない。

こうしていれば、誰にも涙を見せずにすむから。

阿久津さんにも、もう一人の私にも。

たとえ私に残された時間が、もう絶望的なまでに少ないものだとしても。

私は最後のそのときまで、笑っていられたらいいと思う。

そのときに流す涙も、嬉し涙がいい。

だから、今のうちに泣いておこう。

悲しみの涙は、全て枯れさせよう。

『私のせいであなたが生まれて、私のせいであなたが終わりを迎える』

それは彼女の言葉だった。

だけど私は、彼女を恨むことなどできない。

それどころか、私は生まれてきたことを不幸ばかりとも感じられなかった。

だって、私は今こうして生きているから。

それは望まぬ生だったかもしれない。

そう言われれば、私はその言葉を否定しない。

それでも、私は生きているから。

それを幸せと思えないはずがない。

『せめてあなたは、あなたの居場所で終わりを迎えて。それが、私のたった一つのお願い』

居場所……。

私はもう、その場所を決めていた。
いや、そうであってほしいと思う。

きっと私は、その言葉を口にしたら泣き出してしまうだろう。
聞いた彼は、ふざけるなど叫ぶかもしれない。
それでも、いい。

今の私が日下部楓として歩んだ道のりは、あまりにも短すぎるもの
だけだ。

その中で私の居場所は、一つしかない。

『あなたは幸せだよ』

今なら、私は答えられる。

『ありがとう』

3

それはまだ、分かれ道に迷わなかった頃。

……いや、そもそも道が分かれてすらいなかった頃だろうか。

「……詭弁だな」

「ああ。その通りだ」

赤嶺はあっさりと切り捨てた。

と同時に、その手の紙束をテーブルの上に撒いた。

「もう一度聞く。恭祐、君は正気か？ 正気かつ本気でそんなことを考えているのか？」

一体何があっただんと言わんばかりの赤嶺の視線を流して、俺は答えた。

「何度も言わせるな。俺は俺の意思で動く」

「……そうか。ならば僕はもう君を止めることはできないし、止めようとも思わない」

赤嶺は静かに呟いた。

その言葉が決別を意味しているということは、俺はとっくに理解していた。

「だが、なぜだ恭祐？ なぜ僕にこのことを話した？ 僕が協力すると思ったからか？」

「……仮にお前に協力を求めて、お前がそれを承諾したとしても、俺は一人で動くつもりだ。関係のない人間は巻き込むつもりはない」

「恭祐、それは矛盾している。君はすでに彼女を巻き込むことを前提で話をしているじゃないか……」

「そうでなければ、俺は彼女を救えない」

「それはそうだが……」

赤嶺は言葉につまり、奥歯を噛み締めるようにして俯いた。

「……礼二、勘違いをするな」

赤嶺は俯いたままだったが、俺は構わずに続けた。

「俺がお前にこのことを話したのは、何も話さずに俺が行動を起こしたらお前は必ず首を突っ込むからだ。そうすれば、お前にも少なからず危険が及ぶ。だからこれは、そのための事前通達みたいなものだ」

「……もう、君の意思は覆らないのか……？」

震えかけた声で赤嶺は言う。

俺は目を閉じ、一拍の間を置いて返した。

「ああ。これは決別だ。次に会うとき、俺はお前に殺されても文句はないさ」

「……分かった。悲しいが、これも運命というものなんだろう」

「……使いたくない言葉だが、そうなのかもな……」

二人の間に沈黙が流れる。

互いに目を伏せ、一言も発さないまま時間が過ぎた。

「……本当に」

沈黙を破ったのは赤嶺だった。

「どうしたんだ、恭祐。何が君をそこまで駆り立てる？ 彼女は……クローンなんだぞ？」

赤嶺は顔を上げて、すがりつくような目で俺を見ていた。

ただ俺は、赤嶺を納得させるだけの言葉を持ち合わせていなかった。

「……自分でも分からない。どうしてなんだろうな」

俺はテーブルの上の紙を一枚拾い上げた。

「礼二、お前は目の前で助けてと言われたら、それを無視できるか？」

「……分からない。状況次第で返答はいくらでも変わるものだ」
「嘘だな」

俺は言い切った。

赤嶺の表情が一瞬凍りつく。

「同じことだ。俺には、彼女が助けてくれと叫んでるように見えた。多分、それだけなんだ」

「……恭祐、君は……」

俺は自虐的な笑みを浮かべ、言った。

「結局、俺もお前もまだまだ甘いつてことなのかも……」

赤嶺は何も言い返さなかった。

赤嶺から見た俺が優しすぎるように、俺から見た赤嶺もまた優しすぎる人間だったのだ。

だから俺は、こうして面と向かって決別を伝えることを選んだ。

何も告げずに行動を起こせば、きっと赤嶺は真相を探ろうとするだろう。

しかしそれは、俺が望むものではない。

あらかじめ事実を伝え、予告をすることで、俺は赤嶺の行動に制限を加えた。

そうすれば、少なくとも自分の周りに巻き込まれる人間はいなくなる。

たった一人、彼女だけを除いて。

「礼二、これを持っていてくれ」

ゴトリと音がして、銀色のそれは姿を現した。

「拳銃！？ 恭祐、これは……」

「もしもこの先、お前が今日の俺を全て否定するときがきたら、その銃口を俺に向けてくれ」

「な……」

「そしてそのとき、俺にわずかでも迷いがあればおとなしく撃ち殺されよう。だが、俺が今の気持ちを変わらずに持ち続けていたら、そのときは……」

俺は内ポケットの中から、もう一つ同じ拳銃を取り出した。

「俺も、お前に銃口を向ける」

「……………」

再び静寂が訪れた。

互いの手の中には、冷たく重い銀色の拳銃。

「……時間をとらせてすまなかった。話は、それだけだ……」

俺は拳銃をポケットにしまい、赤嶺に背中を向けて歩き出す。言葉には出さないが、これが別れだ。

初めて友と呼べるようになった男との別れだ。

「恭祐！」

赤嶺が叫んだ。

俺が振り返ると、赤嶺はそのてに銀色の拳銃を構えて、俺に銃口を向けていた。

「……もしも」

赤嶺の声が微かに震える。

「そんなバカなことはやめろ。やめなければ撃つ。……そう言ったら、どうする？」

銃口は真っ直ぐに俺の顔面を捉えている。

拳銃には銃弾も装填してあるから、赤嶺が引き金を引けば、当たり前によつては俺は即死するだろう。

だけど俺は、立ち止まらない。

立ち止まるわけには行かない。

言葉には告げず、背中を向けて歩き出した。

「礼二、お前は優しすぎる。だから、撃てない……」

そう、聞こえない小声で呟いた。

そして案の定、礼二は引き鉄を引くことはできなかった。

そうして俺達は、別れの日を終えた。

これが終わりの始まり。

どちらが正しいか間違っているか、自分が正義か悪かさえも分からない、小さな物語が動き始めた日だった。

第七話：それぞれの真実（後書き）

こんにちは、作者のやくもです。

今回は今までと違って、一人一人の回想などがメインの話となりました。

ようするに物語が終わりに向かっているということなんですけどね。次回の第八話が最終になるかどうかはまだわかりませんが、とりあえずは最後までがんばってみようと思います。

ここまでお付き合いしながら読んでくださった読者の方々、正直言つて物語としてはかなりできの悪いものだと自分でもよくわかっています。

それでもお付き合いいただいていることに、改めて感謝いたします。では、また次回お会いしましょう。

せめて最後は、皆さんの心に何かを残せる終わりを綴りたいと思っています。

第八話：その手が最後に掴んだものは

1

窓越しに入ってくる夕陽で、廊下はどこまでも淡いオレンジ色に染まっていた。

がらんだようなその場所を、足音だけが淡々と響いている。

阿久津が目を覚ましたとき、時刻はすでに午後の四時にさしかかったところだった。

大体半日近くも眠っていたことになる。

起き上がったときは頭が重くて仕方がなかったが、肩の痛みがむりやり意識をはつきりとさせてくれた。

こんなにたつぷりと睡眠をとったのは何年振りだろうか。

寝すぎると逆に眠くなると聞いたことはあるが、それもまんざら嘘ではないようだ。

阿久津は廊下を歩きながらそんなことを思っていた。

顔を洗って少しは眠気がなくなり、逆に夕刻の肌寒さが身にしみてきた。

阿久津は立ち止まり、その扉をノックした。

「日下部、起きているか？」

コンコンと扉を叩くが、中から返事はない。

まだ眠っているのだろうか。

今の今まで阿久津も寝ていたので、無理に起こすつもりはない。

だが、さすがにそろそろ腹も減ってくるのではないかと思う。

夜中から今まで眠ったままだとすると、朝食も昼食も何も食べていないことになる。

もつとも、阿久津としてはそこまで腹が減っているというわけでも

ないのだが、食事を作るならまとめたほうがいいだろう。

「日下部、入るぞ」

阿久津は静かに扉を押し開けた。

部屋の中は薄暗く、開けた扉から差し込む夕陽の光が実際よりも明るく映えた。

思ったとおり、日下部はベッドの上で体を横にしていた。

反応がないということは、やはり眠っているということなのだろう。阿久津は足音を立てないようにそっと近づき、ベッドを見下ろした。

日下部は静かに眠っていた。

わずかに体を曲げているその寝相は、怯えているような仕草を思わせる。

だが、寝顔だけは幸せそうだった。

阿久津も思わず笑みがこぼれそうになるが、逆にその笑顔が残酷にも思えた。

日下部が安心して眠れる夜など、これまでに一夜としてあったはずがないのだから。

真実を知らない彼女にとって、それは幸せな眠りだったのかもしれない。

だけど、阿久津から言わせればそれはありえないことだった。

逆に、この眠りから覚めて朝を迎えることが、彼女にとっての幸せなのだから。

限られた時間の中で、彼女は何を思っ生きているのか。

きつと、終わりが来ることなんてこれっぽっちも考えないだろう。考えたくもないだろう。

でも彼女は、もう普通の生活を送ることすらできない。

同じ年代の人々のように学校に通うことも、買い物をすることも、遊んだりすることも。

全て奪われた。

彼女が生まれたその日、彼女は全てを奪われたのだ。

彼女の目に映る世界は、偽りだらけのものだろう。

そこには自由も何もなく、彼女はその足で歩けるのにどこにも行けない。

籠の中の鳥。

どれだけ大きく美しい翼でも、籠の中では広げることすらままならない。

やがて折りたたんだままの翼は、もはや使い物にならなくなるだろう。

いつだって自由に空を飛べたはずなのに、風を感じることができたのに。

それはもう、ただの飾りにしかない。

あとはもう、羽毛が散るのを待つだけ。

最初から、彼女には自由など与えられてはなかった。

あったのは全部、見せ掛けだけのレプリカ。

それが、彼女の走るレールの上だった。

あらかじめ終わることを前提に走らされるだけの、奈落へのレール。

それでも彼女は走っていたのかもしれない。

その先に、未来があると信じて。

明日があると信じて。

ただ、自分らしくあることだけを信じて。

「……」

阿久津は出かかった言葉なんかを呑み込んだ。

たとえ眠っているとしても、日下部の前でそんな言葉は言っていない。

言えば彼女は、きっとまた泣き出してしまっから。

阿久津はタオルケットを静かに持ち上げ、日下部の体を隠した。

日下部は変わらずに、小さな寝息を……。

「……？」

そこで初めて、阿久津は違和感を感じた。

日下部が寝息を立てていなかった。

胸も上下していない。

呼吸を、していない。

「日下部！」

阿久津は叫んだ。

まるで死体のように横たわっている彼女の体を揺さぶる。

肩に痛みが走るが、そんなことは構っていられない。

なりふり構わず、阿久津は日下部の体を抱きかかえた。

「日下部！ 返事をしろ日下部！」

彼女の細い腕を、小さな肩を揺らす。

軽く頬を叩き、何度も何度も呼びかける。

しかし、彼女の口から返事はない。

抱きかかえた日下部の体は、ぞつとするほどに冷え切っていた。

体温が著しく低下している。

阿久津はタオルケットを彼女の体に巻きつけ、少しでも体温を取り戻そうとする。

だが、それでも彼女は目を覚まさない。

彼女の両腕両足は力なく垂れ、まるで折れる寸前の古木のようにだった。

阿久津はすぐるような思いで日下部の手を握る。

細い指先は氷のように冷たく、まるで血の流れを感じさせない。

それでも阿久津は、彼女のその手を握って離さない。
何度も何度も呼びかける。

彼女の名前を呼ぶ。

こんなことがあつてはならない。

こんなに早く、終わりのときを迎えていいはずがない。

それは阿久津の中の確かな矛盾だった。

日下部が終わりを迎えたときは、自らも死を選ぶと決めた。

だが、その終わり方がこんな形であつていいはずがない。

それは、決して自らの命惜しさから起こった矛盾ではない。

せめて、せめて最後は、彼女が望んだ場所で彼女の望んだ世界を見せてやりたい。

たったそれだけのことだった。

しかし、阿久津の想いとは裏腹に運命は残酷だった。

こんなにも唐突に、その兆しがやってきてしまうなんて。

阿久津は改めて自分の甘さを呪った。

もしかしたら自分は、頭のどこかでまだ少しくらいは時間があるだろうとか、そんなあるはずのない希望を抱いていたのではないのか。確かにそれは一縷の望みだった。

そう思ってしまうことは何の不思議もないことだっただろう。

しかし、現実が違う。

日下部は１７歳に至るまでに、確実に死亡する。

それは、もはや覆すことのできない事実だ。

その事実から目を背け、逃げ出していた。

いや、向き合つてすらいなかったのかもしれない。

阿久津は奥歯を噛み締める。

今すぐに自分の頭を撃ち抜いてやりたい気分になさなってくる。
だが、それでどうなるというのだ。

少なくとも、阿久津はこんな結末を望んではない。

そしてそれはきつと、日下部だつて同じはずだ。

阿久津は日下部の手を握り締める。

彼女の細い指が痛み出すくらいに、強く、強く。
その肩を抱く。
名前を呼び続ける。
もはや、神に祈るかのように……。

トクン

そしてそれは、まさしく奇跡と呼ぶに相応しかった。
阿久津はその微かな鼓動を、確かに聞いた。
自分の腕の中で抱いた少女の胸から聞こえた、小さなその音を。

「……………日下部……………」

少女の前髪が揺れる。

小さく胸が上下し始め、阿久津が握り締めた彼女の小さな手の細い指が、弱々しくも確かに握り返した。

そして、閉じていた少女の目がゆっくりと開く。

細く、少しずつ大きく。

唇が、揺れる。

「……………阿久津、さ……………ん？」

その声を聞いて、阿久津は日下部の体を強く抱きしめた。

色々な想いが頭の中でごちゃごちゃになって、言葉が何も出てこない。

ごめんなさいでも、大丈夫かでもない。

きっと、この感情はそんな言葉じゃ覆い隠すことができないだろう。

だから、たった一言。

阿久津は呟いた。

恐らく、生まれて初めて口にする言葉だろう。

「……死ぬな、日下部……。頼むから……。死ぬな……」

誰かのために涙を流したことがあっただろうか？

少なくとも、阿久津は初めてだ。

それが単なるわがままと分かっていても。

取り返しのつかないことだとしても。

もう、これ以上抑えることはできそうにない。

2

「私、分かってました。なんとなくですけど……。自分の体のことでしたから……」

阿久津の腕の中、日下部は言った。

阿久津は日下部の背中から腕を回し、彼女を抱きとめるように座っている。

静かに抱いた彼女の背中は怖いほどに小さく、今でも肩は小刻みに震えるときがある。

「……そうか。すまない、どうしても俺には言い出せなかった」

阿久津が低い声色で返すと、日下部はそれは違うと言つ代わりに小さく首を左右に振る。

「謝らないでください。もしそのことを面と向かって言われたら、私はどうになっちゃったと思うんです」

日下部の声は優しかった。

阿久津はそれが逆に悲しくて仕方がない。

「それに私、自分でも不思議なんです。もうすぐ死んじゃうって分かってるのに、全然怖くないんです。あはは、おかしいですよ、ね、こんなのって……」

「日下部……」

阿久津はそれ以上言葉が続かず、ただ日下部の体をわずかに引き寄せた。

彼女の華奢な体は、少し力を込めてしまっただけで崩れ去ってしまい、そうなほどに小さかった。

「……俺は、何もできないんだな……」

「阿久津さん……」

「口ではいつもそれらしいことを言っているくせに、結局のところ俺には日下部のためにしてやれることなんて何一つなかった。お前を救うことはおるか、延命させることもできない。お前の悲しみや苦しみを分かち合うことも、消し去ってやることもできない。俺は一体、何のためにこの道を選んだんだ……」

阿久津は目を伏せる。

何もかもが許せなかった。

望まぬ生を与えたこと。

望まぬ死を与えてしまうこと。

始まりを知っていたこと。

終わりを知ってしまったこと。

それらはもう、決して戻ることはできない、取り返しのつかない過去の過ち。

そうと分かっている、後悔しか浮かんでこない。

どれだけ自分を責めても答えなど見つからないと分かっている。そんなことを日下部が望まないということも分かっている。

そこまで分かっていたとしても、やはり阿久津はあまりにも無力だ。生を奪うことはいとも簡単なことなのに、間近に迫る死はどうあっても奪い去れない。

「俺は結局、お前に何も与えてやれない……。明日を、未来を、生きる希望を……。全部俺が、奪ったんだ……」

「……うつん、それは違います」

日下部の声に、阿久津はわずかに顔を上げる。

日下部は笑っていた。

あの優しい笑顔で、確かに笑っていた。

「私はもう、阿久津さんからいろんなものをもらってます。それは、普通に考えれば些細なものなのかもしれないけど、私の中の世界では、その全部がかけがえのない宝物です」

「……違う、違うんだ。俺はもっと、平凡でもいいから当たり前の幸せを与えたかったんだ……」

「……だったら、私はもうそれをたくさんもらってます」

阿久津は自分の耳を疑った。

それでも目の前の彼女は、笑ったままだった。

「私は、自分がクローンだということを知って、正直言って驚きました。それからだんだんと不安にもなりました。私という人間は、本当にこの世界にいてもいいものなのか。今すぐにでも消えてしまえばいいんじゃないかって……」

「……」

「だけど、阿久津さんが教えてくれたんです。私は自分の意思で笑いたいときに笑える。泣きたいときに泣ける。そして、誰かのために笑うことができる。誰かのために涙を流すことができるって。」

私、その言葉を聞いたとき本当に嬉しかったです。もしもこの世界に、私を認めてくれる人がいなくても、阿久津さんさえいてくれればそれでいいって思えたんです」

日下部の言葉の一つ一つが、阿久津の心を揺らす。
彼女は言ってくれた。

これほど弄ばれた運命の下に生を受けながらも、刹那のように短い命を与えられながらも。

それでも彼女は、この世に生まれたことを不幸だとは思っていない。自分自身が不幸だとは思っていない。
だから、言っのdarou。

「私は、幸せです。クローンだけど、生まれてきてよかったです」
「……っ！」

阿久津はもう何も言えない。

日下部と目を合わせることもできない。

腕の中の彼女はこんなにも小さく、儚げなのに。

彼女の心は、ずっとずっと強かった。

生を受け入れ、死を受け入れ、全てを受け入れた。

それは確かに、望んだ生ではなかったけれど。

それは確かに、望んだ死ではないのだけれど。

それでも彼女は今、ここにいます。

呼吸をして、言葉を紡いで、笑顔を見せてくれている。

それだけで、生きていえるだろう。

「すまない……すまない、日下部。俺は、俺は………」

「いいんです。これでよかったんです。……本当は、ちよつと……
ちよつとだけ、残念ですけど」

日下部は目の端に涙を溜め、それでも笑っていた。

まるで、阿久津を安心させるために無理しているようだった。

ふいに日下部は、何かを求めるように腕を上げた。

彼女の小さなてのひらが、おぼつかない様子で宙を泳ぐ。

阿久津はその手を優しく取る。

彼女の手は阿久津の手より一回りほど小さく、すっぽりと中に収まってしまう。

「阿久津さんの手、大きいですね……」

「……お前のが小さいんだよ」

そう言い返すと、日下部はまた小さく笑った。

そしてその拍子に、目の端に溜まっていた雫が静かに彼女の頬を伝った。

「阿久津さん……」

「……なんだ？」

「お願いが、あるんです」

二人の時間が止まる。

阿久津は胸が張り裂けそうになった。

だが、それを必死で堪えて答える。

「俺にできることなら、何だつてやってやる」

「じゃあ、ちよつとわがママを言っちゃおうかな……」

「……ああ、いいぞ」

日下部は一度目を閉じて、ゆっくりと目を開き、言った。

「ここを……阿久津さんの腕の中を、私の最初で最後の居場所に

させてください……………」

日下部は阿久津の胸に顔を埋めた。

そこからは、彼女の小さな嗚咽が聞こえ始めていた。

阿久津はすぐには答えられなかった。

答えてしまったら、全てを受け入れてしまうことになる。

だからといって拒絶できるわけがない。

これが日下部の……彼女がどれほどの想いの中で出した結論なのか、阿久津にはよく分かっていなかった。

だから阿久津は、あえて何も答えなかった。

答える代わりに、彼女の頭と背中に腕を回し、今まで生きてきた中で一番強く、そして強くその体を抱きしめた。

「……………ないです」

それは、彼女の叫び。

「……………なんか、ない……………」

それは、彼女の想い。

「……………死にたくなんか、ないです……………」

それは、彼女の全て。

「生きてみたいです……………自由なんかなくてもいいから、ずっと阿久津さんと一緒にみたいです……………」

日下部は泣き続けた。

阿久津はまだ涙を堪えていた。

ここで泣いてしまえば、何もかもがむだになってしまうような気がしたのだ。

「……生きてください」

「日下部……」

その言葉が自分に向けられたものと、阿久津は不思議と理解できた。

「生きてください。私の分まで、生きてください。お願いします……」

日下部には分かっていたのだろう。

彼女が死ねば、阿久津もそう遠くないうちに自ら命を絶つだろうということを。

阿久津はそれを責任とか、報いとか、そういう言葉で片付けるかもしれない。

だけどそれは、日下部にとってあつてはならない結末だった。

生きてほしい。

いなくなる自分の分まで生きて、いつの日かその手で何かを掴んでほしい。

彼女が見ることのできなかった景色や、聞くことができなかった音や、感じることもできなかった温もりを。

いつか、どこかで。

そう願って、日下部は想いを告げる。

「……生きるよ。お前の分まで。だから、安心しろ」

日下部が胸の中で頷くのが分かった。

顔は見えないけれど、彼女はきつと微笑んでくれている。

「……ありがとう、阿久津さん。私、本当に幸せでした。一緒に過ごした時間はとても短かったけれど、それでも私は大切なものを手に入れることができました。それはきっと、人の一生の中で一番大切なものなんだと思います。だから私は、もう何も思い残すことはありません……」

そこに続く言葉を否定できたら、どれだけいいだろうか。

阿久津には分かっていた。

そこに続く、たった一つの言葉が。

聞きたくない。

逃げ出してしまいたい。

幾重にも重なる悲しみを振り払って、阿久津は日下部の体を抱きしめた。

そして彼女は、最後の言葉を紡ぐ。

「さよなら……」

阿久津の背中に回されていた彼女の腕が、ストンと落ちる。抱きしめたその体から伝わっていた、小さな鼓動が止んだ。日下部は、もう二度と覚めることのない眠りについた。

「……………っ！」

そして阿久津は、声にならない声で泣いた。

だんだんと腕の中で温もりを失っていく、彼女の体を強く抱きしめたまま。

光陰矢のごとし、という言葉がある。

「早いもので、もう半年か……」

「そうだな……」

運転席の赤嶺は独り言のつもりでそう呟いたのだろうが、意外にも助手席の阿久津はしっかりと返事をした。

「なんだ、起きていたのか」

「寝るといった覚えはない」

そう答えた割には、阿久津はどこか眠たそうな顔をしている。

「その性格は相変わらずだな、恭祐。いや、むしろ磨きがかかったと言ってもいい」

「褒めるのかけなすのか、どっちかにしてくれ」

「冗談だ。真に受けるな」

「……暇なやつめ」

阿久津は窓の外の景色に目を向けた。

桜の花はすでに散り終え、季節は春から夏へ向けてゆっくりと移り変わろうとしていた。

山々には新緑が芽生え、若葉も芽を出す。

気温もほどよく暖かく、もはや言うことはない。

半年前のあの日の夜、阿久津はことと同じ道の上を無我夢中で走っていた。

今と違い、運転は自分でしていた。

そして後部座席には、独りの少女が眠っていた。

ふと阿久津は、後部座席に目を向けてしまう。

しかし当然のように、そこには誰の姿も映ってはいない。

あるのは途中の花屋で買ってきた花束だけである。

「どうした？」

運転中の赤嶺が聞いてくる。

「なんでもない。余所見をするな」

阿久津は適当にはぐらかし、再び窓の外に目を向ける。

その映る景色に民家や建物などはほとんどない。

二人を乗せた車はすでに山奥へと続く道に差し掛かっていた。

ほどなくして、車は公道を外れて山へと続く道を駆け上がる。

地面は砂利道で、車の中はガタガタと何度も揺れた。

周囲を雑木林にぐるりと囲まれ、昼間でも太陽の光があまり届かないその場所に、それはあった。

半年前と変わらない姿で、その建物は残っていた。

「到着、と」

赤嶺よりも早く、阿久津はシートベルトを外して車を降りた。

運転席の赤嶺もそれに続く。

二人の目の前には、廃屋のような建物がポツンと佇んでいた。

だが、二人とも忘れてなどいなかった。

いつかの夜、この場所で互いに銃口を向け合っていたそのことを。

「……懐かしいか？」

赤嶺が聞いた。

阿久津はしばし建物を見続けてから答えた。

「……そうだな。まだ半年しか経ってないが、懐かしいといえは懐かしい」

言いながら、阿久津は赤嶺の右手に目を向けた。

「手、大丈夫だったのか？」

「ん？ ああ、大丈夫だったよ。特に後遺症とかもなかったしね。大体、そんなものがあつたら運転なんかできたもんじゃないよ」

そう言つて赤嶺は笑つた。

赤嶺の右手には、阿久津によつてつけられた傷がある。

同様に、阿久津の左肩にも赤嶺によつてつけられた傷がある。

どちらも生死に関わるほどの大きな傷ではなかったが、あの夜のことは今でもお互いの記憶の中に鮮明に残っていることだろう。

「それよりも、早く目的を済ませてしまおう。あまりうろついてるような場所でもないだろう」

「ああ、そうだな」

阿久津は車の後部座席から花束を取り、建物へと近づいていく。お世辞にも頑丈そうに見えない外壁を周り、ちょうど建物の裏手になる場所へ向かう。

その片隅に、その場所はあつた。

周りが木々で覆い尽くされる中、そこだけがぽっかりと開けていた。そしてその中央に、一つの石が置かれていた。

「それが、彼女の……」

「……そうだ」

阿久津は答えて、そつとその墓石に近寄つた。

石の前に花束を置き、膝を折り、目を閉じて両手を合わせた。

「……また、会えたな」

阿久津は小さく微笑んでそう言った。

答えは返ってこなかったが、吹いた風が墓前の花を揺らし、それが阿久津には彼女の声のように思えた。

「色々あったが、こうして生きてきたよ。お前との約束だったからな」

それはもう届かない言葉なのかもしれない。

だが、たとえそうだとしても、阿久津は彼女に伝えなくてはいい言葉がある。

その答えを見つけるのに、季節は二つも巡ってしまったけれど、届くんじゃないかと思う。

今なら、迷わずに言えるから。

「生きていくよ。これから。つまづいてばかりの道かもしれないけど、それでも生きていくよ。ずっと……」

阿久津はそれだけの言葉を告げて立ち上がった。

「もう、いいのか？」

「ああ。十分だ」

「……そうか。なら、行こう」

赤嶺はもと来た道を歩き出す。

阿久津もその背中に続いて歩き出した。

そのとき、ふいに阿久津は誰かに手を掴まれたような気がした。

その手は、阿久津のてのひらよりも一回り小さく、でもなにものにも変えがたい温もりを持っていて。

『阿久津さんの手、大きいですね……』

阿久津は決して振り返らずに、その小さなてのひらをぎゅっと握り締めた。

それは紛れもなく、あの時間を共に過ごした彼女の温もりだった。できることなら、いつまでも感じていた暖かさ。

だけど、阿久津はその手を静かに解く。

きつと彼女も、それを望むだろう。

阿久津は再び歩き出した。

その背中に、確かなあの日々の記憶と彼女の笑顔を残して。

この先、どれだけの季節が流れても、阿久津は生涯、この場所で過ごした短すぎる日々を忘れることはないだろう。

そしてまた、今日という一日を生きるために、阿久津はその確かな一歩を踏み出した。

ずっと……ずっと見ています。阿久津さんの歩く、未来を……。

第八話：その手が最後に掴んだものは（後書き）

こんにちは、作者のやくもです。

「きみのてのひら」、この第八話で完結となります。

まずはこの拙い作品に最後のときまでお付き合いくださった読者の皆様方に、改めてお礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。

こんな穴だらけの作品でも、日に日に何人かの方々に読んでもらえるだけでとても嬉しく思います。

ひとまずこの物語はここで完結を迎えます。

次にお会いするときは新たな作品になると思いますが、その際は今よりもいくらかいい作品を書き上げられるように努力しますので、機会があればまたご覧になってください。

最後になりましたが、図々しいとは思いますが、最後まで読んでくれた方などは感想など交えて評価してくださると、今後の励みになります。

それでは、これにて私の初作品は完結です。

また次回作でお会いできることを願いつつ、ひとまずお別れの言葉とさせていただきます。

それでは、また遠くない未来で……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3075a/>

きみのてのひら

2010年10月28日00時43分発行